

第1課 教会学校の基礎知識

暗唱聖句 ヤコブの手紙 3:1

1 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。
ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。

2000 年前、ユダヤ人の家庭では、子どもたちがラビ(すなわち、教師)になることが大きな夢でありました。そのことは、ラビという職業やその地位に伴う権威と尊敬とに、多くの者たちが憧れていたということに他なりません。しかし、聖書のみことばは、必ずしも、救われた者皆が教師となるべきことを勧めてはいません。むしろ、ヤコブは、教師たる者は、神から与えられた務めの重大さゆえに、まず、主のみこころというものを求め、それに従って行動するよう促すのです。

この課では、教会学校の教師である(あるいは、教師になろうと考えている)皆さんに、教会学校の教師として、最低限、知っておいていただきたい事柄について説明しています。どうぞ、万物の創造主であられ…、また、私たちの主であられる神のみこころというものを十分に理解した上で、益々、教師としての奉仕を全うしていただくように願います。

A. 教会学校の成り立ち

1. イギリスにおいて…

教会学校(日曜学校)の源流であると言われているのは、1780 年のイギリスでの活動です。その当時、産業革命の影響を受けて、一般教育を受けることもできず、重労働を課せられていた幼少年労働者たちに対して、印刷業兼ジャーナリストであったロバート・レイクス(Robert Raikes: 1736-1811)が、宗教教育と一般教育とを、その労働者たちに施すようになったのです。当初、そこには有給の教師がいて、読み方やカテキズム(教理問答)を教えました。

一般教育さえ受ける機会が無かった子どもたちは、ここで読み書きを覚え、聖書のみことばを学ぶことができるようになりました。やがて、この運動は多くの人々によって支持されるようになり、ジョン・ウエスレーもこの働きを非常に高く評価し、支援するようになりました。

2. アメリカにおいても…

その後、アメリカにおいても、ジョージ・ワシントンや、アブラハム・リンカーン等、歴代の大統領や、アンドリュー・カーネギーら多くの実業家たちも、幼少時代に聖書の教育を受けて育ちました。例えば、アブラハム・リンカーンは、貧しい開拓農民の子どもとして育てられましたが、母親は、いつもリンカーンに対して、「どんな立派な人になるよりも、この聖書を実行する人になって欲しい。」と言って、育てたそうです。

3. 日本における教会学校の始まり

日本における教会学校が始まったのは、1864 年 6 月に、医師であり宣教師でもあったヘボン博士 (James Curtis Hepburn: 1815-1911) 夫妻が、横浜外人居留地 39 番地で始めた第一日曜学校だと言われています。

その後、1869(明治 2)年には、ミス・ギターによって、女子教習所(後のフェリス女学院)が設立されるなど、各所で宣教師による働きが活発になっていきました。1872(明治 5)年には、長崎でスタウト宣教師が、また、弘前でウォルフ宣教師が、伝道への門戸を開くために、児童伝道を始めたという記録が残っています。

それから、1873(明治 6)年、時の政府が切支丹宗禁制の高札を撤去し、その後、教会学校の働きは益々全国的なものへと広がっていくようになりました。

4. 結論

このように、教会学校の働きとは、2000年というキリスト教の歴史と比較すると、わずか数百年という短いものとなります。その主な理由は、聖書中に、その直接的な教えを見出すことができないことに起因しており…、それ故に、初代教会の歴史においても、教会学校の働きを見出すことはできません。

聖書が教える、子どもたちへの監督責任は、何よりもまず、その親たちにあることは明白です。そういった意味において、教会学校の働きとは、決して、教会の中だけのものではなく…、子どもたちの保護者との連携が必要であると言えるのではないのでしょうか。

- 4 聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。
- 5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。
- 6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。
- 7 これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。
- 8 これをしるしとしてあなたの手結びつけ、記章として額の上に置きなさい。
- 9 これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。』 申命記 6:4-9

- 1 子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。
- 2 「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、
- 3 「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。
- 4 父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。 エペソ 6:1-4

B. 教会学校の必要性

1. 聖書の教えと、現代の子どもたちを取り巻いている環境に関して…

旧約の時代、神はイスラエル全体を導き、様々なリーダーたちを通して、直接的にも間接的にも、彼らに必要な教えを与えてくださっていました。そのため、イスラエルは、その共同体すべてが、ある程度、真の神とそのみこころに関する知識を有していました。

そのことは、初代教会においても然りです。新約聖書の書簡は、その大半が神を信じ仕えようとしていたクリスチャンに向けて書かれています。それ故に、そのクリスチャンたちは、自分たちの子どもを神の前に整えられた者としていくために、各家庭において、聖書的な教育を施したはずなのです。

それに対して、現代の日本には、様々な価値観が錯綜し、無神論的な教育論が蔓延しています。また、子どもたちを正しく教え、導くはずの親たちのモラルが崩壊し、子どもたちへの愛が欠如してしまっている場合が見受けられます。そんな中で、子どもたちは、日々、様々な影響を受けながら成長しているのです。

2. 教会学校の目的とその意義

例え、聖書の中に、教会学校に関する直接的な教えを見出すことができなくても、幼少時代に聖書の教育を受けて育つことに、大きな価値があることは明白です。子どもたちが早い内から、自分の存在や生きていく意味を見つけ…、例え、逆境の中にあっても希望を失うことなく、正しく価値ある人生を送っていくためにも…、そして、何より、神の与えてくださる永遠のいのちを得るためにも、教会による聖書教育には、測り知れない意義があります。

- 1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、ま

た「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。

13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。

14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。』

伝道者の書 12:1、13-14

3. 教会内に見ることのできる教会学校のモデル

確かに、聖書中に教会学校の存在そのものを見ることはできません。しかし、聖書的な教会の内部には、現代の教会学校に通じるモデルというものを見ることができます。最後に、そのことを確認して、この課の学びを終えたいと思います。

まず、私たちの主イエス・キリストが、12人の弟子たちを選び、彼らを身近に置いて、直接訓練なさいましたが、これは聖書が教えるところの弟子訓練の型であると言えます。実際、イエス様は、昇天前に、弟子たちに対して、『19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、聖霊の御名によってバプテスマを受け、20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。…』(マタイ 28:19-20)と命じられ、私たちがイエス様の模範にならって、弟子を作っていくべきことを教えてくださっています。弟子を作っていくために、私たちは、みことばを宣べ伝え、すべてのことを教えて(=教育して)いくべきなのです。

そして、聖書は、私たちクリスチャンが信仰者として、さらに成長していくために、教会内において、教育活動を行うべきことを教えてくれています。それ故に、教会では初期の頃から、カテキズム(教理問答)による教育や聖書の学び会、さらには、聖書学校や神学校など…、様々な形で聖書による教育がなされてきた経緯があります。

また、礼拝メッセージや伝道のためのメッセージそのものにも、当然、教育的な意味が含まれています。このように、キリスト教会における教育的機能は必要不可欠です。そういった意味におきまして、現代、ほとんどのキリスト教会において、教会学校が設立されているのは、むしろ、当然であり…、自然なことだと言えるでしょう。

11 これらのことを命じ、また教えなさい。

12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。

13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。

14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。

15 これらの務めに心を砕き、しっかりやりなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。

16 自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うこととなります。

I テモテ 4:11-16

1 そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。

2 多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。

3 キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。

4 兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません

ん。それは徴募した者を喜ばせるためです。

5 また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

6 労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。Ⅱ テ モ テ 2:1-6

第2課 子どもと救い

暗唱聖句 コリント人への手紙第一 15:1-2

- 1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。
- 2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のこぼをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。

幼い頃に教会学校などを通して信仰告白をした子どもが、全く教会に来ることがなくなり、クリスチャンとしての歩みをする事なく生きている姿を見かけることがあります。信仰の有無を疑わずにはおられないような彼らの行動や生き方を、教会学校の働きに携わっている私たちが見る時、そこに何らかの問題意識を持つことはないでしょうか。

ある親は、平気で罪を犯し続ける子どもに、幼い頃にした信仰告白を思い起こさせようとしています。しかし、そのような告白をしたことさえ忘れてしまっている子どもたちが多くいることを、私たちはどのように理解すれば良いのでしょうか。あるいはまた、不品行に身を委ね、罪に満ちた生活を送る人物が、幼い頃にした告白のゆえに、自分がクリスチャンであることを疑うことすらないこともあります。私たちは、このような事柄をどのように(=聖書的に)理解すべきでしょうか？

もしも、本当に、彼らが幼い頃にした信仰告白のゆえに、真の救いを得ているとするならば、その子どもたちはクリスチャンとして成長して(≡させられて)いくはずです。しかし、実際問題として、多くの子どもたちは、この当然の過程をたどることをしません。これは非常に大きな問題です。なぜ、このようなことが起こるのかを正しく理解することは、子どもたちをどのように導いていくのかという点において、非常に重要な意味を持っています。この学びの中で、私たちは、福音に対する子どもの理解における問題点、子どもに福音を伝える時に起こる問題点、そして、子どもに伝道する際の困難な点を明確にし、どのようにして、子どもたちを導いていくべきなのかということ、一緒に考えていきたいと思えます。そうすることによって、私たちが、より正しく福音を語っていくことができ、子どもたちの信仰を吟味し、不用意に救いの確証を与えることなく、子どもたちのことを、しっかりとした信仰を持つまで導き続けることができるようになっていけることを願います。

A. 子どもと福音の理解

最初に私たちが明確に理解しなければいけないことは、神が働かれる時、子どもは正しい信仰を持って救われることができるということです。そして、本当に救われた子どもは、神を喜ばせるために、自ら進んで従順であることを追求するようになります。それ故、福音宣教は大人だけに対してなされるものではなく、子どもたちに対してもなされなければなりません。しかし、子どもたちへの働きをなしていく時に、私たちが発見することは、子どもの頃の告白が成長するに当たって覆されることがあるという現実です。この場合、彼らの信仰告白は何だったのでしょうか？教会学校の教師や親は、子どもの信仰告白を聞くと、子どもが救われたことを喜びます。しかし、その子どもがクリスチャンとしての生き方をしないのならば、私たちは、この信仰告白をどう理解すべきなのでしょう？彼らは救いを失ってしまったのでしょうか。救われてはいるけれども、罪の中に居続けることを選択しているのでしょうか？

私たちが聖書からはっきりと教えられることは、本当に救われた者は決して救いを失うことがないということであり(ヨハネ 10:29; ローマ 8:29-30 他)、救われた者は継続的に罪の中を歩むことがないということです(I ヨハネ 2:3-4 他)。ヤコブが言うように、信仰を告白していながら、救われた者としての行いがなければ、その信仰は人を救う信仰ではありません(ヤコブ 2:14-26)。正しく福音を理解し救われた子どもは、必ず、主に喜ばれる歩みをしていくようになります。しかし、このような歩みを生み出していない子どもたちが多いの、また事実なのです。

このようなことが起こる一つの原因として、子どもたちが持つ様々な限界を挙げることができます。特に、成長過程にある幼い子どもたちは、多くの分野において、その未熟さを露呈しています。そして、私たちは、これらの未熟さが子どもたちの正しい福音理解を妨げ、正しい信仰を持たないようにさせていることを理解しなければいけません。特に、次に挙げる二つの関連した事柄は、子どもたちが真の信仰を持つことを、より困難にさせる要因となっています。

1. 発育上の未熟

子どもたちは、抽象的な概念を理解することが困難です。それ故に、子どもたちは正確に、神の聖さ、神の義、神の愛、神の主権、神の力といったようなことを理解することが難しいのです。神に関する正しい理解のないところに、正しい信仰は生まれません。神に喜ばれる生涯は、神を正しく理解しない人の上に現れるものではないのです。それ故に、箴言でソロモンは、『愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る。』（箴言 22:15）と教えています。子どもたちは、継続的に、自らの愚かさを指摘され、みことばに基づく理解を得ていく必要があるのです。

正しい信仰を持つために、どれほどの理解が必要であるかを具体的に示すことは困難です。しかし、神がどのような御方であるか、その神の前で自分がどのような者であるか、キリストのなした御業は何か、「信じる」とはどういうことなのかということに関する理解が不十分な時に、人は（＝子どもだけでなく、大人であろうと）、自分の中で勝手に神を定義し、聖書の神に対する信仰ではなく、自らの作り出した神に対する信仰を持つのです。

子どもたちは抽象的な概念に対する理解が未熟であるが故に、正しい知識に基づいて、「信じる」ということが、大人以上に困難です。そして、これは、子どもたちの信仰告白が覆される大きな理由の一つでもあるのです。

2. 知性における未熟

小さな子どもの脳は急速な勢いで発達していきますが、8-9歳頃になるまで、大人に比べ、十分な発達をしてはいません。特に、抽象的概念の理解を考えると、それは10代に入ってからになります。そして、この事実は、子どもたちに神の真理を教えることをより困難なものにします。教えられていることを、十分に理解できない子どもは、正しい理解に基づいて信仰を持つことが困難です。子どもたちは、その考え方や話し方、そして、その理解力においても幼いのです。これは、彼らが正しい信仰を持つことにおいて、大きな障害となります。なぜなら、子どもたちは、自分の選択がどのようなものなのかということ、具体的に理解していないことがあるからです。

知性において未熟な子どもたちは、理解に欠けています。パウロは、コリント教会への手紙の中で、『兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。』（I コリント 14:20）と教えてくれています。「考え方において大人である」ことは、信仰者としての生き方において必要なだけでなく、信仰を正しく持つためにも必要なことであるはずで、それ故に、知性における未熟さは子どもが正しい信仰を持つ妨げとなることがあるのです。

B. 子どもと福音の伝達

このように、子どもたちは幼いがゆえ、また、彼らが抱えている、その未熟さのために、福音を正しく理解することが困難です。この理解における未熟さは、子どもたちが正しく信仰を持つことを妨げています。しかし、幼い頃の信仰告白が成長した時に覆されるのは、子どもの未熟さだけが原因ではありません。福音を伝える大人の側にも問題点があるのです。どのように子どもに福音を伝えるのか、また、どのように子どもの告白を理解するのかという点で、子どもを導く大人たちの責任は大きなものです。子どもに福音を伝えていく上で、子どもたちが正しい信仰を持つ妨げとなることはどのようなことなのか、幾つかの例を挙げてみましょう。

1. 福音の簡素化

子どもたちが抱えている未熟さの故に、子どもを教えようとする人々は、何とか理解力が充分でない子どもたちに分かるように福音のメッセージを伝えようと努力します。確かに、子どもたちに理解してもらうために、福音を分かり易く説明することは必要なことです。しかし、残念ながら、多くの時に起こっていることは、福音を分かり易くするために、その福音の内容を省略してしまうことがあるということです。「分かり易くする…」という名目の下に、神について、罪について、裁きについて、キリストの御業について、そして、信仰について語られなければならない大切なことを省略してしまうならば、聖書が教えている福音とは別の福音を、子どもたちに伝えてしまうということを、私たちは明確に理解しなければいけません。「神様はあなたを愛しています。あなたの罪を赦したいと願っています。そのために遣わしてくださったイエス様を信じ、あなたの心にお迎えしましょう。」というメッセージしか子どもに語られなければ、それは聖書が教える福音のメッセージとは異質のものなのです。

ここで私たちが決して忘れてはならないことは、私たちに与えられている責任は、「子どもたちを救うことではない」ということです。それは、言い換えれば、私たちが、子どもたちから、「イエス様を信じます…」という言葉を引き出すことでもありません。私たちに与えられている責任は、神が人に与えようとしている救いのメッセージを正しく、あらゆる人々に伝えることなのです。理解力が足りないからと言って、福音のメッセージを水で薄めたりするようなことは、神に喜ばれる行為ではないことを私たちは理解すべきです。簡素化されて必要なことが伝えられていない福音は、人を救うものではなく、むしろ、混乱へと誘うものです。私たちが簡素化した福音を伝えることによって、将来、子どもたちが成長して必要な霊的真理を正しく理解することができるようになった時、その子どもたちが持つべき、キリストに対する正しい信仰と従順とを妨げてしまうことがないように、注意しなければならないのです。

2. 「信仰告白」は「新生」か？

時々、「私はイエス様を信じます。」と告白した子どもが、次の日に、その行為すら覚えていないことがあります。あるいは、告白したことを覚えていたとしても、なぜそのようなことを言ったのか、その理由を明確に思い出すことができない子どもも、たくさんいます。子どもが信仰を告白する理由は、たくさんあります。親や先生を喜ばせるため、友だちが信じると言ったから、強く勧められたから等、子どもが救いの招きに応答する理由は数多くあるのです。そして、私たちは、子どもたちの告白というものが、必ずしも、子どもたちが、心から自らの罪を認め、神の聖さに気づき、キリストの働きを正しく理解し、罪を悔い改め、イエス様を信じる信仰によって救いを得たいと願うからではないということを、認識していなければなりません。

子どもの救いを強く願うが故に、親や教師は、子どもたちに半ば強引に、「救いの祈り」をさせようとしません。福音を簡素化し、子どもの感情を巧みに操り、信仰告白をさせ、祈ることによって、「あなたは救われましたよ。」と告げる、このようなことは本来、有ってはならないことです。これは神が人を救うのではなく、人の力で救いを与えようとしているにも等しい行為です。では、どのようにして、子どもの(あるいは、大人であったとしても)信仰告白が本物であることを確信することができるのでしょうか？

もし、本当に子どもが救われたのであるならば、その子どもは救いを失うことはありません。その子どもは、正しい信仰を持って救われたが故に、必ず成長し、主に喜ばれることを心からの喜びとして生きていこうとします。聖霊の働きが子どもの内で確かにあるが故に、その子どもは、みことばを求めて生きようようになります。神を愛し、自らの罪を心から悔い改め、聖い生き方をしていきたいと願う者になります。これらのことは、本当の信仰を持った者の上に、(それが子どもであろうと大人であろうと)必ず起こる変化です。

しっかりとした理解がないまま、促されるままに信仰告白をすることの多い子どもたちに対して、私たち注意しなければいけないのは、その告白が、必ずしも、救いを確証するものではないということです。福音に対して肯定的に応答するからといって、それは救いに至る信仰を子どもたちが持ったということを証明しているのではないのです。

ここで考えなければいけないことが、もう一つあります。それは、神が子どもを受け入れていないのに、私たちの側で、勝手に、子どもたちに対して救いを保証してしまうことです。「あなたは救われましたよ。もう、今後何があっても神様から引き離されることはないし、必ず、天国に行けるのですよ。」と伝えるのは、時に、子どもたちに福音を誤って理解させ、間違った確信を持たせることになるのです。時に、子どもたちは、何度も繰り返して、救いを得るための意思表示をすることがあります。その度に、「あなたは救われていますよ。…」と伝えることは、みことばに沿った正しいアプローチではありません。…と同時に、このように幾度となく信仰を持ちたいと願い祈る子どもに対して、「あなたはもう信じたのだから大丈夫！」というアドバイスを与えることは、危険なことであるということを、私たちは理解しておくべきです。キリストに対する正しい愛を持つことなく、信仰生活を送る子どもたちがいないように、福音を伝える者は最大の注意を払わなければならないのです。

また、救いの確証を人に与えるのは聖霊なる神の働きです(Iヨハネ 3:24)。聖霊が人の内で働き、御霊の実を豊かに実らせることによって、人は救いの確信を得るのです。それは子どもに対しても同じです。聖霊が神の真理を子どもの心に示し(ヨハネ 16:8-11)、みことばを教え(Iコリント 2:10-14)、彼らが従順に歩むことができるように強めるのです。信仰告白をする子どもに対して、私たちは彼らを励ますことができます。彼らの歩みが、本当に彼らの告白と一致していく、その時まで、私たちは継続的に子どもたちに対してチャレンジしていく必要があるのです(このことに関しては、さらに付録を参照してください)。

C. 子どもと福音のメッセージ

「子どもに救われて欲しい。」という願いは素晴らしいものです。人の救いを待ち望み、そのために全力を尽くして生きていくことは、私たちクリスチャンに課せられた使命でもあります。特に、幼い子どもたちに対して、彼らの心が、この世の影響を強く受ける前に、みことばから神について、また、救いについて教えることが重要であることは言うまでもありません。

しかし、現代のキリスト教会において、この「救いへ導きたい…」という強い願望が、時として、人々を間違った方向へと追い立てていくことがあります。…と言うのも、福音を伝える側が、どのようにすれば人々が救いを受け入れやすいのかを考え、支障をもたらすと考えられる内容を排除し、簡単に救いの計画だけを伝えてしまうような誘惑が、常に、私たちには起こり得るからです。しかし、人々を救う力のある、真の福音とは、単なる救いの計画なのではなく、イエス・キリストに関する真理のすべてなのです。

福音を伝えるとは、単に救いの計画を明示し、信じる決心を促すことなのではありません。本当の救いとは、ただ単に、信じる決心をすることなのではなく、心も思いも意志も、その人のすべてをイエス・キリストに明け渡すことなのです。救いとは、神による救いの計画を理解することではなく、イエス・キリストとの個人的関係を持ち、主を通して神を知ることです。そのために、私たちは子どもたちに対して、次の五つの事柄を伝えなければなりません。

1. 神の聖さを伝える

神の聖さを伝えることは、子どもたちに福音を語る上で、非常に大切なことです。「神は完全に聖なる御方であり、あなたはその神の前に汚れているのだ。」というメッセージは、子どもが神に対する正しい恐れを持つために必要なメッセージです。近年では、神の愛だけが強調されるメッセージをよく耳にしますが、それは神が聖なる方であることを無視した教えとなる危険性があります。「私たちは、神の愛を受けるにふさわしい者である…」という理解は、聖書的に正しいものではありません。「私たちは罪の故に、神の前に全く価値のない者であり、聖なる神からの裁きだけが、本来、私たちにふさわしいのである…」ということ子どもたちは理解しなければいけません。ソロモンは、『【主】を恐れることは知識の初めである。』(箴言 1:7)と言います。また、伝道者の書の最後では、『結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。』(伝道者 12:13)と記しています(参照:詩篇 111:10; ミカ書 6:9; ヨブ記 28:28)。

神の聖さを知ること…、そして、完全な聖さをお持ちの神様が、私たち人間に対しても、完全な聖さを求めておられる(マタイ 5:48; I ペテロ 1:15-16)ということを理解することは、子どもたちにとって絶対に必要なことです。聖書のみことばは、次のように教えてくれています。

わたしはあなたがたの神、【主】であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。地をはういかなる群生するものによっても、自分自身を汚してはならない。 レビ記 11:44

すると、ヨシュアは民に言った。「あなたがたは【主】に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神である。あなたがたのそむきも、罪も赦さないからである。 ヨシュア記 24:19

【主】のように聖なる方はありません。あなたに並ぶ者はないからです。私たちの神のような岩はありません。 I サムエル記 2:2

すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。 ヘブル 12:14

以上のように、幼い子どもたちが身につけなければならないことは、主を正しく恐れることです。それは、神がどのような御方であるのかを、彼らの理解できる範囲で明確に知ることから始まります。そして、この知識は、子どもが主の前に正しく歩もうとすることを助けてくれるはずなのです。

2. 罪を明確にする

福音とは、「良い知らせ」のことです。この良い知らせとは、ただ単に、天国へのチケットが無償で与えられることではなく、むしろ、神の御子が罪に打ち勝ったことを指し示しています。多くの時に、福音とは罪の解決をもたらすものとしてではなく、神の裁きから逃れるため、神が与えてくださる人生の素晴らしい計画、満足を得るための方法、人生の問題に対する答え、または、無償の赦しの約束などとして伝えられることがあります。確かに、これらのことは真実なのですが、あくまでも、イエス・キリストによる贖いの副産物であって、福音の最も重要な要素なのではありません。罪の問題が軽視され、それがはっきりと伝えられない時、神が与えようとしてくださっている素晴らしい祝福は、福音のメッセージ自体を安っぽいものにしてしまう可能性があるのです。

聖書は、罪を犯す人が、その罪の故に死を受けて当然であると教えます(ヤコブ 1:15; ローマ 6:23)。そして、聖なる神の前に裁かれて当然の、「罪」という大きな問題を、自分たちが抱えてしまっているという現実を子どもたちが明確に知ることが、彼らが正しい信仰を持つために必要不可欠なのです。

3. イエスが誰なのか、また、何をされたのかということ教える

福音とは、イエス・キリストが誰であり…、私たち罪人のために、どのようなことをしてくださったのかということに関する良い知らせです。このことを考えるに当たって、幾つか本当の信仰を持つために必要な知識があります。

- ① イエス・キリストは神である。 ヨハネ 1:1-3,14; コロサイ 2:9
- ② イエス・キリストはすべての主である。 ピリピ 2:9-11
- ③ イエス様は人となられた。 ピリピ 2:6-7
- ④ イエス様は完全に聖い、罪のないお方である。 I ペテロ 2:22; I ヨハネ 3:5
- ⑤ イエス様は、私たちのために、いけにえとなってくださった。 II コリント 5:21; テトス 2:14

- ⑥イエス様は、私たちの罪の償いのために死なれた。 エペソ 1:7-8
- ⑦イエス様は、十字架上で死ぬことによって、救いの道を罪人のために備えてくださった。
I ペテロ 2:24; コロサイ 1:20
- ⑧イエス様は死からよみがえり、罪に打ち勝ってください。 ローマ 1:4; I コリント 15:3-4

これらのことが、明確に子どもたちに伝えられなければいけません。「分かり易く…」という名目の下に、水で薄められたような福音を語り、子どもたちがイエス・キリストに関する正しい知識を持つことがないなら、彼らが正しい信仰を持つことは困難になります。それは、子どもたちを助けることでは決してありません。

4. 神が何を求めておられるかを知らせる

概念的なことを理解することが困難な子どもたちに、罪の悔い改めを教えることは容易ではありません。しかし、聖書は私たちに、救いをもたらす本物の信仰とは、罪からの悔い改めを含むものであるということを見せてくれています。ただ単に、「イエス様を心に受け入れる…」ことや、「イエス様を信じる決心をする…」ということは、本物の信仰を持つことと同じではないのです。自分が今まで信じ、信頼してきたものすべてを捨て去り…、イエス・キリストのみに信頼を置いて生きていこうとする…、それが本物の信仰です(ルカ 9:23; ヨハネ 12:26)。子どもたちに対する福音のメッセージは、その内容においては、大人に対するメッセージと同じでなければなりません。自分の罪から立ち返り、イエス・キリストを信じ従っていくことがすべての人に求められているのです(使徒 17:30-31)。

5. イエスに従う時に起こる犠牲を覚えさせる

イエス様を信じ、従順に生きていくということは、決して簡単なことではありません。そこには大きな犠牲が伴います。イエス・キリストを自分の主とするならば、私たちが仕えるべき対象はイエス・キリスト以外にはないはずで、それは、自らの生涯をキリストへの信頼と従順の故に捨て、主のために生きることです。次の、イエス様の言葉を考えてみてください。

26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。 27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。 28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。 29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、 30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。 31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。 32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。 33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

ルカ 14:26-33

この個所で、イエス様は、自分に対して好感を持って集まっていた群衆に対して、非常に大きなチャレンジを与えています。それは、イエス様に対する愛の故に、その愛と比較すれば、他の者への愛は憎しみと同等だと言うのです(26 節)。ここでは、自分の生涯を、自分自身のために生きるのではなく、主のために生きていくことが要求されていて(27,33 節)、その犠牲をよく考えて、理解した上で、わたしに従う決心をしなさい！と求められているのです(28-33 節)。

他の個所でも、イエス様は、キリストを信じることの重要さと共に、それに伴う犠牲を教えてください

(マタイ 10:34-38 等)。なぜなら、イエス様を信じることを十分に理解して、その上で、イエス様の弟子になることが必要なことだからです。それは、子どもたちにとっても同様です。私たちが子どもたちに福音を伝える時、ただ単に、イエス・キリストに好感を持たせ、まるで、何かの餌で、子どもを釣るかのよう、永遠のいのちと裁きからの解放をちらつかせ、子どもの心をキリストに向けることは正しい教育(≒宣教)ではありません。子どもたちも、その幼い理解力の中であっても、自らが払うべき犠牲を理解すべきです。こういったことを割愛して、私たちが福音を語っていく時、私たちは、子どもたちに不十分な福音を伝えていくということを覚えなければなりません。

D. 子どもと福音のフォロー

ここまでで、私たちは、子どもの持っている福音の理解における問題点、福音を伝えるに当たっての困難、そして、私たちの語るメッセージの内容に関する注意点を見てきました。これらのことを踏まえた上で、私たちは、どのように、「イエス様を信じたい…」と告白する子どもたちを導いていけば良いのでしょうか。

一つ目に、私たちがなしていかなければならないことは、子どもたちを励ますことです。子どもが神に対して、従順な歩みをしようと努力する時、正しいことをなす時、御霊の実を結ぶ時、親や教師たちはそれを褒め、励ましていかなければいけません。そして、あらゆる機会を活用して、彼らにイエス・キリストと福音を教え、彼らの歩みが主の望まれるものとなっていくように、励まし続ける必要があるのです。

二つ目に、子どもたちを矯正していくことです。彼らが犯す過ちを、いい加減に見過ごしてしまうのではなく、それらを正し、彼らの罪の故に、イエス・キリストがなして下さった救いの御業が必要であることを示し続けなければなりません。

そして最後に、子どもたちに教え続けていくことです。彼らがキリストを中心とした生涯を送ることができるように、みことばを正しく伝え、彼らが主を畏れつつ歩むことができるように、訓練する必要があります。みことばの学びが彼らの生活の支えとなるように…、また、教会での霊的な交わりが彼らの喜びとなっていくように…、そして、神様との個人的な祈りが彼らをさらなる聖潔へと導いていくように…、子どもたちを教え続けていかなければならないのです。

神が私たち人間に与えて下さった救いのメッセージは、唯一です。それ故に、私たちが語っていくべき福音の内容は、その語っていくべき対象が大人であっても子どもであっても、変わるはずがありません。子どもを愛するが故に、子どもに受け入れられる福音を語ろうとする時に陥りやすい罠は、聖書的真理を私たちの手で変えてしまい、人を救わない福音を伝えてしまっているということです。「信じたい…」という子どもたちに対して、不用意に救いの確信を与え、彼らの永遠を私たちが勝手に保証してしまうべきではありません。

私たちは、子どもが救われることを疑いません。神が働いてくださる時、確かに、子どもたちは本物の信仰を持って救われます。けれども、子どもたちの告白は、多くの場合、正しい、十分な知識に基づいたものではないということも、私たちは知っておくべきです。子どもたちの信仰告白は、彼らが成長していくにつれて、よりみことばを受け入れ、聖霊がその心の内に働くことができる素晴らしい土壌を作っていくものであると考えることができます。故に、私たちは子どもたちの心を耕す働きに従事していくべきです。そして、この働きを私たちが子どもたちに対して誠実になしていく時、主は彼らのことを憐れみ、彼らに御自身を明確に示し、彼らの罪に気付かせ、その罪を悔い改めさせ、彼らを救うことができる唯一のお方であるイエス・キリストを信じ従うことができるように働いてくださるでしょう。また、子どもたちに神を伝えるという、素晴らしい働きに召して下さった主に喜ばれるように、期待しつつ、忠実に、正しいメッセージを子どもたちに伝えていけるように、親や教師自身も自らを吟味し、主に忠実に生きていかなければならないのです。

<質問>

問:あなたは、過去、信仰を持って救われたはずの者に対して、救いに関する疑念を持ったことがありますか?

問：あなたは、子どもを霊的に導いていく上で、どのような困難を経験されましたか？

問：あなたは、今後、自分が福音を語っていく上で、何が重要だと思いますか？

付録：本物の信仰を見極める

子どもたちの信仰告白は、必ずしも、本物の救いの証明とはならないということを本文の中で見てきました（そういったことは、子どもに限ったことでもありませんが…）。また、私たちは、子どもたちの歩みが、彼らの信仰告白と一致するようになるまで、子どもたちのことを励まし続けるべきであることを学びました。そこで、私たちは、何をもって、信仰が本物であるのかということを吟味する必要があることに気付きます。

そこで、ここでは二つの表をもとに、このことを考えていきたいと思えます。最初の図は、人の信仰を証明も否定もしない事柄をまとめています。信仰告白をし、次のような特徴を持つ人は何人もいます。しかし、これらは彼らの信仰が本物であるということを証明するものではありません。例えば、表面的な道徳を持つ人は、確かに良いことを行っているように見えます。しかし、道徳的に正しいことは、その人が天に国籍を持っていることを証明するものではありません。また、真の神に関する正しい知識を持っていることも同様に、神に対する正しい信仰の存在を証明するものではありません。宗教心に厚く、教会の様々な行事に参加し、積極的に奉仕を行うことは、人の救いの保証とはなりません。「罪が責められる」、「救いの確信を持っている」、「決心したのだ」ということも、それ自体が

人の信仰を証明も否定もしない要素	
表面的道徳	マタイ 19:16-21; 23:27
理知的知識	ローマ 1:21; 2:17 以降
宗教への参加	マタイ 25:1-10
積極的奉仕	マタイ 7:21-24
罪の責め	使徒 24:25
救いの確信	マタイ 23 章
決心の時	ルカ 8:13-14

聖霊の内住を証明するものではありません。

これらの特徴は、確かに、本物の信仰者たちに見られるものでもあります。しかし、上記の特徴だけでは、彼らの救いを証明するものとしては不十分である、ということを私たちは覚えていなければなりません。では、一体、何によって本物の信仰は証明されるのでしょうか？ 次の図を見ながら考えてみてください。

聖書が明確に示してくれていることは、私たちが救われる時、聖霊が私たちの内に宿り、私たちのことを新しい者へと変えてくださるということです。そして、その変化こそが、私たちの救いを証明してくれるのです。神への愛、罪からの悔い改め、心からの謙遜、神の栄光への献身、継続的な祈り、自己犠牲的な愛、この世からの決別、霊的な成長といった、これらの事柄は、その人が確かに救われたことを、その本人だけでなく、周りの人に明確に示す根拠となるのです。Iヨハネ書は、クリスチャンが本当に永遠のいのちを持っているかどうか（救われているかどうか）を示すために、ヨハネが書き記してくれたた手紙です（Iヨハネ 5:13）。そこには、ここに記されていることがすべて書かれているだけでなく、このような歩みを継続的に行わない者は、神に属する者ではないのだ！という厳しい言葉が幾度となく記されています。

本物の信仰を証明してくれる要素	
神への愛	ルカ 10:27; ローマ 8:7
罪からの悔い改め	詩篇 32:5; 箴言 28:13; ローマ 7:14 以降
心からの謙遜	詩篇 51:17; マタイ 5:1-12; ヤコブ 4:6,9 以降
神の栄光への献身	詩篇 105:3; 115:1; イザヤ 43:7; 48:10 以降
継続的な祈り	ルカ 18:1; エペソ 6:18 以降; ピリピ 4:6 以降
自己犠牲的な愛	Iヨハネ 2:9 以降; 3:14; 4:7 以降
この世からの決別	Iコリント 2:12; ヤコブ 4:4 以降; Iヨハネ 2:15-17
霊的な成長	ルカ 8:15; ヨハネ 15:14 以降; ローマ 16:26; Iペテロ 1:2,22; Iヨハネ 2:3-5

私たちが子どもたちのことを導いていくに当たって、しっかりと覚えておかなければならないことは、「イエスを信じます。」と告白した子どもたちが、その生涯において、主に喜ばれる者へと変わっていく時、そのための努力を惜しまない時、それを願って生き続けていく時、失敗した時に心からの悔い改めをもって、主に立ち返り続ける時、彼らの信仰が本物であることが証明

されるということです。その時まで、私たちは主に信頼し、子どもたちの心がみことばによって砕かれ、主の喜ぶことを行うことを最大の喜びとする子どもとなるように、祈りつつ、彼らにチャレンジを与え続けなければいけないのです。

第3課 子どもに教えていくべき内容¹

暗唱聖句 伝道者の書 12:1,13-14

- 1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。
- 13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。
- 14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。

「一体、どのように子どもたちに福音を伝えたら良いのでしょうか？」と考えることは大切です。福音を簡素化することによる危険性について、私たちは既に見てきました。しかし、それと同時に、あまりにも神学的に詳しく伝えようとするあまり肝心のポイントが全く子どもたちに伝わらないという危険もあります。一体、私たちは子どもたちに、どのようなメッセージを伝えていくべきなのでしょう？一体、いくつの子どものなら、福音を理解できるのでしょうか？今回の学びでは、そういったことについて考えていきたいと思えます。

A. 時間をかけて徹底的に伝えていく

子どもたちをキリストに導いていく働きは、一度きりで終わるような働きではありません。この働きは、親を中心として、子どもたちの成長過程の中で、絶えず継続的に、行われなければならないものなのです。そのように、時間をかけていく中で、私たちはみことばの真理を、徹底的かつ十分に伝えていく必要があります。真理を分かり易く説明し、例えを使って明確なものにし、子どもたちの反応に耳を傾けながら、彼らの間違った理解を正し、復習しながら難しい概念をしっかりと教えていくのです。申命記 6 章で、モーセは、イスラエルの民たちに対して、子どもたちを伝えていくことについて、次のように命じています。

- 6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。
- 7 これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。申命記 6:6-7

確かに、ここの箇所は、親が子どもたちを教える時のことを語っています。しかし、親と同じように、子どもの霊的状态を思い、子どもが真の信仰を持つことができるように導くことを願う者にとっても、ここで語られている真理は適用されるべきです。私たちは、「福音が特別な時にだけ語られるべきものである」と誤解してはいけません。私たちは、子どもたちと関わることでできるすべての時間を用いて、福音をより正しく伝えていくための機会としていくべきなのです。

プログラムに頼るべきではありません。児童伝道プログラムの多くは、福音の大切な部分を省略してしまう傾向にあります。また、それらの多くは、罪の概念や神の聖さについての、はっきりとした説明を怠っていますし、悔い改めについても、何一つ教えない場合が有り得ます。そして、こういったプログラムの多くは、子どもたちが示す福音に対する肯定的反応を過度に判断してしまうという弱点があります。例えば、手を挙げたり…、決まった祈りを祈ったり…、それ以外でもありとあらゆる肯定的反応が、子どもたちの救いを保証するように理解されてしまいがちです。そして、そのような告白をした子どもたちの方も、「自分が救われた…」と思いついてしまうようなことが、往々にして有り得るのです。

しかし、私たちは、子どもたちがする最初の肯定的反応を、単純に、「救いに至る信仰の告白である…」と考えてはいけません。もし、私たちが3歳の子どもの、「イエス様を心に受け入れたい…」という祈りによって、その子が救われたと考えるならば、「キリストを信じる」ということに関する、私たちの知識は聖書的であるとは

¹ この課は、John MacArthur、*Successful Christian Parenting* (Nashville, TN: Word Publishing, 1998), 47-65 をもとに書かれてあります。

言えないでしょう。

確かに、みことばは、救いをもたらす真の信仰は、子どものようなものでなければならないと教えています。事実、すべての罪人は、子どものようにならなければ、救いを得ることができません(マタイ 18:3-4)。しかし、イエス様が強調しておられることは、子どもたちが抱えている「無知」なのではなく…、子どもたちに誇るべき功績が無い点(ピリピ 3:7-9)と、完全な無力さであるはずで、子どもには、何一つ、自分を救うと勘違いさせるような功績がありません。また、子どもたちは、自分が無力であることを知っており、それ故に、彼らが神に頼りきっていることが強調されているのです。このように、すべての人は、自らの功績を、『ちりあきた』であると思い知り(ピリピ 3:8)、子どものように、完全に、神様に信頼して、神のもとに來なければならないことを、イエス様は教えておられるのです。

真の信仰には、幼い子どもたちにとっては理解の困難な、幾つかの非常に重要な概念の明確な理解と、心からの同意が含まれます。救いをもたらす真の信仰の唯一の対象は、聖書に記されている通りのイエス・キリストなのです。福音に関する根本的で重要な要素を理解できず、心から同意することもできない幼い子どもたちが、どのように真の信仰を持つことができるのでしょうか。救いをもたらす信仰は、盲目の信仰ではありません。本当の信仰を持つには、善と悪、罪と裁き、悔い改めと信仰、神の聖さと罪に対する神の怒り、人となられた神であるイエス・キリスト、罪の贖いに関する概念、また、復活やキリストが主であられることの意味といった福音の根本的な要素に対して無知であることはできないのです。

子どもたちが、これらのことを理解できるようになる年齢というのは、その子どもによって違います。それ故に何歳になったら救いを受けることができるという、指標のようなものはありません。だからこそ、私たちは、子どもたちが真の理解を示し、御霊の実を生み出すようになるまで、子どもの救いに関して、断定的な判断をするのは避けるべきではないでしょうか。

だからと言って、子どもが口にする純真な告白を意味が無いものとして無視することをしてはいけません。子どもが示す信仰に対する肯定的対応を、親や教師たちは励ましていく必要があるのです。私たちは、子どもが理解できにくいことや間違っ理解していることを笑ったり、冷やかしたりしてはいけません。そのような時を、彼らがより深い理解をするための機会として用いるべきなのです。私たちは、子どもたちが持っている、キリストについて知りたいという願いを満ちし、彼らの告白が本当の信仰へと変わっていくように励まし続けていかなければいけないのです。私たちが、勝手に、これは彼らには「理解できないだろう…」と考え、子どもたちの告白を本物でないと決めつけることをしてはいけません。ひょっとすると、その告白は成熟した信仰を後に生み出す小さな種かも知れないのです。子どもたちが真理をなかなか理解できないからと言って、落胆してはいけません。それは単に、私たちが、継続的かつ十分に、真理を教え続けていく必要があるということ、教えてくれているのです。

また、親や教師たちが行う如何なることを通しても、子どもの救いを保証することはできません。子どもたちのために、私たちが代わって、信じてあげることはできないのです。私たちは子どもたちを強要したり、感情を操ることによって、うわべだけの告白をさせることができるかも知れませんが、本物の信仰は、常に子どもの心の内になされる神の働きによって起こされるものなのです(ヨハネ 6:44-45)。

確かに、私たちは子どもたちに救いの保証を持つように語ることもできるかも知れませんが、本物の確証は聖霊の働きなのです(ローマ 8:15-16)。私たちは、神の働きの領域を侵さないように注意しなければなりません。外面的誘因、周りからの圧力、暗示の力、承認されるという誘惑、拒絶の恐怖、また、それら以外のあらゆる人為的な方法を用いて、子どもからのうわべだけの肯定的対応を得ようとしてはいけません。そうではなく、忠実に、忍耐強く、そして徹底的に、真理を伝えることを通して、子どもたちを導いていかなければならないのです。また、私たちの努力は、常に、子どもたちが救われることを求める切なる祈りに包まれているべきです。私たちが覚えておかなければいけないのは、私たちが触れることのできないところ、子どもの心の中に、神は素晴らしい働きをなすことができるということです。

B. 神の計画を余すところなく伝えていく

「それでは、私たちは、具体的に、どのように子どもたちに福音を伝えていけば良いのか？」と、多くの人は求めることでしょう。このような質問をする人たちは、福音を語るための簡単なアウトラインを求めていることが多いようです。彼らは、福音の真理を、できるだけ少ないポイントでパッケージすることができることを期待しています。そして、現代のキリスト教会は、このような考え方に先導されて進んでいるといっても過言ではないように思われます。

しかし、こういったようなアプローチを取るプログラムの多くは、悔い改めや、罪に対する神の怒りなどの重要な真理を省いてしまう傾向にあります。実際、ある著名なクリスチャンリーダーは、「これらの否定的なメッセージは福音の妨げになる。」とまで言っています。彼らは、「このようなメッセージは未信者と話すときに語られるべきではない。」と言うのです。また、ある人たちは、「イエス様に対する信仰さえあれば、それがどのようなものであっても救いをもたらすものである。」などと考えています。けれども、新約聖書は、私たちに義認の教理を曲げたり、否定したりする人は、キリストを信じるという告白をしていても呪われているということをはっきりと教えています(ガラテヤ 1:6-9)。現代のキリスト教会は、まるで、「どれだけ、少しの真理を知るだけで天国へ行けることができるか？」ということを探求しているように見えます。そして、近年の伝道方法はこの考えに基づいたものが多いのです。しかし、私たち、親や教師は、このような考え方をすべきではありません。…と言うのも、申命記 6:6-7 で教えられているような、継続的かつ誠実、熱心な教え方は、そのような考えとは相反するものであるからなのです。

福音とは、キリストに関する良い知らせです。それ故に、福音には、イエス・キリストに関するあらゆる真理が含まれるのです。そして、聖書に記されている如何なる真理も、本来、人が福音を受け入れ、信仰を持つ妨げとなることはありません。事実、キリストとは、神の啓示の要約であり、頂点であられるのですから(ヘブル 1:1-3)、聖書に記されているすべての真理は、最終的にはキリストを指していると言うことができます。ですから、聖書は、伝道にふさわしい内容をあらゆるところで記しているのです。つまり、子どもに対して、充分にみことばの真理を伝えることによって、救いへと導きたいと願っている者には、神の計画全体を子どもに伝える責任があるのです。それが、まさに、申命記 6:6-7 が私たちに教えていることなのです。

ある特定の方法だけで、すべての未信者の必要を満たすことはありません。無知な者は、キリストが誰であられ、なぜ主が救いに関して、唯一の希望であるかを知らされなければなりません(ローマ 10:3)。不注意な者は、裁きが現実のものであることを教えられる必要があります(ヨハネ 16:11)。恐れている者は、神が憐れみ深い方であり、悪人の死を喜ぶのではなく、罪人が神の憐れみを請い求めるのを待ち望んでいることを教える必要があります(エゼキエル 33:11)。敵意を抱いている者には、神のみこころに逆らうことの虚しさを教える必要があります(詩篇 2:1-4)。自らを義人であると考える者には、神の律法が明確に示されることによって、彼らが罪人であることを教える必要があります(ローマ 3:20)。高慢な者には、神が高ぶりを憎んでいることを教える必要があります(1ペテロ 5:5)。すべての罪人は、神が聖なる御方であり、キリストが神の完全な義の要求を、罪人のために満たしてくださったことを知る必要があります(1コリント 1:30)。すべての福音のメッセージは、キリストが罪のいけにえとして死んでくださったことを含んでいなければいけません。また、キリストが葬られ、復活したことがなければ、それは「福音」とは言えないのです。

C. 福音に関する特に重要な教理を伝えていく

神の計画を余すところなく伝えつつ、私たちは、特に、福音を理解する上で、大切な教理を明確に教えていかなければいけません。それらの幾つかを記してみましよう。

1. 神の聖さを教えていく

『【主】を恐れることは、知恵の初め。…』(詩篇 111:10、参照:ヨブ 28:28; 箴言 1:7; 9:10; 15:3; 伝道

者 12:13; ミカ 6:9)という言葉、私たちは真剣に考えなければいけません。ここで言われている『恐れ』は、「恐怖」のことではありません。この恐れは、神があまりにも聖く、悪を見ることができないことを理解するが故に(ハバクク 1:13)、その神の聖さに反することを行うことを恐れる、敬虔な尊敬に満ちた恐れなのです。そして、この神の聖さを理解することによって、正しい「畏れ」を抱くことは、子どもが正しい信仰を持つ上で非常に重要な要素であります。では、神の聖さを教えるときに、具体的に、どのようなことを教えるべきなのでしょう。

◆ 神は完全に聖であり、それ故に、神の律法は完全な聖さを要求する

44 わたしはあなたがたの神、【主】であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。地をはいかなる群生するものによっても、自分自身を汚してはならない。

45 わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した【主】であるから。あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。」
レビ記 11:44-45

…主は聖なる神であり、ねたむ神である。あなたがたのそむきも、罪も赦さないからである。

ヨシュア記 24:19

「だれが、この聖なる神、【主】の前に立ちえよう。…」 I サムエル記 6:20

4 【主】は、その聖座が宮にあり、【主】は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる。

5 【主】は正しい者と悪者を調べる。そのみこころは、暴虐を好む者を憎む。

6 主は、悪者の上に網を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となろう。

7 【主】は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。詩篇 11:4-7

それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない」と書いてあるからです。

I ペテロ 1:16

すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。

ヘブル 12:14

◆ 神は聖なる御方であるが故に、罪を憎まれる

5 それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、

ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

出エジプト記 20:5-6

あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわいは、あなたとともに住まないからです。

詩篇 5:4

神は正しい審判者、日々、怒る神。

詩篇 7:11

【主】を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。箴言 8:13

まことに、わたしは公義を愛する【主】だ。わたしは不法な略奪を憎む。…イザヤ 6:18

互いに心の中で悪を計るな。偽りの誓いを愛するな。これらはみな、わたしが憎むからだ。——【主】の御告げ——」ゼカリヤ 8:17

◆ 罪人は神の前に立つことができない

それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。詩篇 1:5

誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行うすべての者を憎まれます。詩篇 5:5

3 だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。
4 手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。詩篇 24:3-4

2. 子どもの罪を示していく

子どもが幼い時から、悪行は親や友人に対する悪であるだけでなく、両親に従い、友を愛することを命じている聖い神に対する罪であることを教えることが大切です。子どもの良心を鍛えることによって、彼らの持つ悪い態度や行動は罪であり、主の前で、その責任を取らなければならないということを教えるのです。これらのことを、愛と真の憐れみから、子どもに対してなさなければいけません。

子どもに罪を理解させるということは、彼らのことを、常に非難し、追い回すことではありません。ましてや子どもが良いことをした時に、それを褒めないことではありません。また、子どもたちに、罪を自覚させるということは、子どもたちを萎縮させ、常に、彼らの失敗を責め立てることではありません。その目的は、子どもを叱り続けることによって、彼らの感情を踏みつけることではありません。私たちは、優しさをもって、子どもたちのことを指導し、彼らが持っている罪ゆえの墮落を、子どもたちが神の視点で見ることができるよう助けなければいけません。子どもは、何故、自分たちが罪の中に溺れているのかということに気付かなければなりません。そして、自分には贖いが必要であるということを理解しなければならないのです。

イエス様は、『医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。』（マルコ 2:17）と言っています。神が求めておられること（律法）を、子どもに教えることを恐れてはいけません。律法と福音には、確かに違う目的があります。また、私たちは、罪人は律法の行いによって義と認められることがないことを知っています（ガラテヤ 2:16）。しかし、それ故に、律法が福音を伝える上で何の役割も担っていないと考えるのは間違っています。律法は、私たちの罪を明確にします（ローマ 3:20; 7:7）。そして、罪の性質が、どのようなものであるのかということ、律法が示してくれるのです（ローマ 7:13）。『律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係…』なのです（ガ

ラテヤ 3:24)。人が罪に気付き、自分が無力であることを悟らせるために、神は律法を用いられるのです。福音のメッセージから、かけ離れたものではなく、律法とそこから来る義の要求とは、パウロが組織的に福音を伝えようとしたときの開始点であったことを思い出してください(ローマ 1:16-3:20)。子どもが罪を理解するために、私たちは神が要求する義の基準を、律法を通して、明確に子どもに伝えていく必要があるのです。

◆ 罪とは神の律法を犯すことである

罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。

I ヨハネ 3:4

不正はみな罪です…

I ヨハネ 5:17

律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。

ローマ 7:7

◆ 未信者が本当の平安を持ってない原因は罪である

20 しかし悪者どもは、荒れ狂う海のようにだ。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。

21 「悪者どもには平安がない」と私の神は仰せられる。 イザヤ 57:20-21

◆ すべての人が罪を犯した

10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。

11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。

12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。

ひとりも

いない。」

ローマ 3:10-12

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず…ローマ 3:23

◆ 罪は罪人が死を受けにふさわしい者とする

見よ。すべてのいのちはわたしのもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。

罪を犯した者は、

その者が死ぬ。

エゼキエル 18:4

罪から来る報酬は死です。…

ローマ 6:23

欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

ヤコブ 1:15

◆ 罪人は何をしても救いを得ることはできない

私たちはみな、汚れた者ようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。

私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。

イザヤ 64:6

なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないから

です。律法によつては、かえって罪の意識が生じるのです。ローマ 3:20

しかし、人は律法の行いによつては義と認められず…。なぜなら、律法の行いによつて義と認められる者は、ひとりもないからです。ガラテヤ 2:16

◆ 罪人は自分の罪の性質を自分の力で変えることはできない

たとい、あなたがソーダで身を洗い、たくさんの灰汁を使つても、あなたの咎は、わたしの前では汚れている。——神である主の御告げ—— エレミヤ 2:22

クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行うことができるだろう。エレミヤ 13:23

7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。

いや、服従できないのです。

8 肉にある者は神を喜ばせることができません。ローマ 8:7-8

◆ 罪人は無力な状態にいる

そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている…ヘブル 9:27

2 おおいかぶされているもので、現されないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものではありません。

3 ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。ルカ 12:2-3

私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行われるのです。ローマ 2:16

しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。

これが第二の死である。」 黙示録 21:8

3. 子どもに、キリストについて、また、主がなした御業について教えていく

もちろん、子どもたちに自分の犯した罪について教えてあげることは終了点なのではありません。私たちには、その罪に対する唯一の解決法であるイエス・キリストを示してあげる責任があります。キリストこそが福音の中心であるが故に、子どもたちにイエス・キリストについて教えることは、すべての霊的訓練の焦点であり、目標でなければならないのです。

◆ キリストは永遠に神である

- 1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
- 2 この方は、初めに神とともにおられた。
- 3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。ヨハネ 1:1-3

- 14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。ヨハネ 1:14

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。コ ロサイ 2:9

◆ キリストはすべての主である

…小羊は主の主、王の王だからです。… 黙示録 17:14

- 9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。
- 10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、
- 11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。ピリピ 2:9-11

神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。使徒 10:36

◆ キリストは人となられた

- 6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、
- 7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。…ピリピ 2:6-7

◆ キリストは完全に聖く、全く罪が無い

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ヘブル 4:15

- 22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。
- 23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。 I ペテロ 2:22-24

キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っていません。キリストには何の罪もありません。 I ヨハネ 3:5

◆ 罪の無いキリストが、私の犯した罪のいけにえとなった

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。 II コリント 5:21

キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。 テトス 2:14

◆ キリストは、自らの血をもって、私の罪をあがなわれた

この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。 エペソ 1:7

また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、黙示録 1:5

◆ キリストは十字架上で死に、罪人に救いの道を備えられた

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。 I ペテロ 2:24

その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。 コロサイ 1:20

◆ キリストは勝利の内に、死からよみがえられた

このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです。 ローマ 1:5

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。 ローマ 4:25

3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、
I コリント 15:3-4

◆ キリストを信じる者には、キリストの義が与えられる

あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。
I コリント 1:30

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。
II コリント 5:21

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。
ローマ 4:5

8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。それは、私には、キリストを得、また、

9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。
ピリピ 3:8-9

◆ それ故に、キリストを信じる者を、神が義と定めてくださる

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

ローマ 3:24

1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。
ローマ 5:1-2

ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。
ローマ 5:9

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

ヨハネ 5:24

4. 子どもに、神が罪人に対して何を要求しているかを告げていく

神は、罪人たちに悔い改めを命じておられます(使徒 17:30)。真の悔い改めは、単なる自己刷新や、自己変革と呼ばれるようなものではなく、すべての悪から心を背け、神の方へと心に向けることなのです。悔い改めが心の方向転換であること、また、心の問題であるが故に、子どもが行う外面的変化と同

等のものではないことを強調することは良いことです。多くのクリスチャンにとって、「イエスを心にお迎えします…」という祈りを捧げることは、救いを得る方法のように受け止められています。あるいは、集会で手を挙げることや、講壇の前に進み出ていくことなども同じように救いを得る手段と考えられていることが多いのです。しかし、そのような外面的行為に人を救う力など無いということを、私たちは覚えなければなりません。それらは皆、「行い」であり、行いで人は救われ得ないのです。悔い改めの内に、キリストだけを信じる信仰だけが、私たちを神の前に義とする唯一のものであることをみことばは教えています。

8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。 エペソ 2:8-9

もし、例えや比喩を使って、福音の真理を子どもたちに教えようとするならば、現実と空想とをはっきりと子どもたちに示す必要があります。「心の扉を開いて、イエス様をお迎えしましょう！」というような呼びかけや、「罪に満ちた心は、この真っ黒に塗られたハートのようなものです。」という表現は、真理を伝えるのに役立つかも知れませんが、子どもたちは、それらが比喩であるということを、しっかりと理解する能力に欠けているかも知れない、ということを私たちは覚えておくべきです。もし、これらの言葉がしっかりと説明されなければ、それは子どもたちの助けになるどころか、むしろ、福音の正しい理解の妨げとなる可能性があるということを覚えておきましょう。「心の扉を開いて、イエス様をお迎えする」ことを子どもに教えるよりも、信仰とは、「完全に信頼すること」であり、「無条件に、自分を明け渡すこと」とであると教えることの方が、聖書的に正しい救いの概念を子どもに教えることであり、実は、後者の方が子どもにとってより分かり易く、明確であるということを考える必要があります。私たちは、神が求めておられることを、正しく子どもたちに伝えていく責任があるのです。

◆ 悔い改め

わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ。 エゼキエル 18:32

そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。 使徒 3:19

神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。 使徒 17:30

ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。 使徒 26:20

◆ 神をほめたたえない、すべてのことから心を遠ざける

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、 I テサロニケ 1:9

それゆえ、イスラエル之家に言え。神である主はこう仰せられる。悔い改めよ。偶像を捨て去り、すべての忌みきらうべきものをあなたがたの前から遠ざけよ。 エゼキエル 14:6

それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたをそれぞれその態度にしたがってさばく。——神である主の御告げ——悔い改めて、あなたがたのすべてのそむきの罪を振り捨てよ。不義に引き込まれることがないようにせよ。エゼキエル 18:30

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。
イザヤ 55:7

◆ キリストに従う

イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。ルカ 9:23

するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」
ルカ 9:62

わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。
ヨハネ 12:26

わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。
ヨハネ 15:14

◆ キリストを主であり、救い主として信じる

ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。
使徒 16:31

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。ローマ 10:9

5. 子どもに犠牲を熟慮するように助言してあげる

キリストが求めておられる厳しい要求を軽く見てはいけません。クリスチャンとしての人生が、安易な生涯で、困難や問題とは関係の無いものであるかのように話すべきではありません。子どもたちに、キリストに従って生きる生涯は、常に犠牲を伴うものであり、いつか受ける栄光の前には、必ず苦しみがあることを伝えていくべきです。キリストは、確かに、いのちの水を求めるすべての者に無償でお与えになります(黙示録 22:17)。しかし、このように求める者は無条件で、例え、自らのいのちを失うことがあろうとも、キリストに従うという誓いを、既に立てた者であることを忘れてはなりません。

十字架が福音の焦点である理由は、ここにもあります。十字架の刑は、罪がどれほど忌まわしいもの

であるのかを教えてください。十字架は、罪に対する神の御怒りがどれほど大きいかを表しています。十字架は神の愛がどれほど大きなものであるのかを、その贖いのために、支払われた代価によって示してくれています。しかし、それと同様に、キリストに従うことの比喩としてふさわしいものでもあります。キリストは、何度もこのことをご自身の弟子たちに教えられました。キリストに従うことは、キリストのためになら、すべてを犠牲とするという意志が伴うものである、ということのみことばは教えているのです。

◆ 自分の十字架を背負う

イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
マルコ 10:21

34 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。 35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。 36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。 37 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。 マルコ 8:34-37

◆ 死にまでも従順にキリストに従う準備をする

24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。 25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。 ヨハネ 12:24-25

26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。 27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。 28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。 29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、 30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。

31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられますか。 32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。 33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。 ルカ 14:26-33

34 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。 35 なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。 36 さらに、家族の者がその人の敵となります。 37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。 38 自分の十

字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。
マタイ 10:34-38

6. 子どもにキリストを信じるようにながす

新生というものが、子どもの心の中においてなされる聖霊の働きであることは、既に記しました。そして、私たちが子どもに対して外面的に働いて、子どもの口から告白を絞り出すようなことをしてはならないと書いてきました。けれども、福音のメッセージには、緊急性というものも含まれています。そして、その緊急性を子どもに訴えかけることは、決して間違ったことではないはずで

こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているので、人々を説得しようと
とするのです。…

Ⅱコリント 5:11

18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私
たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。 19
すなわち、神は、キリストにあつて、この世をご自分と和解させ、違反行為の責め
を人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。 20 こう
いうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願し
ておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神
の和解を受け入れなさい。

Ⅱコリント 5:18-20

6 【主】を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。【主】に帰
れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してく
くださるから。

イザヤ 55:6-7

D. 熱心に子どもたちを教えていく

これまでの内容を見る時に、ひよっとすると、ある人々は自分がそのようなことを教えるのに不十分であり、
子どもが持つであろう質問に答えることができないと恐れるかも知れません。まして、私たちが教える内容と、
私たちの生活とが一致していることを求められる時、申命記 6:6-7 の命令を実践することが、非常に困難
に見えるでしょう。それだからこそ、軽い気持ちや中途半端な思いで、これらの責任を果たすことができると
考えるべきではないのです。

申命記 6:7 をもう一度見てみましょう。そこでは、『これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなた
が家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。』と記されています。
子どもたちには、「熱心に、よく教え込まれること…」が絶対必要なのです！

もし、あなたが子どもに教えようとするに関して、「自分には知識が足りない…」と感じるならば、あなた
が行うべき正しい選択は教師を辞めることではなく…、教会の必要を補うために…、そして何より、子ども
たちの霊的必要を満たしていくために、もっと学びを進めていってくださることです。

また、神は、私たちに親や教師としてだけでなく、クリスチャンとして他の人を教えるために、福音の根本
的真理をしっかりと理解していることを求めておられます(ヘブル 5:12)。私たちのクリスチャンとしての根本的
責任の一つは、他の信徒を教え戒めることでもあります(コロサイ 3:16)。また、他の根本的責任は、未信
者に福音の真理を教えることです(マタイ 28:19-20)。もし、私たちの霊的真理に関する理解が、子ども
たちを教えることにすら不安を抱かせるものであるとするならば、それは私たちがクリスチャンとして果たさなけ

ればならない根本的責任を果たすことをしてこなかったことを示しているのではないのでしょうか？人を教え、戒めること、福音を伝え、霊的真理を人々に証していくことはクリスチャンとしての責任であり、神からの恵みであり、それを実践していくためには熱心に努め励んでいく必要があるのです。

子どもを教えることは、決して、難解複雑なことではありません。けれども、確かに、簡単なことでもありません。子どもたちに教えていくという働きは、神が私たちに託してくださった、終ることのない…、継続して行われるべき務めです。子どもたちには、多くのことが教えられるべきであり、多くの時が、そのために用いられるべきなのです。その機会を見逃すことがないように、熱心に努め励んでいきましょう。

第4課 CS 教師のための聖書研究

暗唱聖句 テモテへの手紙第二 2:15

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげよう、努め励みなさい。

A. 聖書を教えることの大切さ

「聖書を教えることは大切なことである」という宣言に、異論を唱えるクリスチャンは少ないでしょう。確かに、聖書は私たちの信仰生活の根幹を支える大切な存在であり、聖書の教えなくして、クリスチャンとしての人生を神の前に正しく生きることはできません。それ故に、私たちは聖書を読み、聖書の教えを聞き、聖書を理解し、それを実践することができるように努力していかなければなりません。そして、これはそのまま、教会学校に通う幼い子どもたちにも当てはまる真理であることを、私たちは理解しなければいけません。

救われていない子どもたちに、神の聖さを教え、自分たちの罪に気付かせ、キリストの働きを理解させ、救いの素晴らしさを受け入れるようにするのは、まさに、みことばを通してなされる聖霊の働きです。また、救いの告白をした子どもたちに、クリスチャンとしての生き方とその魅力を理解させるのも、聖書の教えによってもたらされるものなのです。それ故に、私たちは子どもたちが幼い時から、聖書の真理を教えることに務めなければならないのです。

申命記 6 章に記されている家庭における真理の伝達方法を、直接的に、教会学校において適用することはできませんが、それでも参考にすべき多くの大切な原則を見いだすことができます。その一つは、聖書の教えは、教会学校のクラスの時間にだけなされるものではないということです。あらゆる時間に、あらゆる事柄を利用して、親は子どもたちに聖書の真理を伝えるように命じられています。そして、これは私たちの主が、弟子たちを訓練する上でも行った手法なのです。残念なことに、現代社会に生きる私たちは、「学びはクラスの時間に…」という概念に支配されてしまっていることが、往々にしてあります。しかし、聖書的真理伝達方法は、集中した教えの時に行われることもありますが、その多くは実生活の中での関わりを通して行われるものなのです。

教会学校の目的は、聖書の授業をすることではなく、子どもたちがキリストの弟子となっていくことです。それ故に、私たちは学びの時間とそうでない時間とを完全に切り離してしまうのではなく、すべての時間がみことばの真理を伝達するための効果的時間であると考えておかなければなりません。教師たちが、子どもたちを弟子として訓練していくことこそ、教会学校のあるべき姿であり、このような教え方を私たちは目指して働きを行っていくべきなのです。

確かに、聖書は、子どもたちを教える責任を親に与えています。ですから、主の前に立つ時、子どもたちの霊的状态に関して責任を問われるのは、教会学校の教師ではなく、子どもたちの両親です。しかし、神の家族としての広義的な家庭を考えるならば、教会にいる子どもたちを教える責任を私たちが担っていないと考えることはできません。ですから、私たちは子どもを教える働きに従事していかなければならないのです。しかし、教える働きは簡単な働きではありません。そこには注意しなければならない点が幾つもあります。

まず、最初に注意すべき点は、子どもたちを怒らせないということです。エペソ 6:4 でパウロは親に対して、『あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。』と告げています。この真理は、教会学校の教師にも適用することができます。親でない教師は、教えることと戒めることにおいて、親とは異なる立場にいますが、みことばを通して子どもたちを成長させるという目的においては、同じ思いを共有しています。特に、教えるということにおいては、同じ働きを行っていると言っても過言ではないでしょう。その中で、私たちは子どもを「怒らせない」という注意事項にしっかりと目を留めなければなりません。

子どもたちに聖書を教える際、私たちが一番犯しやすい過ちは、「聖書がこう言っているのです！」と言って、与えるべき解説を怠り、子どもたちのことを強制的に主に従うようにさせてしまうことです。子どもが納得することなく…、主がなぜ様々な要求をしているのかを理解することもなく…、ただ単に、命令だけを子どもたちが聞かざれば、そこには怒りが生まれます。確かに、すべてのことを十分に理解することができない場合がありますが、私たちは常に必要な説明をもって、聖書の真理を子どもたちに伝達していく努力を怠ってはならないのです。もし、子どもたちが自分の持つ罪を責められることによって怒るならば、その怒りは責められなければなりません。しかし、もし、私たちが聖書の言葉を伝え損なうが故に、彼らの内に怒りが生じるならば、それは教える側の問題でもあるのです。

次に注意すべき点は、上記のことと深く関連しています。それは、怠惰な者が教師の務めを果たすことはできないということです。教師とは、みことばを学ぶことによって真理を理解し、それを子どもたちに説明することができるように、日々努めている者です。そうでなければ、どうして子どもたちに真理を分かり易く伝えることができるでしょう。また、単に聖書的な知識を持っているだけでなく、実際の生活の中で、その真理を適用していこうと努めている人物でなければなりません。例え、子どもたちと接している時間が、日曜日の数時間だけであったとしても、自分の教師が、どのように信仰者として歩んでいるのかということは、子どもたちに大きな影響を与えます。日々の生活の中で、常に、主に似た者になることを目標として生きている人物が、そのような生き方をすることの魅力が子どもたちに示すことができるのです。このような人物は、福音のメッセージや自分と共に居てくださっているキリストを証ししたいと思っている人です。ですから、教師とはクラスの前準備を土曜日になってから、一生懸命やる人のことではありません。また、表面的な教えで満足するのではなく、子どもたちの生活にどうしたら良い影響を与えることができるのかを真剣に考え、工夫して教えようとする人物のはずです。それ故に、怠惰な人物が教師の務めを果たすことはできないのです。

また何よりも、私たちが教える者として注意しなければならないことは、教師が聖書に対するしっかりとした確信を持って生きているということです。もし、教師自身が聖書に信頼を置くことができなければ、一体、どのようなメッセージを子どもに伝えることができるでしょう。聖書は、私たちがどのような人物であったとしても、主に似た者に変えるために有益なものだという確信を持たない者が、教える働きに携わることは良いことではありません。そのような人物が教えをするならば、子どもたちは聖書以外のものに信頼を置き、依存するようになってしまうのです。

人が神に喜ばれる者として生きていくために、毎日の生活の中で行わなければならないあらゆる選択を聖書は教示してくれます。このことを高々と宣言することができる理由が三つあります。最初に挙げなければならない…、そして、最も根本的な理由は、聖書以外に神のみこころを知り、主の導きを受ける方法は無いということです。まず、このことをはっきりと理解しなければいけません。次に、人生のあらゆる状況に関連する聖書的原則と実践が聖書には記されていて、それは、聖書を十分に理解し、知るために必要な時間と努力をする者に与えられているということです。賢い人は、常にみことばから、このような原則や実践を学んでいます。それによって、選択の時が来た時に、その人がその状況で何をすべきなのかを正しく理解することができるのです。最後に、みことばは、直接的または間接的に、私たちの生活のあらゆることに関して語ってくれています。聖書は私たちがどちらを選択すべきなのか、または、何が正しい選択の範囲に含まれるのかを私たちに示してくれているのです。

神を愛する者へと変えられたクリスチャンが、その神が望んでおられることを知る事ができる聖書という書を学べるということは素晴らしいことです。そして、その聖書を教えることは何にも代え難い素晴らしい特権であり、恵みではないでしょうか。そのことを、CS教師は決して忘れてはならないのです。

B. 聖書を学ぶことの大切さ

聖書がクリスチャンにとって大切なものである、ということを私たちはよく知っています。しかし、私たちが抱えている問題は、その聖書をなかなか理解できないということです。「聖書は古くて難しい本である…」と考え、

読むことすら止めてしまっているクリスチャンが多いのかも知れません。例え、その聖書を読むことはあっても、何も考えずに、ただ読むという行為だけで終わってしまう人が多く居るといっても、これもまた事実です。しかし、みことばをしっかりと理解し、実践することは、すべてのクリスチャンにとって大切なことです。そして、そのことを私たちがしっかりとできるようになるためには、まず、何故、聖書を理解することが大切なのかを、私たちがしっかりと理解する必要があります。ですから、まず、そのことを確認していきましょう。

1. なぜ聖書を理解しなければならないか

「埃まみれの聖書は、汚れた生活を生み出す。」と、ある神学者²は言いました。これは本当にその通りだと言うことができます。みことばによって、私たちの生活がキリストに似たものへ変えられているか、または、この世によって汚れたものになり続けているかの、どちらかが私たちの生涯に起こっているのです。ところが、多くのクリスチャンたちは、著名な先生たちの話を聞くために、苦労して遠くから集会に駆けつけることがあっても、自らがみことばを開き、そこから学ぶことに関しては、同じような努力を払うことはありません。

クリスチャンは、ただ聖書の教えを聞けば良いものではありません。ベレヤの信徒たちのように、みことばの教えに対して、本当にそれが正しいかどうかを、自分自身で見分けることができるような人物になっていかなければならないのです。キリスト教の正しい教理を知ることは大切です。しかし、それがなぜ正しいのかということを一一人が確信を持たずに、調べることもなく、暗記するだけならば、それは決してその人の人生の信念にはなり得ないのです。「聖書を知るよりも、神学を知るべきである。」と考える人がいるかも知れません。「教会の教理と聖書の教えとに違いがあるならば、教会の教理を優先すべきだ。」と考える人がいるかも知れません。「社会的常識と聖書の見識とに相違があるならば、現代の常識に沿って生きていくべきである。」とする人がいるかも知れません。しかし、「聖書が神のみことばである」と私たちが考えるならば、すべてのことは、聖書が教えていることを基準に考えられなければならないのです。

「キリスト教の礎は聖書にある。」と言っても過言ではありません。そして、聖書解釈は、その礎の上に建物を建てる際に、最も大切な大黒柱となるのです。解釈をしっかりと行うことがなければ、私たちは正しい神学を持つことも…、正しい生き方を知ることも…、まして、主に喜ばれる生き方を実践することもできないのです。

しかし、現代のキリスト教会の現状は、実践または神学に基づいて聖書を理解するというものによって代わってきています。「様々な問題の解決は神にある。」と言いながら、自分たちが信じている事柄に聖書を沿わせようとする傾向が、教会の働きや個人の生活の中に非常に強く現れています。しかし、私たちは、もう一度、ベレヤの信徒たちのように、聖書が教えていることをしっかりと探り、それを理解し、私たちが目にし、耳にしていることが、「果たして、その通りかどうかと、毎日聖書を調べていく」必要があるのです。そして、そのために、私たちは聖書をより正しく理解する術を身に付けていかなければならないのです。

2. どうしたら聖書を正しく理解できるのか

正しく聖書を解釈することができなければ、正しく聖書を理解することができません。そこで、私たちが、聖書を正しく解釈できるようになるために、幾つかの前提を整理しておきましょう。

① 聖書が靈感を受けた書であることを理解する

一体、「靈感」とはどのようなことなのでしょう？この問いに関する答えは、私たちがどのような聖書理解を持ち、解釈するかを決めるものです。しかし、残念なことにすべての人が同じ答えを持っているかと言うと、そうではありません。では一体、どのような理解があり、その中で正しい答えとはどのようなものなのでしょう。そこで、幾つかの代表的な立場をあげて、このことを考えてみましょう。

最初の立場は、自然主義です。この立場を支持する人は、聖書が宗教的達人たちによって書かれたものであると信じています。聖書の著者たちは宗教に関して天才的であり、道徳的また形而上

² Howard G. Hendricks and William D. Hendricks, *Living by the Book* (Chicago IL: Moody Press, 1991), 11.

学的事柄に関して高い知識を備えていたと考えます。彼らは「靈感」という言葉を、ミケランジェロやバッハが「インスピレーション」を受けて、素晴らしい芸術を生み出したのと同じ意味合いで捉え、聖書の著者たちも、他の歴史上の人々がしてきたように、敬虔な思想と霊的識見を書き留めるように鼓舞されたのだと理解しているのです。ですから、このような立場を支持する者たちにとって、聖書は人間によって記された一大傑作であり、神の啓示ではありません。

二番目の立場は、部分的靈感主義です。このような理解を持っている人々は、聖書のある部分は神からの靈感を受けているが、他の部分はそうでないと信じています。神は人間の著者を導いて、救いや信仰、また、クリスチャンの歩みに関する事柄を書かせましたが、それ以外の歴史的、地理的また、科学的な事柄に関しては、そのような導きを与えていないと考えます。つまり、道徳的、宗教的なこと、または、人間の理解を超えるような事柄に関しては靈感を受け、間違いの無いものであるが、それ以外のこと、または、人間が自分で知り得るような事柄に関しては靈感を受けていないが故に、間違いが含まれていると理解しているのです。この立場を取る人は、著者が何を書くのかに関して選択権があった(=著者の意志によって書いた)ために、聖書には不正確さ、誇張、また、神話的表現が含まれていてもおかしくはないと言うのです。

三番目の立場は、新正統主義です。新正統主義者たちは、「聖書は神のみことばになる。」というような表現をします。これは、「聖書は神のみことばである。」という考え方と大きく異なるものであり、事実、彼らは「聖書は神のみことばではない。」と言います。彼らは、聖書が個人に働き、人を変える時に、初めて、神のみことばになるのだと考えます。彼らは、「聖書は神からの完璧な啓示なのではなく、人間の間違いを含む言葉が記されているが、人間はそれを読み、神との個人的な関係を持つことができるのだ。」と言うのです。聖書そのものは神の言葉ではないが、人間が聖書を読む時、キリストがその言葉を通して、読者に語りかけてくださることによって神の言葉となるのだ、というように考えるのです。特に、この見解を持つ人々は、神はみことばを通して、御自身を示されるのではなく、神の御臨在を通して示されるのだと理解しています。聖書には多くの間違いや、神話、誇張がありますが、神がそれらをも用いて個人的に御自身を示してくださるので、重要なのは聖書に記されている出来事やその詳細なのではなく、そのテキストから溢れ出てくる、読者を感動させる思いだと言うのです。

そして、四番目の立場は、完全逐語(靈感)主義です。ここで使われる「完全」という言葉は「全てが十分に欠ける所なく…」という意味を持っています。つまり、聖書の全ての部分が、完全かつ十分に靈感を受けているということです。また、「逐語」という言葉は、書かれている全ての言葉が、神が啓示したいと願ったことであるということです。神が思想だけを人間に与え、その思想を著者が自分勝手に書き記したのではないのです。確かに、神は著者が自分のスタイルで、みことばを書き記す特権をお与えになりましたが、その細部に至るまで、神の伝えたいことがまさにそのまま記されているのです。

上記4つの内、どの立場を取るかということは、私たちが聖書をどのように理解するかということについて大きな変化をもたらします。もし、私たちが自然主義的立場に立つならば、私たちは、素晴らしい小説を読むのと同じように、聖書のみことばを読むようになるでしょう。そこには一切絶対的な見地は無く、すべては「偉大」と呼ばれる人々の意見にすぎなくなります。聖書を学ばなくても、歴史上の優れた知者の言葉を読めば、充分私たちの生活に役に立つと考えるようになるでしょう。

また、もし私たちが部分的靈感主義を持つならば、私たちは聖書のどの部分を信用し、どの部分を信用すべきでないかを明確に判断することができないために、聖書を学ぶことを無意味だと思ってしまうようになるでしょう。あるいはまた、新正統主義者として聖書を理解しようとするならば、私たちはみことばを学ぶこと自体がバカらしいものと考えようになるでしょう。私たちが聖書を読んだ時に感じる事柄こそが重要なのであって、聖書に書かれていることはそれほど重要ではないからです。

聖書は、真の神からの聖なるみことばです。新改訳聖書で、『神の靈感による…(Ⅱ テモテ 3:16)』と訳されている部分は、欄外にあるように、「神の息吹による…」というような表現が使われています。

つまり、ここで教えられていることは、聖書のみことばは神御自身が語られた言葉であるということです。そして、完全な神が語った言葉であるならば、当然、そこには間違いが無く、全てが真実であり、私たちが全存在をもって信頼し、従うべき言葉が記されているはずなのです。

しかし、残念なことに、多くのクリスチャンは、故意ではないかも知れませんが、自分が完全逐語(靈感)主義者であると言いながら、実際は別の立場に立って聖書を理解しようとしていることがあります。まるで、おみくじのように聖書を扱い、ある日突然、神が語りかけてくださるのを待っているかのように、聖書通読をし、「現代の私たちにはもっとふさわしい生き方がある…」と言って、みことばが教えることを否定する生き方をします。神は私たちがどのように生きるべきなのかを、聖書を通して、明確に教えてくれています。ですから、私たちは聖書を正しく理解する必要があります。

②聖書を読むようになる

私たちは「読書が趣味です」という人に出会うことがあっても、「聖書を読むことが趣味です」という人に会うことはほとんどありません。私たちの多くは、「聖書は難しい本である」という考えを持っていて、「専門家でないと理解できない…」と、最初からあきらめている場合がよくあります。事実、「聖書を読むことが楽しい!」、また、「聖書はすごく面白い!」と心から思って、聖書を読む時間を心待ちにしている人を見かけることは、非常にまれです。

そこで、まず、私たちが聖書を読まなければ、みことばを正しく理解することはできません。何となく教会学校で聞いたお話は頭に残っているかも知れませんが、具体的に、聖書が教えていることは何かと問われると、答えに困ってしまうようでは、「聖書を知っている。」とは言えないのではないのでしょうか。もし、私たちが、「聖書は、真唯一の神様からのお言葉であり、私たちにとって最高の指針である。」と確信しているならば、私たちは聖書をよく読んでいます。そして、もし神が、この書を人生の設計図として、私たちが正しく生きるために与えてくださっているとすれば、私たちは、この書を他の何よりも身近なものにしているはずなのではないでしょうか。

しかし、聖書のみことばは、私たちが、ただ読んでいれば良いというものではありません。私たちは、「聖書を読むために、聖書を読む」ことをしてはいけません。そうではなく、「聖書の教えを理解し、それを実践するために、聖書を読む」ことが求められているのです。では、一体どのように聖書を読むことができるのでしょうか? 聖書を読むための方法は1つではありません。そこで代表的な読み方を幾つか挙げてみましょう。

多くの人は、聖書を通読することが良い方法であると考えています。確かにそれは必要なことです。毎日、旧約から3章、新約から1章読むと、1年で聖書全体を読むことができます。こうして毎日、聖書を少しずつ読む癖をつけることは、特に聖書を読む習慣のないクリスチャンにとって必要な鍛錬でしょう。しかし、1年かけて聖書を通読しても、読んできた内容を理解しているかと問われると、困ってしまうことが多いのではないのでしょうか? また、多くの人が、出エジプト記やレビ記に差し掛かると挫折を経験してしまっているというのが現状です。

ある人はデボーションの本を使って、その日あげられている聖書の箇所を日課として読みます。長くても数節しか記されていないこのような本は、日々聖書に触れるという点では有効かも知れませんが、また、このようなみことばは覚えやすいこともあり、1日かけて、そのみことばを思い巡らすこともできるでしょう。しかし、文脈から切り離された1~2節のみことばは、多くの場合に、間違った理解を人々にもたらすことがあります。また時に、このような方法は、聖書をおみくじのように取り扱うことのきっかけとなることもあります。

また、ある人は、繰り返して、1つの本を決まった期間読み続けます。例えば、1ヶ月間、毎日コロサイ人への手紙を読み続けます。これは聖書が言っていることをより良く理解する助けになるでしょう。同じ箇所を何度も繰り返し読むことで、自然と書かれている内容に親しんでいくことができます。しかし、

このような読み方だけをしてしまうと、聖書全体を理解することが非常に困難になります。このような方法は、時に偏った知識を生み出してしまうことがあるでしょう。

また、ある人は、聖書の詳細に目を向けるのではなく、全体像を掴むために速読をします。細かい事柄(系図の名前、建物の詳細、地理など)を一語一句読むのではなく、概要を掴むために読み流すのです。この方法は短期間で大まかな内容を掌握するのに秀でています。しかし同時に、このような読み方だけをするならば、聖書の一点一画が靈感を受けているということを軽視し、詳細部分に記されているすばらしい真理を見逃すことになってしまうでしょう。

また、ある人は1節ごとを細かく読むでしょう。速読とは逆に細部に注意を払って、1つ1つの言葉の意味を吟味し、そこに書かれていることを最大限理解しようとする読み方です。これをすることによって著者が語っていることをより良く知ることができる反面、これだけをすれば、全体の文脈を知ることが難しいので、その理解が間違っただけのものとなる危険性を秘めています。

これらはあくまでも代表的なもので、これらの他にも様々な読み方があるでしょう。しかし、これらを見たときに分かることは、どの読み方にも長所・短所があり、これらを組み合わせる時に、私たちはよりしっかりと聖書を知ることができるようになるということです。機械的に聖書のページをめくっていても私たちは霊的に成長することはありません。書かれている真理を正しく理解し、それを実践していく時、私たちは成長していくのです。ですから、私たちは、その目的のために聖書をより良く読むことを学ばなければならないのです。

私たちクリスチャンにとって、聖書の学びは、「楽しいもの、必要なもの」であるはずですが、世の人々が連続ドラマを見逃すのが嫌で、録画を忘れないのと同じくらい、いやむしろ、それ以上に、私たちは聖書のみことばを学ぶことを逃すのが嫌だと思っているべきです。自分の人生の中で、最も大切な御方から、1人1人に向けて語られている手紙が聖書です。…だとすれば、私たちは万難を排して聖書を理解することに努めなければならないのです。

C. 聖書を正しく理解するための絶対原則

これから、しばらく、私たちは、みことばの具体的な学び方を考えていきます。始めに見るのは、私たちが聖書を理解するにあたって必ず守らなければならない最も大切な原則です。それを理解した上で、私たちはまず、聖書の書簡全体の概略を見つめる学び方を簡単に学びます。このアプローチは詳細を見つめるのではなく、概要を掴むことを中心とした学び方です。聖書各書の大筋を理解することによって、たくさんの難解な箇所はより明快なものとなっていきます。文脈を知り、どのような部分に1つ1つの節が属しているのかを理解することは、みことばを正しく知るための鍵となります。また、各書の全体像を知ることによって、学んでいる書簡の強調点を理解することができます。著者のテーマや意図を理解することは、聖書解釈のバランスを保つ助けとなります。

私たちが聖書を正しく理解しようとする時、忘れてはならないことがあります。それは、本当の正しい解釈は1つしかないということです。確かに、聖書の中には、難解な箇所がたくさんあります。そして、それらの難解とされる聖書箇所には様々な解釈がなされる場合があります。しかし、主がみことばを通して教えてくれている真理に、幾つもの解釈・理解があるのではなく、そこには、1つの正しい解釈に基づいた、1つの真理があるだけなのです。そこで、私たちが聖書を学ぶ上で、まず理解しておかなければならないことは、神が告げ知らせている真理を知るために、正しい解釈をしなければならないということです。

では、正しい解釈とは何を知ることによって導き出されるのでしょうか？それは、著者がオリジナルの読者に伝えたかったこと、また、オリジナルの読者が理解したことを考えることによるのです。しかし、残念ながら多くのクリスチャンたちが、聖書を学ぶ時に考えていることは、「私にとって、この箇所はどのような意味を持っているか？」ということです。確かに、聖書の真理を私たちの生活に適用することは大切なことであり、実践しなければならないことですが、それは真理を正しく理解した後に行うべきもので、その過程の中でなすものでは

ありません。

私たちが著者の意図を無視して聖書を解釈し始める時、そこには必ず間違った解釈が生まれます。何故なら、著者たちは私たちに直接語っているのではなく、彼らが生きていた時代の人々に宛てて、みことばを記しているからです。ですから、パウロがテモテに宛てた手紙は、テモテに対して、パウロが何を伝えたかったのか、テモテはその手紙を読んで、どのように理解したのかを知ることによってのみ、正しく解釈することができるのです。

ここで、1つの例を挙げてみましょう。創世記で、主はアブラハムに対して次のように語ります。『あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。』（創世記 12:1b-2）⇒すると、ある人は、この箇所を読んで、「神様は、私に実家を出て、神の示す場所へ行きなさいとおっしゃっているのだ！」と考えます。もし、私たちが聖書を解釈する上で、「私にとって、この箇所はどのような意味を持っているのだろうか？」と考えて解釈すれば、このような結論が生まれるのは当然のことかも知れません。では、ここでモーセが教えようとしていたことは、その人が実家を出て、どこか他の地へ転居することだったのでしょか？

いいえ、著者であるモーセは、明らかに、今の時代に生きている私たちに対して、そのようなメッセージを発してはいません。また、この言葉は、モーセの時代に生きていたイスラエル人に対して発せられている言葉でもありません。文脈が明らかにするように、この箇所は歴史的事実を綴っているもので、ここでは、主がアブラムに対して語っているのです。モーセは、このことを記すことによって、カナンへの地へ入っていかうとするイスラエル人が、これから占領する土地は、神が自分たちに与えてくださった約束の地であることを理解させるために、この記事を書いたのです。この著者の意図を無視した解釈を、私たちが行っていくなれば、それはみことばの乱用以外の何物でもありません。

確かに、著者の言っていることを正しく理解することは簡単なことではありません。私たちが生きている文化や背景とは全く異なる状況の中で生きていた著者たちの意図、そして、何千年も前に違う言語で書かれた文書を、正しく解釈するためには、歴史的背景や文法をより深く理解していくことが必要になります。みことばを正しく解釈する上で、私たちは常に、著者が伝えたかったことは何なのか、ということを考えていなければなりません。そのために、私たちは幾つかの具体的な方法をもって学びを進めなければならないのです。

D. 聖書の大筋を学ぶ

聖書を解釈するための具体的な方法として、最初に紹介するのは、聖書の大筋を学ぶということです。前項で見たように、私たちは様々な方法で聖書を読むことができます。しかし、どの方法を用いたとしても、ただ読むだけでは、あまり、私たちの成長には繋がっていきません。私たちは目的をもって、みことばを読まなければならないのです。そこでまず大切なのは、私たちが正しく全体像を掴んでいることです。私たちは聖書を区切って読むことに慣れ親しんでいます。特に、新約聖書において、私たちは様々な書簡が手紙であることを忘れてしまっていることがあるかも知れません。通常、手紙を読む時に、私たちは、その手紙を毎日数行ずつ読むことはしません。そして、様々な書簡を受け取った教会も同様に、それらの手紙を数行ずつ読むことはなかったのです。全体を理解することがなければ、詳細を正しく知ることはできません。なぜなら、聖書はランダムに金言が並んでいるものではないからです³。著者は目的をもって、その書を書き綴っています。その目的に沿って、各章・各節は書かれているのです。ですから、まずは、各書の全体像を理解した上で、その後で、その書の細部に注目していくことが必要なのです。

例えば、ヨハネの福音書にはイエスが行った奇蹟が8つ記されています。ヨハネは、それらの奇蹟を、『しるし』と呼び、無数に行われたイエスの奇蹟の中で、目的をもって、それらのしるしを福音書に書き記しました。

³ 箴言は例外です。箴言の多くは、金言集です。

このことは、それぞれのしるしを別々に学んでも、はっきりと理解することは困難です。しかし、この書の目的をしっかりと理解した上で、1つ1つの奇蹟を考える時、ヨハネが、なぜ、これら8つの奇蹟について、その詳細を記したのかを知ることができるのです。

全体像と言っても、様々な種類があることを私たちは覚えておかなければなりません。まず、聖書66巻という全体像があります。聖書は、すべて神の靈感によって書かれたものですから、聖書には一貫した目的やテーマを見て取ることができます。すべての書は、この一貫した目的やテーマとつながりを持っているのです。また、旧約聖書、新約聖書という枠組みもあります。そこでは、確かに、違うテーマを見て取ることができます。また、各書という区別・違いがあるのも当然理解できるでしょう。しかし、それだけではありません。例えば、モーセ五書は一卷の書として、その全体の文脈を考慮して読むべきであり、ルカの福音書と使徒の働きは、前後書としてとらえられるべきです。パウロ書簡という大きな枠組みを考えることもできますし、共観福音書という枠組みもあります。聖書を読む時間に、これらの事柄を考慮して読み進めていくことは、私たちのみことばの理解を大いに助けるものとなるのです。

時に、速読をして全体に慣れ親しみ、時に、繰り返し何度も同じ書を通して読むことで内容をより身近なものとし、詳細に目を配る前にある程度全体の流れを知ることが必要です。そして、みことばを読んでいく際に、ただ文章を眺めていくのではなく、著者の思考の流れをアウトラインにして追っていったり、テーマやテーマとの関係を考えたりしながら読んでいくことも大切です。学びをするから、聖書を注意深く読むのではなく、普段から思慮深く聖書を読んでいくことが必要なのです。

聖書の大筋を学ぶことは大切です。しかし、それだけでは、みことばを正しく理解することは困難です。聖書の詳細をしっかりと理解するためには、全体像を掴むだけでなく、そこに書かれているみことばを注意深く観察し、解釈していく必要があります。聖書研究の目的は、神の啓示を明確に理解することであり、それに基づいて私たちが変わっていくことであるはずで、この目的を達成するために、私たちは、次の3つの質問の答えを出すことが必要です。3つの質問とは、1)「何を言っているのか？」 2)「どのような意味なのか？」 3)「それが私にどのような影響を与えるのか？」というものです。これらの質問は、①観察、②解釈、そして、③適用という言葉に置き換えることができます。これは、医者が患者を診察する時に用いられる方法と同じと言っても良いでしょう。まず、質問をすることによって、事実を掌握し(観察)、検査や質問の答えから診断を下し(解釈)、その診断の元に適切な治療を施す(適用)のです。次に、それらのことを、もう少し詳しく理解していきましょう。

E. 聖書の詳細を学ぶ: 観察

観察のステップは、私たちが正しい聖書解釈まで到達するために、絶対不可欠な要素です。十分に観察することができなければ、不完全な解釈が生まれてくる可能性が高くなります。観察することによって、「何を言っているのか？」ということを知ることができ、そこで語られている事柄の意味を十分に考察することができるようになるのです。聖書を学ぼうとする時、ある意味、私たちは熟練刑事のようにならなければならない。事件現場の状況に注意深く目を留め、小さな変化にも興味を示し、決して、これで充分であると考えることなく、忍耐強く、繊細に事件を解決する糸口を見つけようとする刑事のように、みことばに接するのです。初めのうちは、何を観察したら良いかさえ分からないかも知れません。しかし、繰り返し、この作業を行っていくうちに、私たちは何に目を留めるべきなのかを知っていくことができるのです。まずは、私たちが目を留めるべき点の代表的なものを見ていきましょう。

1. 6つの質問をする

みことばを観察する時、私たちが考えなければならない6つの質問があります。それは「いつ」、「どこ」、「だれ」、「なに」、「なぜ」、「何のため」という質問です。これらは文章を理解する上で当然の疑問なので、誰もが聖書を読む際に行っていると思われるがちですが、注意深く、この質問をみことばに投げかけていくと、

いかに、これらの質問をしっかりとすることが大切であるかを知ることができます。

福音書などの物語形式になっている個所では、「いつ」という疑問を、常に持っていなければなりません。例えば、マタイの福音書に記されている出来事は、必ずしも、キリストの生涯を時間通りに記述しているわけではありません。また、共観福音書に記されていない記事が、ヨハネの福音書にはたくさん記されています。それらの出来事が、一体いつ起こったのかを正確に知ることは、そこで告げられている事柄の内容を正しく理解するために不可欠です。また、「いつ」という質問は、福音書などの物語だけでなく、書かれている事柄がいつ起こったのか、いつ行すべきなのかということを理解するためにも用いられます。例えば、Ⅰヨハネ 4:9 では、『神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。』と記されています。では一体、いつ、神の愛は示されたのでしょうか？その疑問は、この節の前半部分で回答されています。神の愛は、御子を世に遣わし、いのちを得させるという行為によって、私たちに示されているのです。この愛を示すという行為は、継続的なものではないことを、「いつ」という質問を、この節に対して投げかけることによって知ることができるのです。

また、「どこ」という質問も、非常に重要です。物語では、どこで、その出来事が起こっているのかを知ることが大切なことです。例えば、受難週にイエス様がエルサレムに入城された時、イエス様が泣いた姿をルカは記しています。ルカ 19:37-44 の文脈に、「どこで」という疑問を投げかける時、私たちは、このように涙されたイエス様の姿と、その状況を理解することができるようになります。また、書簡が書かれた場所はどこだったのか、また、宛先である教会が所在していた場所はどこだったのかというようなことを知ることは、新約聖書を理解する上で、非常に大事な要素です。

次に、「だれ」という質問は、日本語の聖書を読む時に、とても大切です。日本語では主語を明示しなくても文章が成り立つので、繰り返し、主語を使うことを嫌う傾向があります。その結果、誰が、誰に対して語っているのかが明確になっていない場合があります。また、特定の人物があげられている場合、それらが誰なのか、どのような人物なのかを知ることが、解釈をする上で重要です。例えば、『私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。』（Ⅰテサロニケ 4:14）と書かれている個所があります。ここで、「だれ」ということを観察することによって、私たちは非常に大切な疑問を持つことができます。パウロは、『私たち』とどこで言いますが、『私たち』とは具体的に誰を指すのでしょうか？ここにパウロが含まれているのは明白ですが、では複数部分は誰を指しているのでしょうか？これはⅠテサロニケ 1:1 で記されている、テモテとシルノワのことを指しているのでしょうか？それとも、ここではテサロニケの信徒たちをも含んでいるのでしょうか？また、『イエスにあって眠った人々…』とありますが、これは誰のことを指しているのでしょうか？『眠った人々』とはどのような人物なのでしょう？また、これはクリスチャンだけを指すのでしょうか？それとも、旧約の信徒たちも含まれているのでしょうか？このように、「誰が」という疑問も、これまた大切なものなのです。

今度の、「なに」は、私たちが最も考えていなければいけないことでしょう。詳細を理解する上で、この質問をしないことは致命的であると言っても過言ではありません。何が起こったのか、どのような考え方が示されているのか、何が命じられているのか、何を与えられているか？などの大切な事柄に気付かせてくれるのが、この「なに」という質問なのです。私たちは観察を行うにあたって、数え切れないくらい、「なに」という質問をみことばに投げかけているのです。

また、「なぜ」は原因を探るものです。観察段階で、これが用いられる時、この疑問は私たちに書かれている事柄が起こった原因や、理由が記されていないかを探らせます。ある時は、「なぜなら…」という言葉が、この質問の答えを提示してくれるでしょう。しかし、このような言葉が使われていないところでも、理由や原因を告げていることがあります。もう1つ、ここに付け加えないといけないのは、「どうして」という質問です。時に、この質問は原因や理由を導き出すものですが、ある時は、方法を考えさせます。どのようにして教えられていることを実践するのか、その方法が記されていることがあります。それらを知るために、この質問をしなければならぬのです。

そうして、最後は、「何のため」という質問をしなければなりません。これは目的を考えさせる質問です。何のために、私たちは生きるべきなのか、何のために命令がされているのか、何のために様々な出来事が起こったのか、これらのことをしっかりと観察することができるようになるために、私たちはこの疑問を聖書のテキストに投げかけるのです。これら6つの質問をすることによって、私たちは非常に多くのことに気付くことができるのです。

2. どのような言葉や構成が用いられているかを考える

みことばは単なる文字の羅列ではありません。そこには意図された構成が存在します。著者の目的に基づいて、それぞれの言葉は意味をもって使われています。それ故に、私たちは、聖書に記されている、どの言葉も軽々しく扱ってはけません。このことは、ルカ 20:37-38 にはっきりと見ることができます。そこでイエス様は、動詞の時制をもとに、1つの大切な教えを与えてくれているのです。

『柴の個所で…』とは、出エジプト記 3:6 での出来事です。そこで神はモーセに対して、『わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。…』と語られます。そして、イエス様は、この文章を解釈して、サドカイ人の挑戦に答えるのです。日本語でもはっきり分かるように、ここで神はモーセに対して現在形で話をしています。別の言い方をすれば、「私はあなたの父の神であった…」とは言わないのです。確かに、アブラハム、イサク、ヤコブは、モーセの時代よりも数百年も前に生きていた人物です。ですから、神は過去を表現する言葉で、彼らの神であったことを示すこともできました。しかし、神は、敢えて、現在も彼らの神であることを告げたのです。そして、このことからイエス様は、復活に関する大切な教えを導き出しているのです。

ある人は、聖書中の細かな表現の違いは、文章をより美しく文学的に受け入れられるものにするために用いられたと考えます。しかし、決して忘れてはいけないのは、聖書はすべて靈感を受けているのです。『なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。』(Ⅱペテロ 1:21)。ですから、私たちは、聖書の言葉1つ1つをしっかりと観察して、教えられていることを理解する必要があるのです。では具体的に、どのようなことに注目すべきなのでしょう？主なものを、幾つかあげてみます。

聖書を読む時に、最初に目に留まるのは、1つ1つの単語です。それらの中には何度も繰り返されている言葉や、学んでいる個所で最も重要な概念を伝えるような鍵となる言葉が出てきます。これらを見つけることは、その個所を理解していく上で大きな助けとなります。例えば、創世記 1 章では、『神』という言葉が何度も登場します。それに対して、創世記 2 章では、『神である主』という言葉が繰り返されています。これらは単なる表現の違いではなく、これらの章が伝えようとしている焦点の違いを私たちに教えてくれているのです。

Iヨハネ 4 章の後半では、『愛』という言葉が何度も使われています。繰り返されている概念や言葉、中心的な言葉を見つけることは、著者の意図を理解する上で役立ちます。また、使われている単語が単数であるのか複数であるのかで意味が大きく違ってることがあります。例えば、「罪」と訳されている言葉が単数であるか複数であるかを考えることは、解釈上、大きな違いをもたらすのです。

また、接続詞に目を向けることも大切です。これらの単語は小さな単語ですが、文脈の中で、大きな役割を担っています。これらの言葉は文章のつながりや、その流れを教えてくれるものです。残念ながら、日本語の聖書は、これらの接続詞を十分に翻訳していない場合があります。それ故に、英語の聖書などを参照にすることは、この点で非常に大きな助けとなるでしょう。

単語は、それだけでは意味を伝えません。バラバラの単語がつながり合って、1つの意味を持った文章になるのです。この文の中で最も重要と言えるのが、主動詞です。主動詞はその文が何を伝えようとするのかをコントロールする役割を担っています。短い文章の中では、主動詞を見つけることは、それほど困難なことではありません。しかし、長文や複雑な構成をした文章では主動詞をしっかりと理解しておくことは大切なことなのです。また、動詞の時制や動詞の態(能動態・受動態など)なども、きちんと観察しな

ければなりません。そこで語られていることが、過去に起こったことなのか、現在も継続していることなのか、あるいは、未来に起こることなのかを観察しなければなりません。また、誰がその動詞の行為者であるかを知ることが文章の意味を理解する上で、欠かすことのできないことです。

その他の文章の構成を考えることも必要です。聖書に記されている文の多くは、主文だけで成り立っているのではなく、様々な節や句などが付随して構成されています。これらをしっかりと観察し、その役割を正しく知るきっかけとしていかなければならないのです。

構成を考える時に、そこには文章としての構成だけでなく、学びをしている個所のアウトラインも考えることができるでしょう。前項では大筋を学ぶにあたって、著者のアウトラインを考えることを学びましたが、詳細を見ていくにあっても、文章の流れ、著者の思考を観察することができるのです。

単語や構成を考える時、私たちは観察しなければならない事柄を、まだまだたくさんあげることができませんが、1つ1つの言葉、1つ1つの節や句を十分に観察することによって、私たちはこれまで見逃していた多くの真理に気づくことができるようになるのです。

3. 重要な教えがあるかを考える

私たちが聖書を読む上で、見逃さないように心掛けていないといけないことが幾つかあります。それらが学んでいる個所に出てくるかを、私たちはしっかりと観察しなければなりません。この重要な事柄は、全部で6つあります。1番目は命令です。守らなければならない命令が記されているかどうか注目しなければなりません。2番目は例です。模範として倣うべき例が挙げられているならば、そこに目を留める必要があります。3番目は宣言です。特に、神に関する宣言や人の性質に関する宣言には注意を払う必要があります。4番目は罪です。そこに、悔い改めるべきこと、あるいは、捨てるべき罪が記されているならば、それらをしっかりと知る必要があります。5番目は原則です。私たちがどのように生きるべきなのかを記した原則があるならば、それを見付ける必要があります。そして、6番目は約束です。私たちに与えられている約束、神が人々に与えた約束が記されているならば、それを理解する必要があります。

4. どのような比喩が使われているかを考える

最後に覚えておかなければならない基礎的な観察の項目としてあげることができるのが、比喩です。比喩は、内容をより分かりやすくする、また強調をするために用いられる文学的表現方法です。私たちは聖書を字義的に解釈することを訴えています。比喩を正しく文脈の中でとらえることは非常に大切なことであり、比喩を見つけることができないと、この後行う解釈に問題が生じていくのです。

以上の事柄に、敢えてもう1つ付け加えるとするならば、それは、「文脈を考える」ということでしょう。このことに関しては解釈の所で、もう少し詳しく考えていきますが、どのような文脈の中に学んでいる個所が書かれているかを知ることが非常に大切なことです。

私たちがみことばを観察することを最も妨げるのは、私たちが持っている固定観念です。私たちはこれまで、様々なところで多くの学びに参加し、多くの言葉を聞き、多くの本を読んできました。時に、信頼する教師に出会い、彼らの言葉が真理であると確信してきました。しかし既に記したように、私たちはベレヤのクリスチャンのようではなかなければならないのです。彼らはパウロが語ったから信じたのではなく、パウロが語った言葉がみことばの教えと合致したものであったから信じたのです。残念ながら、私たちは、今から頭を完全に白紙にし、ありとあらゆる前提を取り除いた上で、学びを始めることはできません。しかし、それらに支配され、みことばを私たちの概念に沿わせて理解することがないように気を付けなければなりません。

観察は、私たちが正しい解釈に到達するために必要なプロセスです。しっかりと書かれていることが何であるのかを理解する時、私たちが解釈をする上で、必要な質問をテキストにしていくことができます。同時に、十分な観察をしないなら、私たちは必要な質問をみことばに投げかけることができなくなるのです。観察を充分に行った上で、私たちは次のプロセスである解釈へと進んでいくことができるのです。

F. 聖書の詳細を学ぶ: 解釈の必要性

観察することは大切です。しかし、十分に観察しただけでは、著者の記している意味を正しく理解することはできません。観察をすることによって生じたはずの、たくさんの疑問に対して、私たちは明確な答えを出していかなければならないのです。オリジナルの読者たちは、今の私たちのように解釈をする必要はなかったでしょう。彼らは著者の意図を知ることができる環境の中にいたからです。しかし、現代の私たちは、彼らのように、みことばを読むだけで語られていることを理解することができないのです。そこで解釈が必要になります。

ある人たちは、聖書を開いて読むだけで充分だと考えます。例え、このように考えていない人でも、クリスチャンの多くは、実際に聖書を読む時に、解釈をする必要があると思いながら読むことがあまりありません。しかし、残念ながら正しい理解を妨げる壁があるので、私たちは聖書を開いて、そこに書かれていることを読めば、容易に、そこに記されていることの意味を正しく理解できるわけではないのです。そこで、まず、なぜ私たちが容易に理解できないのかを少し考えてみましょう。そして、なぜ私たちが解釈に時間をかけなければならないのかをしっかりと理解しましょう。

1. 言語の壁

最初にあげることができる、私たちの理解を妨げる壁は言語の壁です。外国語で書かれている文章を理解するためには、単に、そこに書かれている単語を理解するだけでは充分ではありません。ヘブル語、アラム語、そして、ギリシヤ語で書かれている聖書は、確かに、翻訳者の手によって素晴らしい日本語の聖書へと翻訳されていますが、残念ながら、翻訳では十分に表現しきれない事柄や、文章の構成上、省かれる事柄があるのです。それぞれの言語の中で用いられる独特のニュアンスを理解することは、正しい解釈をするために必要なことです。それ故に、単に、聖書を読むだけでは、その意味を正確に理解することが困難なのです。オリジナルの読者は、この壁を持っていませんでした。彼らは著者が書き記した言葉を正しく理解することができる言語環境の中にあつたのです。しかし、2000年の時を経た日本に生きる私たちは、この壁を乗り越える努力をする必要があります。そのためには、辞書を使ったり、文法の本を読んだりすることができるでしょう。あるいは、他の翻訳と比較することも助けになるでしょう。また、聖書の注解書などを通して、教えられることも多々あります。

2. 文化の壁

言語の壁に近いのが、この文化の壁です。言語は文化の表現であり、常に、文化を反映するものだからです。そして、聖書が書かれた当時の文化は、私たちが現在生きている文化とは大きく違うのです。それ故に、正しく聖書に書かれている事柄を理解しようとするならば、その当時の文化的背景を理解しなければなりません。私たちは、現在の文化的習慣を聖書に持ち込んではいけません。その当時、どのような風習があり、どのような交通手段が用いられ、どのような仕事があり、どのように人々は毎日の生活を送っていたのかを考えて、みことばを理解しなければならないのです。聖書辞典や歴史の本を参考にしながら、当時の生活風習を考えることは、実に有効なことです。地図を使って気候や地理的状況を知ることは書かれている事柄の内容を知るために大きな助けとなります。動物の生態系や、食物分布、食習慣や職種、哲学的・宗教的背景や、その他様々な生活風習全般を正しく理解することによって、私たちの聖書理解は大きく前進するでしょう。

3. 理解力の壁

大人が子どもに様々なことを教えようとする時、そこにはコミュニケーションギャップというものがあります。かけ算もできない子どもに因数分解を教えようとしても、その説明は意味をもって届くことはありません。同じように、私たちが神からのメッセージを理解しようとする時、そこには理解できない事柄が存在するのです。有限な人間に、無限の神が語る言葉をすべて完全に理解することは不可能です。それを完全に

説明することは有り得ないのです。しかし、それは私たちが正しい解釈をすることができないということの意味するものではありません。神は私たちに理解力を与えてくださり、みことばを教えてください。また、私たちが何か答えの見つからないような疑問にぶつかった時、私たちは常に真理であられる神を信頼することができます。私たちが解釈の原則をしっかりと理解し、それらに注意を払って、祈りの内に、聖霊の助けによって、みことばを解釈していく時に、私たちは足りない知識の中であって、正しく聖書を解釈することができます。そして、完全には理解できなくても、充分信じることができるようになるのです。

G. 聖書の詳細を学ぶ：解釈をしないことの危険

このように、聖書の正しい理解に到達するにあたって、幾つかの壁を持っている私たちは、その壁を乗り越える方法を身に付けていかなければなりません。もし、私たちが解釈の方法を習得しなければ、私たちは非常に危険な過ちを犯してしまう可能性があるのです。それらの危険には次のようなものが含まれます。

1. 聖書を間違っ理解し、教えてしまう

私たちは時に正しく聖書を読むことをしません。急ぎ足でみことばを読んでしまうために、その全文に注意を払わずに間違っ理解を持つことがあるのです。熟考することを怠ると、私たちは、このような過ちを犯してしまいます。例えば、よく私たちは、『ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。』（マタイ 18:20）という聖句が、「祈りについて教えている…」と言われたり、「人数の少ない集会でも、主がそこにいて祝してくださる…」などと教えられたりするのを聞くことがあります。しかし、ここの個所をじっくり観察すると、イエス様が、ここで教えてくださっていることの主題は、祈りでも、主の祝福でもないことに気が付くはずで⁴。例え、神学的に間違っしていなかったとしても、そのテキストが教えていないことを、私たちがそこから教えるなら、私たちは神が伝えようとしていることを教えているのではなく、自分の願っていることを、テキストを使って教えることになってしまいます。このような、みことばの乱用を、神が喜ばれないことは明らかです。それ故に、私たちはしっかりと正しい理解に到達するために必要な努力をしなければならないのです。

2. 聖書を曲解し、矛盾させる

時に、人は聖書が教えていないことを、教えてしまうことがあります。多くの異端と呼ばれるグループは、このような間違いを犯しています。確かに、聖書には理解の難しいところがありますが、それらを曲解してはならないのです（Ⅱペテロ 3:16）。例えば、エホバの証人は、ヨハネ 1:1 のみことばを使って、イエス様が父なる神（エホバ）と同質・同等なのではなく、それよりも劣る存在であるということを教えます。彼らは、この考え方を原文で、『ことばは神であった。』という部分の、『神』という言葉に定冠詞が付いていないことによってサポートしようとし⁵。しかし、興味深いのは、それと同様に、冠詞が付いていない『神』という単語を「エホバ」と訳している個所が、同じヨハネ 1 章の中に登場するということです。また、ギリシヤ語の文法をしっかりと理解すれば、冠詞の有無が、「エホバ」（父なる神）であるかないかを決定づけられないことを知ることができます。彼らはギリシヤ語の文法をきちんと理解することなく、自分の都合で、みことばを解釈しているのです。このような曲解は、何も異端だけのものではありません。私たちも同じような過ちをすることが無いように、気を付けなければなりません。

また、聖書を曲げて解釈すること以上に悪いことは、聖書に反することです。これは、悪魔がエデンの園で行ったことです。人々は様々な理由で、聖書が禁じていることを認めたり、聖書が正しいとしていることを悪だと教えたりします。私たちは、そのような嘘に基づいた理解をしてはいけません。聖書が、「罪である」と明言することを、「罪ではない」とする傾向が、現代のクリスチャン社会の中には強くなっているのが

⁴ イエス様は、ここで教会戒規に関する事柄を教えてください。『まことに、あなたがたにもう一度、告げます。…』という 19 節の言葉は、この個所が、直前の話と関連があり、その続きを教えてください。それは明白です。それ故に、ここで教えられていることは、教会戒規における教会の判断に対する神の保証と考えるべきなのです。

⁵ 英語版の新世界訳聖書では、この部分を“and the word was a god”と訳しています。

現状です。悪魔は巧妙に、エデンの園でしたことと同じことを、現代に生きるクリスチャンたちの間でも行っているのです。私たちが、このような罠に陥らないように、みことばの学びにおいて、自分自身をしっかりと守っていく必要があります。聖書が教えることは正しいことであるという確信を、私たちは揺るがしてはいけません。

3. 聖書を主観的に捉える

実は、多くのクリスチャンは神秘主義的な聖書の読み方をしています。感情的な対応をすることが間違っていることではありませんが、主観的対応に正しい解釈はないことを覚えていなければなりません。「神が語ってくださった…」という前に、本当に神がそのことを、その個所で教えているかどうかを私たちの知性を用いて、しっかりと考えなければならないのです。様々な集会の中で時々見ることができるのは、「あなたはのみことばを読んで、どのように感じましたか？」という質問をすることによって、学びを進めていることとすることです。しかし、私たちが知らなければいけないことは、私がこの個所を読んでどう感じるかでもなければ、他の人がどのように理解するかでもありません。私たちが考えなければならないことは、著者を通して、神が何を教えているか？なのです。聖書を主観的に捉えると、私たちは新正統主義的な考え方をするようになります。また、もしみことばの真偽を判断する基準が、客観的なものではなく、主観的なものであるならば、あらゆる理解は正しい真理になってしまいます⁶。このような主観主義は、多くの間違った教理を生み出してしまふ土壌です。私たちは、このような主観的判断を、みことばに下すことを避けるために、正しい聖書解釈の原則を用いなければならないのです。

4. 聖書を相対的に捉える

ある人たちは、聖書の真理が時代と共に変化するという理解を持っています。「以前は、この意味を持っていたが、今はこちらの意味を持つ…」といった理解は、真理が相対的であるという考えに立っているのです。例えば、パウロは、教会における女性の働きに関して次のように教えています。『女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。』(I テモテ 2:11-13)

現代の教会の多くは、女性が教会の牧師・教師となることを認めています。そして、それはこの個所に対する解釈に起因しています。女性教師を容認する人々は、一般的に、この聖句に対して、「これは現代社会に通じるものではない。」と考えます。確かに、女性解放運動が起こって以来、女性の立場は大きく変わりました。この世は、男女の雇用機会を均等に保つことを私たちに求めます。しかし、聖書はこの個所で、教会において(また家庭において)、女性が男性を支配することを良しとはしていません。

パウロがこのように教えたのは、当時の社会が男性優位な文化背景にあったからではありません。彼は、このように女性が男性を支配してはいけない理由が、創造にあることをこの個所ではっきりと教えているのです。時代の流れによって、神の真理が変わることはありません。パウロは、女性と男性の関係は創造の時からのものであることを、この文脈の中で明らかにしているのです。1世紀であっても、21世紀であっても、時の移り変わりによって、真理が相対的なものになることはありません。私たちは、このような目でみことばを見ることがないように気を付けなければならないのです。

5. 聖書を過剰な自信を持って読む

教えられることを忘れた人は、聖書を正しく理解することができない人です。どれだけみことばに関する知識を持っていたとしても、「私はこの個所からもう学ぶことはない。」といった態度で聖書を読むならば、その人は間違った理解への道を全速力で進んでいると言って良いでしょう。これは、学びを通して、自分が理解したことに自信を持ってはいけないということではありません。しっかりと学びを通して、理解したことは確信に満ちているべきです。しかし、これで解釈が終わったと考えるのは間違いであることを私たち

⁶ 主観的な判断が、みことばの意味をつかむ方法であるならば、ある人が正しいと言えば、それを否定することはできなくなります。その人にとって、それが真理であるからです。しかし残念ながら、現代社会は、このような考え方を推奨し始めています。

は忘れてはなりません。私たちの聖書理解と成長を妨げる大きな敵の1つが高慢です。このような態度をもって私たちがみことばに接することがあってはならないのです。

6. 聖書を正しく理解できるのは自分だけだと考えてしまう

聖書の正しい解釈は1つしかありません。しかし、私たちの理解力の無さの故に、幾つかの違った解釈が存在する場合があります。私たちがみことばを正しく解釈した上で、その理解に違いが出た時、私たちはお互いの理解を検証しつつ、相手を尊敬しなければなりません。明らかに、聖書が教えていないことを正しいとしている時、私たちは愛を持って、その解釈を正す責任があります。聖書は主要な教理において、明確に、その真理を教えています。しかし、それ以外の部分で違う見解を持つことがあるかも知れません。お互いがみことばを注意深く学んでいるならば、その学びを尊敬する必要があることも覚えておきましょう。

この課では、しっかりとみことばを観察し、充分に、そのテキストに対して質問することによって、私たちは著者が意図していることは何なのかを考える準備をすることと、その準備をもとに、私たちが解釈をする必要があることを学びました。正しいみことばの理解に到達するには観察と解釈が必要なのです。次の課では、具体的な解釈の方法を考えていきましょう。

<質問>

問：今回の学びで、あなたが新たに気付かされた点などは無かったですでしょうか？

問：また、過去の経験から、あなたが反省させられた点などはありましたか？

問：今後、あなたが聖書と接するに当たって、気を付けようと考えていることは何ですか？

第5課 CS 教師のための聖書解釈

暗唱聖句 ペテロの手紙第二 1:20-21

20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。

21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

A. どのようにして聖書を学んでいくのか？

詩篇の著者は、『私に悟りを与えてください。私はあなたのみおしえを守り、心を尽くしてそれを守ります。』（詩篇 119:34）と祈りました。これは、彼が聖書を正しく解釈するために、神からの知恵が与えられる必要があることを知っていたからです。そして、神が与えてくださる悟りを用いて、みことばを正しく理解していくとき、それが彼の人生の指針を生み出すことを知っていたのです。聖書を学んでいくに当たって、私たちも、この詩篇の著者と同じ祈りを神に捧げていなければなりません。同じ献身をもって、神のみことばを学んでいかなければならないのです。それを実践する上で、私たちは知っておくべきことがあります。それは、聖書解釈にも原則がある、ということです。私たちが聖書解釈の正しい原則に基づいて、みことばを解釈していくとき、私たちは聖書著者の意図することを明確に知っていくことができます。ここでは、まず、聖書を解釈する上で、最も大切で、基礎となる部分を最初に考え、その後、具体的な原則を考えていきます。

B. 聖書の詳細を学ぶ：文脈の重要性

最も基礎的なこととして、私たちが聖書解釈をする際に考えなければならない事柄があります。それは、「文脈」です。前回の学びで見ましたように、観察をすることによって内容をしっかりと知るということは、私たちが、そこに書かれてある意味を正しく理解する上で、絶対に欠かすことのできないことです⁷。

内容と意味とは、非常に深い関係で結ばれています。内容とは、私たちが解釈するための材料なのです。熱心に観察することによって、私たちは内容に関して多くのことを知ることができます。多くの質問をし、その答えをしっかりと見つけていくことによって、私たちは聖書の内容を掴んでいくのです。それ故に、観察することに十分な時間を取るならば、解釈の時間は、それに反比例して短くなっていきます。そして、解釈がより正確なものになっていきます。逆に、観察をしっかりとしなければ、より多くの時間が解釈にかかり、その解釈は正しいものにはなりにくいと言えます。しかし、どれだけ観察をしても、学んでいる箇所を、その文脈から孤立させて学んでしまえば、正しい解釈を導き出すことはできません。それ故に、文脈を正しく知ることは正しい解釈をするための必須条件なのです。

もしかすると、他のどのような基礎、原則よりも、これが大切ではないかと思うほど、文脈を正しく掴むことは聖書を正しく解釈する上で大切な要素です。文脈を無視して、みことばを解釈することほど危険なことはありません。聖書の1節を取り上げて、それを文脈から切り離して理解するならば、私たちはみことばを使って、私たちの思い通りのことを言わせることができます。単に文脈と言っても、そこには幾つかの種類があります。学んでいる箇所をそれらの文脈の中できちんと理解することが、正しい解釈を生み出す秘訣なのです。

1. 文学的文脈

最初に挙げることができる文脈は、「文学的文脈」です。どのような文章でも、人のコミュニケーションには、必ず文脈が存在します。そのことは、聖書も決して例外ではありません。みことばは、独立した言葉の羅列ではありません。それらは必ず、文脈の中に存在し、それ故に、文脈の中で理解されなければならないのです。文脈という著者の意図を知るためのヒントを無視すれば、私たちは聖書から、幾らでも好き勝手な教えを作り出すことができます。「聖書は、『神はいない。』と教えている。」と教えることすらでき

⁷ 当然のように思われるかも知れませんが、観察を実際にする中で、如何に、私たちが内容をしっかりと掌握していないかということを知ることができたのではないのでしょうか。

るでしょう⁸。しかし、このような見解が間違っただけであることを私たちは知っています。それは、私たちが日常生活の中で、すでに文脈を通して、物事を理解しなければならないことを知っているからです。

この文学的文脈には幾つかのレベルが存在します。最も大切な文脈は、直近(各節・各段落)の文脈です。使われている一つ一つの単語が持つ意味を知るためには、その言葉が、どのように理解されるべきなのかを、文脈の中に見て取る必要があるのです。例えば、ヤコブの手紙 1 章では同じ言葉が全く違う2つの意味で用いられています。『試練』という言葉と『誘惑』という言葉は、原文では同じ単語です。しかし、翻訳者は、この単語を2つの違う言葉に訳しました。この判断は、単なる主観的基準でなされたのではなく、文脈によって判断されているのです⁹。言葉の意味を知ろうと思うならば、私たちはその言葉が直近の文脈の中でどのように用いられているかを考えなければなりません。そういったことを怠ってしまうと、間違っただけの解釈をする危険性が増してしまいます。

次にある文脈は、そのセクション・本の文脈です。これは、直近の文脈よりも広い範囲の文脈を指しています。単に直近の文脈だけを理解すれば、その著者の意図を充分に知ることができるとは言えません。例えば、1 コリント 13 章は「愛の章」として親しまれています。その中でも、特に 13:4-8 を学ぶ時、多くの人は、パウロが愛について教えるために、この箇所を書いているかのように理解し、話をします。しかし、パウロがこの章を記した意図を正しく理解するためには、もう少し大きな文脈をしっかりと理解しなければなりません。このように文脈を見る時、パウロは愛の特徴を教えることを第一義的な目的として、この章を記したのではなく、この章は御霊の賜物に関する文脈の中で突然登場します。12:31と14:1を比較すると、これら2つの章が同じ話を継続していることに気付かされます。この継続した文脈を考える時、1つの御霊の賜物を用いる上で、愛をもって相手のために与えられている賜物を用いることこそが、教会の求めることであることを教えるために、ここの章が記されていることを見ることができるのです。

また、ルカ 3 章に登場するイエス様の系図は、マタイのものとは違います。マタイの系図はアブラハムまでしかさかのぼりませんが、ルカの系図はアダムまで続きます。細かい点をしっかりと観察すると、マタイとルカの系図は別の系図であることがわかります。では、なぜマタイはアブラハムまでさかのぼる、ソロモンを通る系図を記し、ルカはアダムまでさかのぼる、ナタンを通る系図を記したのでしょうか？この疑問を解決するには、福音書全体の文脈が必要になります。各著者が福音書を記した目的を理解する時に(本全体の文脈を理解する時に)、私たちはより正しく…、また、より深くみことばを理解していくことができるようになるのです。

また、著者・分類の文脈というものがあります。パウロが書いた書簡から、私たちはパウロの神学というものを見て取ることができるでしょう。また、モーセ五書という分類には、見て取らなければならない文脈が存在します。同じ時期に書かれた本や手紙にも、共通した流れや意図を見受けることができるでしょう¹⁰。私たちは、様々な学びの中で、このような文脈を知っていく努力をしなければならないのです。

残りの2つは旧約・新約の文脈と聖書全体の文脈です。旧約聖書の文脈を無視して、新約の真理を旧約に読み込むことが、これまでのキリスト教の歴史の中でも度々行われてきました。しかし、それぞれの文脈をしっかりと理解し、その中で一つ一つのみことばを解釈する必要があります。それだけではありません。聖書全体が1つの本として一貫したテーマ、文脈を持っています。例えば、贖いの歴史は聖書の文脈です。また、神の契約は、一貫したテーマとして聖書全体に見て取ることができます。この文脈を忘れるならば、これもまた、間違っただけの聖書理解へと私たちに誘う結果をもたらすかも知れません。

⁸ 文脈を無視して、詩篇 14:1、詩篇 53:1 などから語る時、このようなことを言わせることができるでしょう。

⁹ 1 コリント 2:1-10 をみると、「知恵」という言葉が2通りの意味で使われていることに気が付きます。文脈は、これらの言葉が、前半部分では人間的な賢さを表す知恵として使われ、後半部分では神からの啓示に関わる超自然的な知恵を指して使われていることを教えます。

¹⁰ 1 テモテ書とテトス書、エペソ書とコロサイ書などは良い例でしょう。他にも、エズラ記とネヘミヤ記、イザヤ書とミカ書などを挙げるすることができます。

このように、文学的文脈は学んでいる個所の前後から、聖書全体に至るまで、幾つかの種類が存在します。これらをしっかりと理解して聖書を学ぶ時、私たちはみことばを著者の意図から逸脱して解釈することを避けることができるのです。

2. 歴史的な文脈

次に挙げることができる文脈は、「歴史的な文脈」です。歴史的な背景と言っても良いかも知れませんが、ここでの文脈は著者が生きていた時代、みことばが書かれていた時代の歴史的な文脈です。文学的文脈と同様、歴史的な文脈を無視してみことばを解釈すると、そこには間違っただけの聖書理解が生まれてくる危険性があります。例えば、どのようにしてパリサイ人たちが誕生し、彼らがどのような事柄を教え、どのような地位をユダヤの歴史の中で持っていたのかということを知ることは、イエス様が彼らに対して語った多くの言葉をより良く理解する上で非常に重要な鍵となります。

また、エリシャが斧の頭を浮かばせた奇蹟がⅡ列王記 6:5-7 に記されています。列王記の著者がなぜ、このような奇蹟をここに記述したのでしょうか？この奇蹟の意味を、私たちはただみことばを見るだけでは、理解することが困難です。しかし、歴史的な文脈に照らし合わせる時、ここで教えられていることの真意を見て取ることができます。この記事を見ると、水の中に落としてしまった斧は、借り物であり…、また、鉄でできていたことがわかります¹¹。エリシャの生きていた時代は、ちょうど鉄器時代前半にあたり、製鉄技術がまだ高度技術であった頃の話です。必然的に鉄器は高価なものであり、しかも、ここで落とした斧は借り物であったのです。もし、この斧の頭が紛失したなら、この人は一生を奴隷として過ごさなければならなかったかも知れません。このように、エリシャが斧の頭を浮かべたこの奇蹟は、歴史的な文脈の中で理解する時、単に不思議なことが起こったということ以上の意味をもって記されていることを知ることもできます。このように、解釈をする時、私たちは、現代の時代背景で聖書を理解するのではなく、あくまでも聖書が書かれた時代に身を置くようにして、歴史的な事柄に気を配っていかなければならないのです。

3. 文化的な文脈

その次に挙げておきたい文脈は、「文化的な文脈」です。このことは歴史的な文脈と重なる部分もありますが、執筆された時代の文化や生活風習に照らし合わせて、みことばを理解しなければ、その著者が語っている事柄の意図を充分に知ることはできない、ということです。ヨハネの福音書 13 章に記されている洗足の記事をより良く理解するには、当時の生活習慣を学ばなければなりません。誰がどの位置に座り、食事がいつ行われ、どのような準備が必要であり、なぜ足を洗わなければならない、誰が洗うべきであり、どのようにして、それが行われていたのかを知ることは、イエスが弟子の足を洗うことによって示された模範がどのようなものであったかを知るために必要な知識なのです。

パウロ書簡においても、パウロが手紙を宛てた町の文化的背景を知ることがなければ、読者が手紙を読んだ時、どのような思いをもって理解したかを知ることはできません。例えば、エペソ 6:4 で、『父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。…』と書いたことが、どれほど当時の社会の中で驚くべき言葉であったかを知るためには、ローマ支配の中にあつて、父親がどのような存在であったかを知ることが不可欠です。文化的な文脈を考えずに、著者の意図するところを正しく理解することは困難です。それ故に、様々な方法で文化的な文脈を知るように努めていかなければならないのです。

4. 地理的な文脈

文脈の分類で最後に挙げておきたい項目は、「地理的な文脈」です。みことばに記されていることが、どこで起こった出来事で、どのような地形のところで、どのような気候で、どのような草木があり、どのような

¹¹ 残念ながら、新改訳聖書と口語訳聖書は、原文を正しく反映せず、『斧の頭』と 5 節の言葉を訳していますが、新共同訳聖書では、この部分を『鉄の斧』と原文に忠実に訳しています。このように、他の翻訳を参照することは解釈の大事な方法の一つです。

動物が生息していたのか、またどんな町で、どこに所在していたのかなど、地理的文脈をしっかりと理解することも聖書解釈には必要なことです。例えば、ガリラヤからエルサレムに祭りのために旅をするのにどれくらいの時間がかかり、どのようなルートを取ったのかということを知ると、なぜ人々がしゅろの日曜日にオリブ山に集まっていたのかを知ることができます。いつ、いちじくの木に実がつくのかを知っていると、イエス様がなぜ実の無い、いちじくを呪われたのかを理解することができます。イスラエルという国と他の国々との位置関係をしっかりと理解すると、イスラエルに与えられていた使命をより明確に知ることができます。このように、地理的文脈も私たちに多くのことを示してくれるのです。

ここまで記してきたことで分かるように、文脈は私たちが聖書を解釈する上で、常に意識していなければならない大切なものです。それ故に、私たちは注意深く文脈を知ることにも努めなければなりません。そして、文脈をきちんと理解していく中で、私たちは解釈の原則を、みことばの学びに適用していく必要があるのです。

C. 聖書の詳細を学ぶ：解釈の原則¹²

ここで皆さんに、聖書解釈の原則を幾つか提供した上で、具体的な聖書解釈を実践していかなければ、皆さんの聖書研究はより困難になってしまうかも知れません。ここで挙げる聖書解釈の原則は、基本的なものに限定したとしても、すべてではありません。また、これらの原則は、もう既に多くのクリスチャンが知っていることでしょう。しかし、もう1度、これらのことに目を留め、その上で具体的な解釈の方法を考察していきたいと思えます。

1. みことばは理解不可能なものではない

『隠されていることは、私たちの神、【主】のものである。しかし、現されたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしへのすべてのことばを行うためである。』（申命記 29:29）と、モーセは記します。確かに、私たちが神のみこころのすべてを知ることはありません。神が、私たちに教えないこともたくさんあります。それらの私たちには隠されていることは、神に属するものであり…、私たちには知る術がありません。しかし、この事実は、神が啓示していることを、私たちが理解することができないと教えているわけではないのです。

確かに、聖書には難解な個所が存在します。しかし、それは私たちが聖書を理解することができないことを証明するものではないということを、しっかりと覚えておかなければなりません。神は、みことばの中に真理を隠しているのではなく…、私たちが真理を知るために、みことばを与えてくださったのです。それ故に、正しい解釈の原則を用いる時に、聖霊の照明を通して、私たちは真理を知ることができるのです。この原則を理解していないと、私たちは、「どうせ分からないのだから…」といった投げやりな態度で、みことばを学ぶようになってしまいます。神が与えてくださった助け主なる聖霊は、私たちの内に宿り、私たちがみことばの真理を悟ることができるように働いてくださいます¹³。ですから、私たちは、最善を尽くして、みことばを理解できるよう努めていくのです。その時、聖霊は、私たちに正しい理解へと導いてくださるのです。

2. みことばはコミュニケーションの手段である

聖書を通して、神は私たちに語りかけています。それ故に、神は私たち人間の言葉を用いて、真理を伝えてくださっています。私たち人間が、自分の力で神の真理を知ることが不可能でしょう。しかし、神がそれを私たちに分かる形で表現してくださっているのです。このことは、まさに人が聖書を理解できると言える根拠でもあります。神はヘブル語、アラム語、ギリシヤ語という3つの言語を用いて、人が分かるように真理を伝えてくださったのです。それ故に、神は様々なところで、人が理解できるように、人間的表現を用いて真理を伝えてくださっているのです。例えば、神の偉大な力は、「神の右手」という表現で表されて

¹² この部分は、Bernard Ramm, *Protestant Biblical Interpretation* (Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1970), 97-113 を参考に書かれています。邦訳:「聖書解釈学概論」(バーナード・ラム著、聖書図書刊行会)

¹³ I コリント 2:10-16、ヨハネ 14:26、I ヨハネ 2:27-28 など。

います。なぜなら、右手は力のしるしであったからです。また、神の愛や恵みは、「鷺の翼」などという表現で表されることがあります。なぜなら、親鷺が子鷺のことを、その翼で守ることを人々は知っていたからです。神は完全な知識を持っておられる主権者ですから、私たち人間のように後悔することがありません。しかし、時々、聖書は神が悔やむような姿を記すことがあります¹⁴。そうすることによって、神がどのような思いで、私たち人間の行動を捉えていたのかを、私たちが理解することができるからです。

私たちが想像することができないようなことを、聖書は私たちが分かるような表現を用いて説明してくれるのです。この原則をしっかりと理解している人は、過剰な字義的解釈をすることはないでしょう。

3. みことばは漸進的に与えられている

神は、すべての真理を一度に伝えるということをしませんでした。子どもが時間と共に成長していくのと同じように、実は、聖書の真理も、ある意味、幼児期からの成長を遂げていったのです。みことばの啓示は、漸進的なものであると言えます。ヘブル 1:1-2 で、このことを見ることができます。ヘブル書の著者は、『1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。』と告げます。ここで、ヘブル書の著者は、以前、神は、預言者たちを通して、多くの部分に分けて、いろいろな方法で語られたことと、終わりの時に、御子イエス様を通して語られたことを対比しています。神は、それぞれの時代背景の中で、必要なことを告げてこられました。そして、それらは、後に語られた事柄によって、さらに深い、具体的な内容を告げるに至ったのです¹⁵。

これまでも見てきたように、時代背景、文化、習慣などに気を配り、どの時代のどの人々に、神がこの啓示を与えられたのかということを考えつつ、聖書を読む必要があります。私たちが考えなければならないことは、①「著者がオリジナルの読者に対して、何を伝えたかったのか？」ということと、②「オリジナルの読者が読んで理解したことは何か？」という2つのことでした。なぜなら、そこにこそ、神が伝えようとした本来の意味があるからです。

4. みことばがみことばを解釈する

聖書のみことばの中には、現代に生きる私たちにとって、意味の分りにくい箇所が存在します。それらの箇所は著者たちにとっては明瞭な言葉であったとしても、時代の差があり、文化の違いがある私たちには摩訶不思議なものと感じることが有り得ます。また、教理的な事柄で、そのことが明確に、どのような意味を持っているのかが分からない部分が存在することもあります。そのような時に、私たちはこの原則を思い出さなければなりません。難解な箇所を理解する助けになるのは、聖書の他の箇所なのです。この原則は、別の表現をするならば、「不明瞭な箇所は、明瞭な箇所によって理解される。」となります。

ヨハネ 3:5 で、『人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。』と、イエス様が言われますけれども、ここで、『水』という言葉が使われていることから、水によるバプテスマによって人が救われる、ということを教える人たちがいます。しかし、この箇所は、そのような教理を裏付ける決定的な箇所としてはあまりにも不明瞭です。ですから、この箇所が教えていることを、他のもっと明瞭な箇所によって確認する必要があるのです¹⁶。このように、明瞭なみことばによって不明瞭な箇所を解釈する時、私たちは突飛な解釈から、自分の身を守ることができるのです。

特に、このことは物語の解釈において適用されます。物語は真理そのものを教えるために書かれているのではなく、実際に起こった出来事を記しているからです。確かに、物語にも、その内容から教えられることがあります。物語は、それらをはっきりと教えていないことが多いのです。その理由は、①物語は何が

¹⁴ 創世記 6:6、I サムエル記 15:11 など。

¹⁵ イスラエルに対する神の契約などは顕著な例でしょう。神がアダムに与えられた契約が、アブラハムの契約によってより具体的なものとなり、それはダビデの契約を通して、さらに明確にされ、新しい契約によって、その結末が教えられ、イエス・キリストの到来によって、その成就を見るのです。

¹⁶ もちろん、この箇所での文脈や、話している相手、また、具体的な言葉の意味などを吟味する必要があります。

起こったかを記していて…、何が正しいかを記しているわけではない。②物語は起こった出来事が良いものか悪いものかを一貫して記していない。③物語は通常起こった出来事が規範的なものであるかどうかを記していない、というところにあります。

ここでもう1つ挙げておきたい概念があります。それは、信仰の類比(類推)ということです。矛盾のない神は、矛盾することを語りません。ですから、聖書もまた、その中にある教えに反することを教えません。そこには、当然、統一性があります。そこで、聖句を聖句で比較することは、私たちがみことばを曲解してしまうことを妨げる助けとなります。聖書に書かれていることは、聖書を調べることによって知ることができるのです。そのために、コンコルダンスや聖書の脚注にある引照を調べることなどは、このような比較をするために大きな助けとなります。このような比較をすることによって、その意味が明確になり、語られていることの正しい解釈に到達することができるのです。

聖書の類比の例として挙げるができるのは、パウロとヤコブの救済観の相違に関することでしょう。パウロはローマ書の中ではっきりと、行いではなく信仰によって、人は神の前に義と認められると語ります。それに対して、ヤコブはヤコブ書の中で、行いのない信仰は役に立たないと言います。これらの2つの見解は、一見、水と油のように見えますが、神の語ることは矛盾がないという原則に立って、私たちはみことばを理解しなければなりません。この場合、テキストと、文脈に対する注意深い観察から、パウロが語っていることは信じる前の話であり…、ヤコブが語っているのは信じた者の話であることが分かります。2人は違うことを教えたのではなく…、1つのことを違う方向から見ていたのです。このように、唯一であられる神が、完全な啓示を、一貫した神学体系をもって書き上げられたことを知ることで、私たちは多くの間違った教理から遠ざかることができるのです。

5. みことば全体を学ばなければならない

もう既に、学んできたように、聖書はそのすべての部分が神の靈感を受けています。ですから、神のことばでない部分はありません。すべてが重要であり…、みことばを理解する時に熟慮されなければならないのです。ある特定の教えを強調するあまり、他の教理が無視されることが時にあります。1つの事柄にとらわれるあまり、他の同様に大切なことを無視するならば、そこで教えられていることは、聖書の真理からかけ離れたものとなってしまいます。例えば、「神の愛」を強調するがあまり、神の他の大切な属性、聖さや正義が無視されてしまえば、正しい神の姿を理解することはできないのです。

故意であるかどうかは分かりませんが、現代のキリスト教会には、このようなバランスの欠けた教えが満ちあふれています。福音が語られる時、罪を責め、悔い改めを求める説教者の声を耳にすることが少なくなってきました…。神の愛だけが訴えられ、神が罪人のすべてを(その罪さえも)受け入れ…、裁くことなく、救ってくださる、と言うのです。また、救われた者の歩みが罪に満ちたものであったとしても、神は赦しの神なのだから、恐れることはないと教える人々がたくさんいます。神は何よりも一致を求めていると言って、真理を曲げている人たちとの一致を一生懸命に訴える人たちもいます。しかし、私たちは聖書全体が教えていることを伝えるべきであり、1つのことを訴えるあまりに、他のことを伝えなければ、正しく真理を伝えていたとは言えないのです。特定の箇所を学ぶに当たって、私たちはその箇所が聖書全体の中に矛盾することなく収まっていることを覚えておかなければなりません。それ故に、聖書全体の知識を増していくことが、聖書を正しく解釈していくために必要不可欠なのです。

6. みことばには1つの正しい解釈がある

このことは、「聖書を正しく理解するための絶対原則」としてすでに学びました。しかし、もう一度、このことをしっかりと覚えるために、ここに記しておきましょう。多くの適用や原則を1つの箇所から挙げられますが、みことばの正しい解釈は1つしかありません。それ故に、解釈者の1番の目標は、この正しい意味にたどり着くことなのです。時に、人は1つの箇所に複数の意味をもたせようとしますが、伝えようとしていることが複数あれば、そこには混乱しか生まれません。多くのクリスチャンは、みことばを教える時や分かち合う

時に、自分の伝えたいと願う事柄を、みことばの中に見いだそうとして、意味を曲げてしまうことがあります。しかし、聖書が持っている本来の意味を正しく理解しないこと、また教えないことは、みことばを通して、真理を伝えようとしている神に対する大きな冒瀆であるということを忘れてはいけません。

7. みことばを逐語的に理解する

聖書のみことばは、そこに記されている通りに理解されるべきです。私たちは、「より深い意味」を見つけ出そうと、通常の読み方では見つけ出すことのできない事柄を探ることから始めてはいけません。確かに、聖書には比喩的な表現があります。しかし、逐語的解釈は、そのような比喩を比喩として理解することを教えています。比喩的な表現が使われる時には、そのような表現であることを示すヒントが文脈に置かれています。そのようなヒントがない場合、私たちは文字通りの言葉として理解しなければならないのです。

書かれている事柄をあえて難しく考え、あらゆる方向へと解釈を広げていくケースがありますが、正しい聖書解釈は多くの場合、もっとも単純な字義的解釈にあるのです。例えば、ゴリヤテを倒したダビデは、5つの石を手を持って、戦いの場へ出て行きました（Iサムエル記 17:40）。この個所が教えてくれていることは、それ以上のことではありません。しかし、この個所から、次のような解釈（と適用）をする人が実際にいるのです…。

ダビデは川からなめらかな石を5つ拾ってきて、それを用いました。聖書では、聖霊、神の恵み、イエス・キリスト、知恵の泉、神の奇跡が行われる所、神の世界の入口を「川」に例えています。（中略）そして「石」をイエス・キリスト、神の奇跡の力、祭壇、みことばに例えていることから、（中略）その行為はあたかもダビデがイエス・キリストのもとに行き、神に霊のいけにえをささげ、聖霊に導かれて悪魔に勝利するみことばを得、それらによって悪魔に勝利したかのように思われます。なめらかな石とは石投げの中に自然に納まり、振り回される石投げの力を有効に受けて、遠くにまっすぐに飛ばすことのできる石です。それは私たちの信仰になじんだみことば、自分の信仰を素直に、かつ力強く働かせることのできるみことばと結びつけるならば、ダビデがなめらかな5つの石を投石袋に入れたように、私たちもいつでも悪魔に勝利するために自分に合ったみことばを最低5つ、心の信仰の袋に入れておく必要があるのではないのでしょうか。悪魔は私たちの信仰、仕事、健康、経済、家族、人間関係等を破壊しようといつでも狙っています。私たちはそれらの分野に対して聖書から自分にあったなめらかな5つのみことばの石を選び備えておくことが大切です。そして、悪魔から戦いを挑まれた時、すぐにその石をもって攻撃しなければなりません…¹⁷。

これら5つの石は、「聖き人格、熱き祈り、深い愛、捨て身の奮闘、聖霊の御助である。」という注解者もいます。しかし、5つの石という表現が、ここで比喩的に使われているという結論を、この個所から見いだすことは非常に困難です。聖書の教えは、通常の文章の中に記されています。特別な理由がそこにない限り¹⁸、書かれている事柄に対して、最もシンプルな解釈がされるべきなのです。

8. みことばは権威的である

聖書は単なる古い本ではありません。単なる宗教的な本でもなければ、ただ単に知恵を与える本でもありません。聖書は、「神のことば」なのです。それ故に、聖書に記されていることは、すべてが絶対的な権威を持っています。ですから、私たちは聖書を個人の体験や見識によって解釈してはいけません。個人的な体験は、みことばの真実さを確認させることはあっても、それを決定することはないのです。個人的な体験は、聖書の真実性を肯定も否定もしないのです。しかし、残念ながら、近年のキリスト教会は体験主義へと傾倒してきています。カリスマ派を中心とする新しい運動が、多くの信徒を体験主義へと牽引しています。彼らは聖書を解釈するにあたって、「私は癒されました。だから、癒しの賜物は、今も教会に与えられていると分かるのです。」と言ったり、「異言を語る事ができるのだから、異言の賜物が私に与えられているのです。」と言ったりするのです。このように言うことによって、彼らはみことばが絶対的な権威を持っているのではなく…、「自分たちの体験こそが、真理が何であるかを決定するのだ」という間違った

¹⁷ http://www3.tokai.or.jp/holy.s/sub1_010.htm

¹⁸ これは文脈が教えます。

見解を明らかにしているのです。このように、体験によってみことばを理解するのではなく、みことばによって私たちの体験を吟味することが必要なのです。

また、個人の体験や見識だけでなく、伝統によって、みことばを解釈することも正しくありません。伝統が必ずしも悪いわけではありません。しかし、もし伝統が真理を判断する基準となっているならば、それはみことばの権威を脅かすものになっていることを忘れてはなりません。ここには教会の教えということも含まれます。ある特定の教理を信奉するあまり、聖書がそれとは違うことを教えていることに気付いたとしても、みことばに考えを沿わせるのではなく、みことばの方を教会の教理に沿わせようとするのが、教会の中には起こり得ます。「教会の教えさえ守っていれば大丈夫。」と考える人がたくさんいる、というのが現実かも知れません…。しかし、私たちは、あのベレヤのクリスチャンたちのように、教えられていることが聖書に沿っているかどうかを吟味し、神が聖書を通して教えていることに、自分たちの教理を沿わせていかなければならないのです。

9. みことばは謙遜のうちに解釈されるべきである

最後に、私たちは聖書を解釈していくにあたって、謙遜を持っていなければなりません。私たちは愚かな存在なのです。聖書を学んでいく時、私たちは、自分自身の未熟さや愚かさを覚えつつ、神の前にへりくだって、みことばと向き合っていかななくてはなりません。時に、私たちは聖書が言っていることを間違えて理解したり、忘れたり、他の個所で教えられていることに気付かず、性急に結論を出してしまうことがあります。私たちはみことばを学んでいくにあたって、こういったことをしっかりと覚え…、そして、謙遜のうちに、正しくみことばを理解するための努力を熱心にしていかなければならないのです。

以上が、聖書を解釈する上で、基本的な原則の代表として挙げることができることです。私たちは、これらの事柄に注意を払いながら、具体的な解釈をしていかなければならないのです。

D. 聖書の詳細を学ぶ：解釈の方法

ここでは、実際に、どのように聖書を学んでいくのかということについて考えていきましょう。聖書を解釈する上で、どのようなことをしていかなければならないか、その方法について、幾つか具体的な例を観察していきたいと思えます。

1. 背景を調べる

確かに、聖書のみことばは、すべての時代のすべての文化に共通する真理を教えてくれています。しかし、聖書が書かれた時には、その時々様々な背景があったということを忘れてはいけません。ですから、みことばを正しく理解するためには、最初に書かれた時の状況を、正しく知ることが必要であるということを私たちは学んできました。この状況(背景)には、歴史、地理、社会的習慣、政治体系、経済、そして、その時代特有の様々な問題なども含まれます。それらのことを知るために、私たちは聖書辞典やガイドブック、そして、聖書地図などを調べることができます。これらの本は聖書の背景を特記しているので、比較的容易に、私たちが知りたい情報を得ることができるでしょう。また、一般の歴史書や百科事典などを調べることもできます。近年では、インターネットを介して、様々な情報を集めることもできるので、そのような情報に目を留めることもできるでしょう。これらの資料に加え、聖書の注解書を読むこともできます。そこで注意したいのは、注解書を参照することは必要なことですが、注解者の解釈に強い影響を受けて、自分で解釈することを怠ることがないようにしたいものです。

背景を知ると、聖書の理解がより深まります。例えば、歴史的背景を知ると、ピラトがなぜ群衆を恐れて、イエス様を十字架につけることを許可したのかを知ることができます。一般の歴史書に登場するピラトという人物と福音書に記されているピラトの姿には大きなギャップがあります。福音書を見る限り、ピラトは、どちらかと言うと弱気な人物であり、ユダヤ人のプレッシャーに負け、彼らの要求を飲んで、イエス様

を十字架へと追いやった人物として描かれています。一般の歴史書を見る時、それとは全く正反対の、強気で、ユダヤ人を嫌い、彼らの要求など決して受け入れることのないような人物としての記録しか残っていないようです¹⁹。しかし、ローマの歴史を追うと、ピラトが、この地方の総督となる後押しをしたローマの実力者セヤヌスが、この出来事の数年前に皇帝タイベリウスに処刑された事実が浮かび上がってきます。セヤヌスのユダヤ人嫌いを受けて、彼の権力のもとで好き放題をしていたピラトは、このセヤヌスの死によって大きな問題を抱えてしまったのではないのでしょうか。それまでのように、反ユダヤ人的に行動すれば、地方総督としての地位を追われかねないということを知っていたピラトは、できる限り、ユダヤ人の反感を買わないようにしていたと考えることは妥当です。それ故に、暴動が起きそうになったことを察知した彼は、自分の思いを退けて、無罪の者を死に追いやる責任が自分にはないということ、手を洗うことによって示し、群衆の要求を受け入れたのです。聖書を読むだけでは、そのような、ピラトの持っていたジレンマを知ることはできません。しかし、歴史的な脈に目を向けると、その時の状況をより深く知ることができるのです。

また、地理的背景を知ることが大切です。地図を確認しながら、聖書の登場人物たちが、どこで、どのようなことをしたのかを知ることは、聖書をより正しく知る上で大切なことです。ヨナは二ネベに行くようにと、神から命じられた時、タルシシュへ逃げようとしていました。タルシシュとはどこにあったのでしょうか？また、ヨナはこの言葉を聞いた時、どこにいたのでしょうか。そして二ネベはどこにあったのでしょうか。これらのことを理解する時に、なぜヨナがタルシシュに逃げようとしたのかを知ることができます。また、どこにどの町があり、どれだけの時間をかけて、パウロが伝道旅行をしたのかを知ると、みことばはより身近なものとなっていきます。

文化的背景も同様に重要です。マタイ 5:40 に記されている、『あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。』ということと、ルカ 6:29 の、『上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。』というイエス様の2つの言葉には、どのような違いがあるのでしょうか？このことも、当時の文化的背景を知っていると、理解することができます。マタイ伝で、イエス様は訴訟時のことを話しています。何らかの非がある人物が訴えられ、その結果、下着を代償として渡すよう宣告されているのが、この状況です。『下着』と訳されている言葉は、当時の人々が着用していた膝下まであるようなシャツのことを指します。『上着』とは、その上に着る(または上から羽織る)コートのようなもので、時に、この上着は毛布の代わりに使われていたようなものでした。現代の人々のように、たくさんの服を所有していなかった当時の人々にとって(特に貧しい人々にとって)、ここでの宣告は厳しい宣告です。しかし、当時の社会(モーセの律法)では、人の着物(マタイ伝の『上着』)の所有権が、律法によって守られていることが教えられていました²⁰。どれだけ貧しく、大きな負債のある人でも、上着だけは代償として払う必要はなかったのです。このような背景の中で、イエス様は下着だけでなく、上着も渡しなさいと言うのです。訴えられたことに対する報復を考えたり恨んだりするのではなく、裁判官も奪う権利がなかった上着さえ、自らの意志で渡すことが、天国民にふさわしい行動であると教えているのです。それに対して、ルカ伝では上着を奪う者の話をしています。強盗が来て、人の上着を奪い取って逃げようとする時に、下着も与えなさいと言うのです。端的に言えば、必要のある人に対して、最善をもって接するように勧められているのです。このように、マタイ伝とルカ伝では、明らかに違う状況の中での教えがされています。それ故に、2つの福音書では、上着と下着とが入れ替わっているのです。

このように、背景を調べると、聖書が生き生きとしてきます。まるで自分が、その出来事を一緒に体験しているかのように、内容が明瞭になっていくのです。ですから、私たちはできる限り、様々な背景に目を配っていくことを忘れてはならないのです。

¹⁹ ピラトに関するヨセフスやファイロの記録と、福音書の記録があまりにも違う故に、一部の学者は、後のクリスチャンが、ユダヤ人にイエスの死の責任を負わせるために、その描写を変えたのだという説を取ったほどで、そこには大きな相違があることを見取することができます。

²⁰ 出エジプト記 22:26-27 や申命記 24:12-13 が、この概念を教えています。どれほど貧しかったとしても、上着だけは律法で守られた個人の所有物であったのです。

2. 文脈を調べる

これまで幾度となく強調してきたように、文脈を知ることが、聖書を正しく理解する上で、最も大切な要素であると言えるでしょう。多くの異端的教理は、そういった文脈を無視したところに原点があるのです。人々は簡単にみことばの教えを曲げ、自分の言いたいことを、みことばを利用して教えることができます。文脈を正しく理解するということを怠ることによって、熱心なクリスチャンであっても、間違った教えを信じ込んだり…、自分の信じたいことを強引に聖書の中に見いだしたりすることがあるのです。それ故に、文脈を見逃すことは私たちが大きな過ちを犯す危険に身を置いているということでもあるのです。ここで、幾つかの例を考えてみましょう。

『あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。』(エペソ 2:8)という聖句を通して、救いとは信仰によるもので、行いは必要ないと断言します。この見解は確かに正しい見解です。しかし、この聖句の故に、「行いは、救いとは全く関係がない！」と断定する人がいます。しかし、ここの文脈は、そのような考えをサポートしません。私たちが救われたのは、私たちが神の作品として良い行いをするために造られたということが、10 節に記されています。そして、その良い行いを、神は私たちの前に備えてくださっているのです。ここの個所から、私たちは、救いと行いとの関係を正しく見ることができます。救われたのは恵みの故に、信仰によってです。そして、その救いは、私たちが主の前に良い行いをしつつ歩んでいくために備えられたのです。こういったことは、その文脈を無視して、8 節だけを取り上げてしまう時に起こる、大きな問題です。そして、多くのクリスチャンたちが実際に、8 節だけを抜き出して解釈してしまっているのです。

また、イエス様は、マタイ 7:1 で、『さばいてはいけません。』と言います。ここの個所を使って、人を裁くことがすべて間違ったことであるかのように言う人たちに会うことがあります。しかし、イエス様は、本当に「裁いてはいけません」ということを教えているのでしょうか。実は、ここの文脈はその逆のことを教えてくれています。5 節を見ると、『偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。』と、イエス様が教えているのを見ることができます。これは、別の言い方をすれば、「さばくことができます。」と言っているのです。ここで問題とされているのは、裁くことではなくて、不当な裁きをすることです。2 節の、『あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。』という言葉が、まさにこのことを教えてくれています。このように、文脈を軽視すると、私たちは聖書が教えていないことを教えてしまうことがあります。それ故に、文章の流れに注意して、みことばを読むことが重要なのです。

3. 言葉を調べる

聖書に記されている1つ1つの単語は、それ自体が非常に重要なものです。多くの教理が1つの単語の意味に依存するところが多く、それ故に、私たちが用いられている言葉を正しく理解することは正しい聖書解釈に欠かすことのできないことなのです。翻訳では時に同じ言葉を違う意味で使うことがあります。また、文脈の中では違う言葉が用いられていても、非常に近い意味を持っている場合もあります。また、特に気を付けたいのは翻訳上同じ言葉が用いられていても、実は、原文では違う言葉が使われていることがあるという点です(例:ヨハネ 21:15-17²¹)。同時に、原文では同じ単語が別の言葉で訳されている場合もあります(例:マタイ 26:41 の『誘惑』と、ヤコブ 1:2 の『試練』²²)。これらのことを調べるために、コンコルダンスを利用したり、聖書ソフトを使ったりすることができるでしょう。また、様々な翻訳を比較することも、聖書を研究する上で有効な手段です。

²¹ 欄外の注釈を参照のこと。

²² 両方とも、ギリシャ語の、「πειρασμός」(ペイラスモス)という言葉が使われています。

また、言葉を調べるには、辞書を使って日本語の持つ意味や、あるいは、それ以上に原語の意味を調べることが大切です。聖書全体を通して、それと同じ言葉が、どのように使われているのかを知ることは有効な学びの1つでもあります。そして、文脈の中で、その単語がどのような意味で使われているのかを正しく理解しなければなりません。単語の定義を知ったからと言って、文脈を無視して、その定義を無理矢理に当てはめると間違った解釈が生まれてしまうからです。

言葉を調べていくと様々な発見があります。例えば、ヨハネ 2:23-24 では、「信じる」という動詞が2回使われています。原文において、この全く同じ言葉が、新改訳聖書の、23 節では「信じる」という意味で訳され、一方、24 節では「任せる」という意味で訳されているのです。なぜ、このような違いが生まれたのでしょうか。それは、1つの言葉が文章の中で違う意味を持って使われることがあるからです。ヨハネ 2:23-24 の場合、訳者が別の表現を使ったのは、明らかに文脈を考慮したからです。そして、このような発見は私たちに、「信じる」という言葉が、どのような意味で使われているのかを理解させてくれるのです。ヨハネの福音書は「信じる」という言葉を非常に多く使っています。そして、ここでヨハネは、この動詞が「任せる」という意味合いでも理解されることを示してくれているのです。聖書が教える、「信じる」ということは、単なる知識上のことではありません。そこに完全な信頼を置くが故に、「任せる」ことでもあるのです。このことを強調するかのごとく、ヨハネは、この福音書の中で、「信仰」という名詞を1度も使いません。ヨハネの福音書の中で、「信じる」ということは常にアクティブな、生きたものであり、それ故、常に動詞で登場するのです。

4. 他の個所を参照して調べる

聖書研究における、最高の注解書は聖書です。それ故、みことばを用いて、みことばを解釈することは、私たちの聖書解釈を正しいものにする助けとなります。ここには、単に同じ言葉を参照することだけでなく、同じ出来事について語っている個所を参照すること、同じ概念について語っている個所を参照すること、また、反対の事柄が書かれている個所を参照することなど、幾つかの方法があります。これらを用いて、私たちは間違った解釈をしないように、確かな枠組みを作ることができるのです。

顕著な例は、エペソ 5:18とコロサイ 3:16でしょう。これらの、2つの手紙は非常に似たところの多い手紙です。そして、それは私たちがパウロの語っていることをより良く理解する助けをしています。エペソ 5:18 の『御霊に満たされなさい。』という命令と、コロサイ 3:16 の『キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ…』という教えとは、ともに、『詩と賛美と霊の歌』と続きます。また、これら2つの、パウロによる獄中書簡²³では共に、神に感謝すること、家族間での関係、主人と奴隷の関係について教えられています。これらのことは、この2つの記事が少なくとも非常に近い事柄である、ということを見せてくれています。そして、これらの個所を考える中で、私たちは御霊に満たされることと、キリストの言葉を自分たちの内に、豊かに住まわせることの関係性を考えなければならないのではないのでしょうか。

また、長老の条件を考える時、私たちは、I テモテ 3 章とテトス 1 章を参照しなければならないことを知っています。また、黙示録を学ぶにあたって、ダニエル書や、オリーブ山での説教(マタイ 24-25 章)、そして、テサロニケ人への手紙を参照することは非常に有効です。また、I ヨハネ 1:9 を考えるにあたって、詩篇 51 篇やダニエル 9 章を読むことは、「罪の告白」ということを考える上で、非常に大切でしょう。このように、様々な聖書個所で、私たちは他の個所を参照することによって、より良い理解のもと、みことばを知っていくことができるのです。

5. 違う翻訳を調べる

日本語の聖書にも、様々な翻訳があります。文語訳聖書、口語訳聖書、共同訳聖書、新共同訳聖書、新改訳聖書、現代訳聖書、その他、リビングバイブルや詳訳聖書など、多くの日本語訳聖書を手にすることができます。また、翻訳は1度出版されれば、それでおしまいというものではないということに気付かなければなりません。より意味が明解になるように改訂したり、間違っているところを改善しようとし

²³ エペソ書、コロサイ書の他には、ピリピ書とピレモン書があります。

たりするために新しい版が出版されます。これらの違った翻訳を比較することによっても、私たちは多くのことを学んでいくことができるでしょう。例えば、Iヨハネ 5:18 は、新改訳・第二版では、『神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。…』と訳されていますが、第三版では、『神によって生まれた者はだれも罪を犯さないことを、私たちは知っています。…』となっています。このように、翻訳によって、その意味するところが違ってくるのです。このような個所を見つけたら、私たちは原文がどのような表現を使っているのかを調べる必要があるでしょう。例え、すぐにその答えが見つからなかったとしても、どの翻訳が、どのように訳しているかを調べることによって、どのような解釈をするべきかを考え続ける必要があるのです。

基本的原則の中に記しませんでした。解釈の原則の1つとして、原語の優位性というものがあります。聖書の原典はヘブル語、アラム語、そしてギリシヤ語という、3つの言語で記されました。これらの言語で書かれていることを学ぶことが、正しい解釈をする上で、最も優位であるということは言うまでもありません。残念ながら、翻訳には翻訳者たちの意図(解釈や神学)が入ってしまいます。どれだけ正確に訳すことに努めても、微妙な表現を表そうとする時に、翻訳者の考えがそこに入り込むのです。日本語の聖書では、聖書を正しく解釈することができないのではありません。しかし、より正しい…、また、より良い理解をしていくなら、原文に対する理解を深めていく必要があるのです²⁴。

実は、翻訳には、大きく2つの立場があります。1つは、原文に対して、徹底的に忠実であるという字義主義で、もう1つは読みやすさを重視した同意主義です。別の言い方をすれば、前者は1つ1つの言葉を忠実に訳すことに努め、後者は1つ1つの意味を忠実に訳すことに努めています。もし、完全に字義主義であれば、私たちは聖書が教えていることを理解することが非常に困難になるでしょう。…と言うのは、聖書のみことばの中には、現代の私たちに意味が通じないことがたくさん出てくるからです。逆に、完全に同意主義であっても、私たちは聖書の教えていることを正しく理解することが困難になります。なぜなら、聖書に書いてあることはすべて、誰か(翻訳者たち)が、その意味を解釈した上で、現代の言葉に置き換えられて書かれてあるので、書かれていることはすべて、翻訳者たちの目を通してしか知ることができないからです。リビングバイブルのように、お話として、聖書を伝える方法を取ると、それは完全意識となり、それではもう翻訳と呼ぶことができなくなります。それ故に、翻訳という作業は非常に難しいものであり、様々な訳の聖書が存在するのも、まさに、こういった理由からなのです。

6. テーマを調べる

このことは文脈に深く関係することですが、各書、各章、各段落のテーマや鍵となる概念をしっかりと掴むことは、みことばを解釈する上で、非常に大切なことです。それらのテーマに基づいて、著者たちは、それぞれの文面を記しているからです。例えば、列王記と歴代誌は、同じ時代の事柄を記しています。しかし、これら2つの本は、明らかに違う読者に対して…、違う目的で記されています。そのことを知って、解釈しなければ、書かれてある内容の違いに戸惑うことでしょう。先にも挙げました通り、ローマ書とヤコブ書の間にある、「信仰」と「行い」の問題は、このテーマと鍵となる概念ということを見逃した時に起こる問題でもあるのです。マタイ 25 章に出てくる例え話は、すべて終末に関連する事柄です。このテーマを文脈から正しく導き出せていないと、イエス様が教えていない意味を、例え話に見いだしてしまうことがあるでしょう。そのような過ちを犯さないために、私たちは著者の語っていることをアウトラインにしてみたり、焦点となっている主要な教えを考えたり、一貫して教えられているテーマを見つけたりする訓練をし続けなければならないのです。

²⁴ 残念ながら、この点で、日本語での聖書研究には限界を見ることがあります。原文を調べることができる日本語の文献があまりにも少ないのです。そこで、もし、英語の文献を用いることができるなら、それは素晴らしい助けとなるでしょう。コンコルダンス1つにしても、原語で調べることができるコンコルダンスが、日本語の資料以上に、英語の場合、たくさんあります。聖書の個所と単語さえ分かれば、英語が分からなくても十分に使うことができる資料がたくさんあります。これらを用いることを学ぶことも、聖書理解を深めるために必要かも知れません。

7. 注解書を調べる

注解書は、これまで見てきた方法のすべての段階で既に用いているかも知れません。しかし、注解書の1番の役割は、自分が学んで、導き出した解釈が正しいかどうかをチェックするところにあります。良い注解書を見つけることは困難かも知れませんが、信仰の先人たちが残した良書を参考にして、みことばから学んだことが正しかったかどうかを吟味するのが注解書の役割です。また、自分たちの知識では理解することができなかった詳細を教えてくれるのも注解書の務めでもあります。時に、「私は聖書だけで充分です。ほかの資料を使って研究したり、解釈のアドバイスを受けたりする必要はありません。」という人がいます。「聖霊が教えてくださるのだから…」という考えは、ひょっとすると霊的なものに聞こえるかも知れませんが、実は、高慢と非常に大きな危険に満ちた考えです。高慢であるという理由は、私たちよりも霊的に成熟し、知性を持ち、みことばに精通していた信仰の先人たちの言葉は、私たちの解釈の助けにならない、というところにあります。また、危険は、そのような人々の考えを参考にしないが故に、独りよがりです。全く見当違いの解釈をしていることに気付くことがないために起こるのです。ただ、注意しなければならないのは、これらの資料に100%依存して、自らで考えることをしないことです。あくまでも、こういった資料を参考にして、みことばが何を言っているのかを、しっかりと解釈するようになるべきなのです。

ところで、注解書には大きく分けて、3種類の注解書が存在します。1番目はデボーション的注解書です。これは適用を中心に書かれたもので、なぜ、そのような解釈に到達したのかを説明することが、ほとんどありません。注解者は、自分が導き出した解釈に基づいて、実生活への適用、また、みことばの原則を書き記しているのが特徴です。2番目は説教的注解書です。この類の注解書は、なぜ特定の箇所がそのように解釈されるべきなのかを背景や文脈、あるいは、単語や参照箇所を使って説明してくれています。どれだけ詳しく、それをするかはそれぞれ違いますが、良い説教的注解書は、その解釈に対するさらなる洞察を与え、また解釈に基づいた適用を指摘します。3番目は釈義的注解書です。日本語ではあまりこの類の注解書はありませんが、これらは専門的知識に基づいた歴史的、文法的内容の事柄を記しています。実践的な事柄も記してはいますが、著者が最も関心のあることは、どのように特定の箇所が理解されるべきであるかの詳細を記すことであり、様々な解釈の立場の良い点と悪い点を列挙し、それらを充分考察した上で、その箇所の解釈はどうであるべきかを記すことです。

良い注解書を持つことは、良い教師を持つことと同じくらい価値あることです。信仰の先人たちは多くの知恵と知識を、私たちに残してくれました。それ故に、それらの素晴らしい財産を大いに用いて、聖書を解釈していくことに努めるべきなのです。

解釈とは、聖書理解の核です。この部分を怠ると、私たちは大変な過ちを犯してしまいます。みことばを学ぶことは、神の前にある私たちの責任です。このことは、クリスチャンであれば誰でも負っている責任です。正しく聖書を知り、それを教えることは、特別な人の働きではありません。大命令の中で、イエス様はこう教えてくださいました。『また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。…』(マタイ 28:20)。この、「弟子を作りなさい！」という命令には、人に教えるという働きが含まれています。そして、イエス様が告げられたことを教えていくために…、私たちは、正しくみことばを理解することが必要なのです。

<質問>

問: 今回の学びを通して、あなたが示された問題点や間違いはありましたか?

問: 神が喜んでくださる、正しいメッセージとは、どのようなものだと思いますか?

問: 今後、あなたは、より正しい聖書理解を持っていくために、どうしようと思っておられますか?

第6課 CS 教師のための聖書適用術

暗唱聖句 ヤコブの手紙 1:21-25

21 ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。

23 みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。

24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。

25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。

A. 何のために聖書を学ぶのでしょうか？

私たちが聖書を学ぶのは、ただ単に、みことばの真理を知ることによって、私たちの知的欲求を満たすためなどではありません。確かに、聖書を正しく理解することは大切なことです。しかし、それが最終目的なのではありません。私たちが聖書を観察し、解釈することによって正しく理解しようとするのは、そこで教えられていることを通して、私たちが、より主イエス・キリストに似た者として変えられていくためです。そうして、その目的のために、「適用」という3番目のステップが必要不可欠なのです。

聖書のみことばを学んでいくことによって、私たちクリスチャンが「より賢い罪人」となっていただけでは、聖書を学ぶ意味がありません。以前に学んだように、聖書のみことばは、『聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益…』(Ⅱテモテ 3:16)なのです。そこで、私たちの課題は、ただ単に、聖書の知識を私たちの頭に蓄えていくことではなく、私たちの心を変えられていくことであるはずで、そして、そのような霊的変化は正しく解釈されたみことばが、どれだけ、その人の人生に適用されているかにかかっているのです。

1. 適用を妨げるもの

「学んだことを実践することは大切である」ということを否定する人はいないでしょう。しかし、実際にそれが大切であるということを知りながら、適用を積極的に行おうとしている人の数は、あまりにも少ないというのが現状です。なぜ私たちは適用をすることが苦手なのでしょう？そこで、今から、私たちがよく目にする、3つの原因を最初に考えてみましょう。

① 大きな誤解

日本のような年功序列の社会では、信仰を持って何年経っているかということが、その人の霊性を判断する基準となることがあります。また、聖書の知識の量によって、それを計るかも知れません。しかし、どれだけ年数が経っていても…、あるいは、どれだけ神学を知っていたとしても…、その人の生き方が、主の求めるものに変わっていなければ、その人は霊的に成熟した人であるとは言えません。そうして、そのことを誤解してしまっている人が、あまりにもたくさんいるのです。

子どもがどれだけ「分かっている！」と訴えても、親は「何度言ったら分かるの！」と子どもを叱責することがあります。なぜなら、その子どもの行動が、その理解を証明しないからです。「部屋を片付けなければいけない…」ということを知っていたとしても、実際に、部屋を片付けることをしなければ、親の言いつけを、その子どもが、本当に理解しているとは言えません。聖書に関しても同じことが言えます。例え、私たちがどれほど多くの聖書的知識を持っていたとしても、もし、私たちが聖書の教えることを、その生き方において実践していないのなら、それは、私たちが聖書の教えを本当の意味においては理解できていないことを証明するのです。

私たちが学んできた、観察と解釈とは、私たちが正しい知識を持つことができるようにしてくれます。しかし、そのことが私たちを変えるわけではありません。信仰者が「変わりたい！ 変えられたい！」と、心から願い…、そのために必要なことをしていこうとする時に、観察や解釈が、正しい変化をもたらすための助けをしてくれるのです。そうして、正しい変化は、私たちが教えられたことを実践していく時に起こります。それ故に、知識を得ることが適用と同等であると考えてはいけません。

②自己防衛

私たちは責められることを好みません。それ故に、私たちは他人から責められる時に、何とか、その呵責を緩和しようとして、様々な方法を取ろうとします。聖書の原則を理解した時、私たちは時に、自分が実践できている事柄にだけ目を向けてしまうことによって、自分自身のことを守ろうとすることがあります。これだけでいいから良いだろうと考えるのです。しかし、神は完全を求められる御方です（マタイ 5:48）。例え、私たちの考えや行動などが、80%正しかったとしても、残り20%の間違いを、私たちはしっかりと認め、変えられていくための手段をとっていかねばならないのです。

私たちが十分な適用をしないのは、個人的で具体的な適用を行うことによって、自分自身の責任が増してしまうことを嫌っているからかも知れません。自分が実践できている部分は適用として認めても、実践できていない部分を考えることは辛いことであるため、それを避けて通ろうとするのです。また、それだけではありません。みことばの解釈を通して、はっきり示される原則や命令が重要なものであることを認めながら、それらが適用されない理由を一生懸命探してしまうことがあります。「私の置かれている環境で、その命令を守ることにはできないから…」と考えてしまうのです。もしも、私たちがこのような態度で、みことばを学んでしまうなら、私たちが正しい適用を導き出すことは難しいでしょう。人は、自分の罪を正当化しようとする時、神に喜ばれる者になるために必要な適用をすることができなくなるのです。このようなことが無いよう、私たちは自分の心をしっかりと見張っている必要があるのです。

③すり替え

最後、自己防衛をせずに、みことばによって責められたからといって、必ずしも、それが正しい適用を行っていることにはつながりません。ある人たちは、みことばによって罪の責めを経験します。しかし、罪が責められることは、十分に適用したことと同じものではないのです。例え、罪の責めを感じたとしても、それが自分の生涯に変化をもたらすことを奨励しなければ、そこにみことばの適用は起こっていないのです。このような人たちは感情的にみことばを受け取ることと、霊的成長とを混同してしまっています。彼らは、みことばによって責められることと、みことばによって変えられることが同じだと思っているのです。しかし、変化をもたらさない責めは、みことばの適用ではありません。変化をもたらさない責めは、その人の心に頑なさをもたらすだけなのです。

感情的応答は、私たちの生活を継続的に変えることはできません。確かに、それは、私たちを変えるきっかけにはなるかも知れません。しかし、真の変化とは、心の変化によってもたらされるものであり、それは実践のうちに現されていくのです。多くのクリスチャンが、三日坊主の決心をしてしまった経験を持っているでしょう。そのような単発的な変化は、みことばが正しく適用されていない時に起こるのです。感情的体験を適用と勘違いし、これらをすり替えてしまう時に、私たちの変化は一時的なものにとどまってしまうのです。私たちは感情的応答が、意志的応答に勝るという思いを捨てなければなりません²⁵。…と言うのは、聖書のみことばは、感情によって、「神に従いなさい。みことばを実践しなさい。」というようには教えないからです。それ故に、私たちはみことばを適用していくにあたって、私たちの意志に基づく正しい適用をしていくことができるように、ますます注意していかねばならないのです。

²⁵ 感情が必要ないというわけではありません。しかし、私たちの変化は感情に基づいているべきものではなく、意志に基づいているべきものであるが故に、継続的に実践されていくものなのです。そして、もちろん、そこに感情がともなうことは何よりも素晴らしいことです。

聖書の学びは単なる学問ではありません。神学は机上のものであってはならないのです。あらゆる教理は、私たちの生活に直接的な影響をもたらします。神に関する知識を正しく理解する時、その真理は私たちを根本から変えるのです。私たちが罪を犯す時、それは私たちが神の真理を正しく理解していないことを証明します。聖書が「互いに愛し合いなさい。」と教えているのに、愛することを行わないなら、その人は、その適用の無さの故に、みことばを正しく理解していないことを露呈しているのです。

クリスチャンにとって、みことばの適用はオプションではありません。適用が行われることなしに、聖書の学びは完了しません。それ故に、私たちはみことばの適用を怠ることがないよう、気を付けなければいけません。様々な理由で私たちは適用をしなくても、理解さえしていれば良いと考えることがあります。しかし、個人の学びでも…、礼拝のメッセージでも…、自分が人を教える時であったとしても、みことばの真理を理解していく時、そこには必ず、教えられたことに対する適用というものがなければならないのです。

2. 適用をする時の注意点

「適用が必要だ！」と言うことは簡単です。しかし、どのように適用を見つけるのかということを知らなければ、私たちは、みことばから間違った適用を見出してしまうことがあります。確かに、これまでも、「正しい解釈は1つだが、適用は無数にある。」ということを知りました。ただこれは、「適用は無数にあるのだから、どんな適用をしても構わない。」ということではありません。正しい解釈に基づいた適用でなければならないのです。もし、解釈が正しくなければ、必然的にそこから生まれる適用も正しいものではなくなります。また、解釈が十分にできていなければ、十分な適用はできないのです。このことを理解した上で、適用を考える時の注意点を幾つか挙げていきましょう。

①物語をそのまま信仰生活の基準にしない

聖書の大部分は、歴史的出来事を記している物語になっています。それらの物語は、実際に起こった事柄を私たちに伝えてくれています。そして、聖書に記されている多くの出来事は、それが良いものか悪いものかというコメントなしに記されています。それ故に、私たちは歴史的出来事の詳細から、特定の事柄の基準を見出すべきではありません。もし、聖書の他の個所で、それが原則または基準として記されていなければ、私たちはそれが歴史上起こった出来事であって、私たちが従わなければならないものとして捉えるべきではないのです。例えば、イエス様が何時間もゲツセマネの園で、ひれ伏して祈ったことをマタイが記していても、私たちが同じように、ひれ伏して祈るべきであるということを教えているわけではないのです。もし、その歴史的記事に描かれている原則が、他の個所で、はっきりと教えられているのであれば、私たちはそれを断定的に規範とすべきではありません。

例えば、初代教会の人たちが、自分たちの財産を売却して、お互いの必要を満たし合っている姿が使徒 4:32-37 に記されています。しかし、この記事は初代教会のクリスチャンが何をしていたのかということを書いていて、**「これを模範に生きていきなさい！」**と教えられているわけではありません²⁶。つまり、この記事から、**「クリスチャンは自分の財産を、貧しい人の生活を支えるために処分すべきである。」**という原則を見つけ、それを私たちの生活の中で適用しなければならないと考えるのは間違っています。この歴史的な事実が教えている原則は、恐らく、**「クリスチャンは、互いに愛し合わなければならない。」**ということであるはずですが、これは、イエス様が弟子たちに教えられたことであり…、その命令の実践(適用)が初代教会の人々によってなされているのです²⁷。ですから、この個所から、私たちが学ぶべきことは、自分たちの財産を売って、教会の人々と共同生活をすべきだ、ということではありません。

²⁶ 実際には、この記事から社会主義を主張する人々がいます。

²⁷ ヨハネ 13:35 で、イエス様は、『もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認める…』と言います。使徒の働き歴史的な脈を見ると、この時、実際に多くの人たちが、その信仰の故に職を追われ、生活に困っていたことを見ることが出来ます。また、イスラエルの「残された民」として、彼らが互いのことを気遣っていた姿を見受けられます(参照:申命記 15:1-4)。このような状況下で、イエス様の語った命令を実践した人々は、使徒たちと共に人々の前で、主イエスの偉大な力を、その愛の生活をもって証していたのです。

実際、聖書の他の箇所では、各個人に財産を管理する責任がある、ということが教えられています²⁸。あるいはまた、自分の喜びのために、自分の労働の実を用いることは、楽しむべき、良いことであると、ソロモンは伝道者の書の中で何度も語ってくれています。それ故に、私たちが個人の財産を持つことは、決して、悪いことではないのです²⁹。

近年のキリスト教会は、「初代教会に戻ろう！」といったスローガンを掲げて、教会形成を見直そうという動きが活発になっています。使徒の働きを見て、教会がどのように建て上げられるべきなのかを考えようとするのです。しかし、教会のあり方を学ぶのならば、私たちは使徒の働きではなく…、エペソ書やテモテ書、テトス書などを見るべきです。なぜなら、これらの書簡は教会に関する事柄を教義的に教えてくれているからです。使徒の働きの目的は、教会のあり方を教えることではありません。教会の軌跡を記しているだけなのです。確かに、そこから幾つもの教理的原則を見つけることも可能ですが、それらは普遍的・一般的原則を、その記事の中から見つけることができる時に行うべきことであって、そこに書かれていることを、そのまま模範にすることではないのです。

②特定の個人/グループに語られている教えを普遍的な基準としない

上記の注意点に関連することとして、「この言葉は、誰に対して語られているのか？」ということに注意することが必要であることを挙げなければなりません。このことをしっかりと理解することは解釈をする上で重要なことであると同時に、適用においても必要なことなのです。私たちがこの部分を間違えると、神が求めていることを人々に求め、神が約束していないことを人々に約束してしまいます。それ故に、適用を考えると、私たちはこのことを注意していなければならないのです。聖書は頻繁に、主が個人（アブラハム、モーセ）やグループ（イスラエル、弟子たち）に語っている言葉を記してくれています。それらの命令や約束の多くは、当事者である彼らにのみ与えられています。それ故に、私たちに適用されないし、適用してはならないのです。

例えば、イエス様は、『胴巻に金貨や銀貨や銅貨を入れてはいけません。旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです。』（マタイ 10:9-10）と教えています。この箇所から、「伝道旅行に行く時は、その身一つで行くべきである。」という適用を見出すのは、間違っています。この指示は12弟子たちをガリラヤや伝道へと送り出す際に、イエス様が彼らに与えた命令です。それ故に、ここで教えられていることを、そのまま私たちに適用することはできません。

では、大（宣教）命令はどうでしょう？マタイ 28:18-20 に記されている命令も、元は、11人の弟子たちに対して語られたものでした。しかし、マタイ 10 章と大きく違う点は、文脈の中で、イエス様が使徒たち以外にも当てはまる約束を命令の保証として与えていることです。その、『わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』（マタイ 28:20）という約束の、『あなたがた』とは、明らかに弟子たちのことを指しています。しかし、この約束は、『世の終わりまで…』という、まだ起こっていない時に至るまで継続しています。つまり、ここでの正しい解釈は、イエス様がその弟子たちに対して、この命令を与えられたということです。しかし、この命令は、適用として私たちにそのまま当てはめることができます。なぜなら、主は、今も、私たちと共にいて…、この命令の実践のために助けを与え続けてくださっているからです。

また、パウロはテモテに対して、エペソの教会で、長老と執事を選出するように教えました。これは、エペソの教会特有のことだったのでしょくか？確かにパウロが考えていたのは、エペソでテモテが、長老と執事を選出することでした。それが正しい解釈です。しかし、ここで教えられていることは、実は、あらゆる時代の、あらゆる教会が守るべきこととして教えられているのです。この文脈で、パウロは、テモテに

²⁸ 事実、使徒 5 章に出てくるアナニヤの話は、必ずしも、財産を売って分け与える義務のないことを、私たちに教えてくれています。

²⁹ ただし、私たちは他人の必要を満たすために、でき得ることを行うようにも教えられています（Iヨハネ 3:17 など）。

対して、『私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながらも、この手紙を書いています。それは、たとい私がおそくなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。』(I テモテ 3:14-15)と告げています。神の家である教会で、どのように行動すべきかを教えているのですから、同じ神の家であるすべての教会は、このパウロの命令を適用し、実践するべきなのです。

最後に例として挙げさせていただく、使徒 16:31 も、間違った適用をされることが多い個所の1つでしょう。ここで、ルカは、『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます…』というパウロとシラスが語った言葉を記しています。ここの個所から、信仰を持った人に対して、あなたの家族が救われるという保証をしてしまう人がいます。しかし、それは正しい適用ではありません。ここで、この言葉を告げられているのは現代に生きる私たちではなく、その当時の、ピリピの牢獄の看守です。そして、もちろん、家族の救いが約束されているのは、この看守に対して、なのです。この文脈の中に、私たちは、この約束が現代の私たちにも与えられていることを示唆する部分を見出すことができません。また、聖書の他の個所で、同じようなことが明確に教えられている個所を見つけることもできません…。それ故に、ここの個所を私たちに対しても適用して、「あなたが信仰を持ったから、神は、あなたの家族をも救ってくださいますよ。」という間違った希望を与えることは、決して正しいことではないのです³⁰。

上記のように、文脈や聖書の他の個所で明確に教えられていない限り、私たちは特定の個人、またはグループに語られている事柄を、私たちに、そのまま適用すべきではありません。聖書は、直近の文脈または歴史的状況によって、誰が対象となっているかを教えます。それ故に、みことばを適用する際、私たちは適用すべきでない命令を適用したり、期待すべきでない約束に心を留めたりすることがないように注意しなければならないのです。

③みことばの漸進性を無視しない

私たちは旧約聖書を学ぶ時に、特に、「啓示の漸進性」というものを考えておかなければなりません。例えば、食事に関する命令は、今の私たちに適用するものではありません。ペテロは、このことをヨッパにいたときに学びましたし(使徒 10-11 章)、パウロはローマ 14 章などで、何を食べても構わないということを教えています。それ故に、律法が豚を食べることを罪と定めていても、今、それを適用することはできないのです。安息日を覚えることに関しても、同じことが言えるでしょう。安息日を守るという定めは、土曜日を聖なる日として、主の安息として、仕事をしてはいけないというものです。しかし、この命令は、新約聖書で繰り返されていない命令です。それだけではなく、パウロは安息日のような特別な日を守らなければいけないとする必要がないということを教えています(ローマ 14:5)。日曜日は、安息日ではありません。それ故に、日曜日を安息日と同等のものと考えて、日曜礼拝への参加を強制することや、その日に仕事をするを旧約聖書の教えの故に罪と定めるような適用は正しいものではありません。しかし、この戒めからの適用として、休みが必要であることや、主を礼拝する日を設けることの大切さを教えることは間違いではないでしょう。

このように、みことばの漸進性というものを認めなければ、今、私たちはいけにえを捧げているべきですし、食事の制限や割礼、神殿での礼拝や祭司制度を教会で実践していなければならないでしょう。だからといって、旧約聖書が今の私たちに必要のない啓示であると考えべきではありません。パウロが言うように、『昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。』(ローマ 15:4)ということを感じるべきです。

④勝手な適用を作らない

十分な観察と解釈をせずに適用をすると、そこには、主が意図していない事柄が生まれてきます。例え、神学的には正しい適用であったとしても、主が語っておられないことを私たちが学び…、私たち

³⁰ 家族に救いが与えられることを期待し、祈りと伝道に励むよう勧めることと、「救われる！」という保証をすることは大きく異なります。

が教えていかならば、それは私たちの言いたいことを伝えているにすぎないということを、私たちはしっかり理解しておくべきです。みことばを充分理解する前に、自分の勝手な適用を作り出してはならないのです。あるクリスチャンは、次のような言葉を、ヘブル 1:3 の解釈と適用として用いています。

イエスの輝き、イエスの輝きが主の栄光の輝きであるという。それはわたしたちと共に歩まれた歩みであり、十字架につけられた輝きである。神がどんな方か、一番分かるのはあの変貌の山ではなく、十字架だ。イエスが栄光を受けられたのは、復活でも、昇天でもなく、十字架だ。神がどんな方か、それはわたしたちのためにご自分を与えて下さるようなお方。そこに神の輝きがあり、神の栄光がある。何という幸いだろうかと思う。何という恵みだろうかと思う。主よ、今日もわたしと共にいて下さり、あなたの栄光を分かせて下さい。あなたの栄光を味わうことができますように³¹。

ヘブル 1:3 の冒頭に出てくる、『御子は神の栄光の輝き…』という言葉から、このような理解が生まれています。しかし、ここの個所を観察すると、ここに十字架を見出すことは至難の業であることに気づきます。事実、ヘブル書の著者は、『神の栄光の輝き』が、「十字架につけられた輝きである」とは一言も告げていません。ここで書かれている個人的適用は、「今日も、私と共にいてくださり、あなたの栄光を分かせてください。あなたの栄光を味わうことができますように…。」というものです。これらは、その言葉の内容に問題のあることではありません。しかし、「十字架の輝きを分かせてください。あなたの十字架の輝きを味わうことができますように。」というのは、明らかに著者の意図することから外れた適用と言う他ありません。

そのように、私たちは、あまりにも安易に、「主が私を導いてくださり…」や、「主が語ってくださった。」などといった言葉を使います。しかし多くの場合、そのような言葉は直感的な印象による感情に支配された解釈から無理矢理作り出された適用であることに、私たちは気づくべきです。メッセージの中で、献金をする事の素晴らしさを伝えるために、ある牧師が5千人の給食の話を用いました。彼は、弟子たちが5千人の男性たちに食事を配り終わった後、イエス様が、『余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。』(ヨハネ 6:12)と語られたことに注目しました。弟子たちが集めると、12のかごいっぱいになるほど残りが出たことが記されています。この牧師は、そこで「一体誰が、この残った食事を持って帰ったのでしょうか？」という質問をしました。彼の答えは、「自分の食事を人々に与えた少年が持って帰った。」というもので、「犠牲をもって主に捧げる時に、主は12倍にして返して下さるのだから、あなたもこのように犠牲を払って主に献金しなさい。」と教えたのです。

聖書のみことばが教えていないことを教えることは、私たちが最も忌み嫌うものでなければなりません。上記のようなみことばに対する冒瀆とも言い得る状況を見る時、私たちは怒るかも知れません。確かに、私たちは、このような明らかに間違った適用をしないかもしれませんが、しかし、観察と解釈を怠り、著者が教えていないことから、自分勝手に適用を導き出すことがあるのです。自分の伝えたいことを、神のみことばを使って言わせることがないように、私たちは常に注意していなければならないのです。

以上のことから、私たちは間違った適用を生み出すことがないように注意しなければなりません。これらの注意点は、あくまでも代表的なものであって、これだけを考えていれば良いというものではありません。しかし、こういった注意点を知っておくことで、少しでも間違った適用から、自分たちの身を守っていくことができるようになるでしょう。

B. みことばを学んでいく目的について

どのようなことを考えると、正しい適用を、そのみことばの解釈から見つける事ができるのでしょうか？ 私たちは、その方法をしっかりと理解する必要があります。聖書の正しい知識が、正しい歩みへと繋がっていくために、このプロセスをおろそかにすることはできません。正しい適用を見出すために、私たちはもう一度テキスト

³¹ <http://www.jccofnj.org/main/sr2003/oct/j10.html> (2011/09/01 現在)

に質問をしていかなければなりません。それらの質問は、一般的な質問と具体的な質問とに分類する事ができます。以下のレッスンでは、これら2つをあえて区別しません。むしろ、一般的な質問の中で具体的な質問を挙げる事によって、具体的な方法を学んでいくことができるように記しています。一般的な適用は、誰にでも当てはまることで、具体的な適用は個人的なものです。そして、個人的な適用をしっかりとしていくことで、私たちは、より主に似た者へと成長していくことができるのです。

1. 適用を見つける方法

適用を見つけるために、テキストに行く質問は、私たちがみことばを観察する時、テキストに対して行う質問とは少し違います。1番の違いは、後者は著者が読者に対して語っていることは何かということを知っているのに対し、前者は神が私に求めていることは何かということを知っている、という点でしょう。確かに、同じ内容の質問をすることがあるかも知れませんが、その回答は、質問の方向性によって違うものになることを理解してください。また、適用は以前学んだように、正しい解釈に基づいていることが必要です。この解釈に沿って、質問の回答を求めていくことが大切です。ここに挙げる質問は例であって、これら以外にも多くの質問をすることができることを忘れないでください。

①従うべき命令は何か？

観察をすることによって、主からの命令が何かということを見ることができるでしょう。そして解釈をすることによって、その命令の具体的な意味や意図を知ることができます。それをもとに、私たちは適用を考えるのです。ここで注意しなければならないのは、聖書に記されている命令は現代に生きる私たちに直接的に当てはまらないことも有り得るということです。しかし、社会的、文化的状況は変わっても、主が命じていることの本質は変わっていないことを覚え…、自分たちがすべきことが何であるかということ具体的に考える必要があるのです。

例えば、パウロは、『この世と調子を合わせてはいけません。…』(ローマ 12:2)と命じています。それ故に、私たちは適用として、「この世と調子を合わせない！」ということを手を挙げるでしょう。しかし、問題は、それが何をすることなのか？ということです。確かに、これは一般原則であるということができるかも知れませんが、しかし、もし、「この世と調子を合わせない。」ということがどういうことなのかを理解できていなければ、どうやって、この命令を実践することができるのでしょうか。また、調子を合わせない生き方がどのようなものなのかを具体的に考えなければ、調子を合わせないでいる方法を知らないために、結局変われない状態が続いてしまうのです。

そこで、そのみことばの解釈をすると、幾つかの大切なことに気づくことができます。まず、この命令が実は、受動態で書かれていることに気が付きます。つまり、パウロはここで、私たちがこのような状態になることを許可していると言っているのです。自分が積極的に調子を合わせようとしているのではないのです³²。そしてこのことは、「調子を合わせる」という動詞の意味を調べるとさらによく分かります。この言葉は表面的な姿を表しています。この言葉は、仮面を付けることや演技をすることを表す言葉として使われることがあります。この言葉の語源となる言葉は、ピリピ 2:7で、『姿』という言葉で訳されています。キリストの本性とは異なる人間の姿をとられたことを指しているのです。つまり、パウロは、ここでクリスチャンがその本性とは違う姿をとることを良しとしてはいけないうことを教えているのです。

『神に受け入れられる、聖い、生きた供え物として、[自分を]ささげる…』には、私たちは救われた者としての姿を外面にしっかりと現して生きていかなければなりません。このことは対比されている命令である、『心の一新によって自分を変えなさい。』という命令によっても表されています。さらに、ここで使われている動詞を詳しく調べると、この命令は、「今、行っていることを直ちにやめなさい！」という意味

³² 日本語では理解しにくいですが、このみことばは、英文では、“Do not be conformed to this world.”となっています。これは明らかに、“Do not conform to this world.”とは違います。前者は調子を合わせるという行為を、自分以外の誰かが行っていることを表し(それ故に受動態なのです)、後者は自分がその行為を行っていることを表します。パウロは、ここで受動態を使うことによって、私たちがこの世と調子を合わせることを良しとしている姿(=許可している姿)を表現しているのです。

であることが分かります。私たちは、既に新しいのちに入れられているが故に、『この世』(または「この時代」)とは違う時代の原則に沿って生きるべきなのです。だからパウロは私たちが、「霊的礼拝」をささげて生きていくために、この時代に沿った生き方をやめなければならないことを命じているのです。

このような解釈をもとに、私たちは一般的適用として、単に、『この世と調子を合わせてはいけません。』と言うだけでなく、もっと具体的な適用を見つけることができます。例えば、「ノンクリスチアンの社会の基準に沿って、ものを考えない。」という適用ができます。また、「自分の欲望を満たすという、この世が求めることを追求するのではなく、神の栄光をもたらすことを追求しなければならない。」という適用を見つけることができます。『クリスチャンでありながら、そのことが分からないような生き方をしてはいけません。』とも言えます。「未信者の仮面を付けて、未信者と同じような生き方をする者であってはならない。」ということも一般的適用の1つなのです。このように、適用は様々な形で表現し、また様々な形でつけることができます。しかし、ここに挙げているのは、まだまだ一般的適用です。では個人的適用とはどのようなものなのでしょう？

命令が見つかったならば、その命令を実践するために、自分は何ができるかと考えるのが個人的適用です。例えば、一般的適用で、「ノンクリスチアンの社会の基準に沿ってものを考えない。」ということを見つけました。これから、「世の中の人々は学校での成績が良いことを子どもに求め、そのために子どもたちを塾漬けにするが、それよりも聖書は、子どもが神様を喜ばせて生きようになることが最も大切だと教えるから、子どもと十分に時間をとり、神様の素晴らしさや、従順の祝福を教えることに努めるようにしよう。」という個人的適用が生まれてくるのです。しかし、これで適用は終わりません。個人的適用とは、自分ができることは何だろうと考え、その方法を具体的に探ることです。ですから、このような時間を子どもと、どのように持つことができるのかを考え、どのような方法でそれを実践するのかという計画を建てる必要もあるのです。

②教えられている一般原則は何か？

命令と同じように、聖書には多くの一般原則が記されています。これらの原則は、文化的制限を持たない、時代を超えて適用することができる原則です。ですから、聖書に直接記されていない問題や状況に直面した時にも、私たちは聖書的原则に基づいて、主の前に正しい、賢い選択をしていくことができるのです。このような原則は、みことばに具体的に記されていることもあれば、文脈に含まれていることもあります。一般的に、歴史的な事柄を記しているところでは、原則は文脈に含まれていることが多く、教えがなされているところでは、直接的に記されていることが多くなります。

例えば、ガラテヤ 6:7 には、『人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。』という一般原則が記されています。これは時代を超越した、今の時代にも適用する原則です。そして、ここでは、どのような行いを私たちが願い求め、実践していくのか？ということが問われています。そして、その結果が明確に教えられているのです。パウロはこの文脈の中で、『善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。』(ガラテヤ 6:9)という言葉を加えます³³。ここから、私たちは、どのような時でも、私たちの行動には報いが与えられること、そして、クリスチャンとして正しい選択をしていくことが、主からの祝福を受けることであることを学ぶことができます。そして、それが一般的な適用の土台となるのです。「自分の行いの報いを刈り取ることになるから、常に正しい、神に喜ばれることを行っていかなければならない。」や、「神からの具体的な祝福を味わって生きていくには、良い種を蒔いて生きていく必要がある。」といった適用は、この真理から導き出される一般的適用です。

では、ここからどのような具体的な適用が考えられるでしょう？ひよっとすると、私たちは刈り取りたい良いものが何かを考える必要があるかも知れません。例えば、それが神からの称賛ではなく、人からの称賛であるならば、私たちの生きていく目的に問題があることに気づかされます。時に私たちは、自分

³³ これは命令と約束です。これらに目を留めた上で、しっかりと適用を見出す必要があります。

の利益を第一にして、様々な行動を取っていることがあるのです。ですから、個人的適用の第一歩として、自己吟味をすることができるでしょう。また、蒔いている種が本当に良いものかどうかをすることもできます。例えば、自分が疲れているという理由で、妻との会話を十分に持たない生活を続けている時、次第に夫婦の関係は神が望んでいないものへと変わっていきます。小さな罪と思って、それを見過ごしていると、いつの日か、その罪の報いを刈り取らなければならない日が来ることを覚えるならば、どのような生活をしていくべきかを、より注意深く考え、行動するようになるでしょう。

また、明確に記されていないところからも一般的原則を見ることができます。例えば、使徒 17 章には、パウロが伝道した3つの町での出来事が記されています。この話を学んでいく中で、私たちはパウロの伝道の働きを通して、4つの一般原則を見出すことができます。まず、1番目は、パウロは自分の益のために働きをしなかったように、私たちも自分の利益のために働きをしないということです。パウロは、何でもする覚悟ができていました。彼が最も望んでいたことは、人々に福音を伝えていくことでした。それは、明らかに彼自身の益のためになされたものではありませんでした。また、それだけではありません。テサロニケでの3週間をより深く考察すると、彼がそこで滞る費用を自らの手で稼いでいたことが分かります³⁴。彼は自分の益のために、働きをしていたわけではありません。みことばの働きをする人が、その働きによって養われることは当然であることを知りながら（I コリント 9:14）、生まれたばかりの教会の負担になるまいと、自分の時間と労力を割いて、パウロは伝道の働きをしたのです。この原則は、私たちが自分たちの働きに対する態度を吟味するという一般的適用を導き出します。その中で、具体的に自分の心を吟味する時、個人的適用が生まれてきます。「一体、この働きをして、何の得になるのか？」と考えることがないかどうかを考えなければなりません。働きがより良いものとなっていくために、できることを最大限しているかが問われます。教会の中の様々な働きを、自分がどれだけ熱心に行おうとしているのかが吟味されるのです。

2番目に、パウロはどんな時でも伝道をしようとしていた姿を見ることができます。これは、私たちが学ぶべき模範としての一般原則です。パウロは、どの町を訪ねた時も、まずユダヤ人の会堂に行って伝道するという計画を立てて伝道をしました。同時に、アテネの町での出来事のように、その時の状況を用いて、突然であっても伝道をする準備ができていました。彼は福音を語る時を探していましたが、それを見逃さなかったのです。このことは、パウロがテモテに命じた、『みことばを宣べ伝えなさい。時が良くて悪くてもしっかりやりなさい。…』（II テモテ 4:2）という言葉の思い起こさせます。彼は、この一般原則を自ら実践していたのです。私たちは、ここから多くの個人的適用を見出します。例えば、私たちは伝道の計画をしっかりと持っているか？ということを考えなければなりません。未信の友人や家族と時間を過ごす時、どのようにして、その人に福音を語るができるのかということを考えているかどうかということを私たちは問われます。そして、実際に具体的な計画を考えるきっかけを作るのです。また、伝道の機会を見逃さないように心掛けているかが問われます。常に、主がそのような機会を備えてくださることを求め、期待し、祈っているかを考えるのです。また、そのような機会が与えられた時、本当にしっかりと福音を伝えることができるようになっていくかを考えるでしょう。きちんと救いの教理を理解し、より分かりやすく、明確に福音を人に伝えるための準備をしているかを適用として考えるのです。それができていなければ、適用の具体的実践として、いつその準備をしていくかが問われるのです。

パウロは、伝道のために犠牲を払うことを躊躇しませんでした。また、犠牲を払ったとしても、意気消沈して働きから離れるようなことはありませんでした。このことを3番目の原則として挙げるすることができます。パウロは福音宣教の働きが、どのような危険を伴うものなのかをよく知っていました。実際に、彼は救われる以前、迫害を与える側の人物だったのです。しかし、そのような危険や犠牲は彼の伝道への思いを弱めるものではありませんでした。テサロニケで迫害を受けた後も、彼はベレヤで同じ働きを躊躇することなく行ったのです。ベレヤまでユダヤ人が彼を追ってきて、テモテやシラスと離ればなれになってしまっ

³⁴ I テサロニケ 2:9; II テサロニケ 3:8 で、パウロがテサロニケの人たちの負担にならないように、自らの手で仕事をし、生計を立てていたということを見ることができます。

たにも関わらず、彼はアテネでも同じように伝道するのです。この原則は一般的な適用として、私たちの伝道への思いを吟味させます。パウロのように身の危険を覚えるような迫害を受けることはないかも知れませんが、私たちも伝道をするにあたって、様々な困難を経験することがあるでしょう。そのような危険や困難があったとしても、パウロと同じように熱心にならなく、救われる人が起こされるために伝道し続けるかどうかと、私たちは自分たちの心を探らなければならないのです。そして個人的な適用として、実際に家族や職場、友人たちの間で、自分が犠牲を払ってでも主に忠実にあり、愛する人々が救いを得ることができるように伝道に励んでいるかを吟味し、時に悔い改め…、また、時に励まされ…、生きていくのです。

そして最後に、パウロはどこにでも、この福音を伝えようと働きに専心していました。神が導いたところへ、彼は喜んで出て行きました。また、その町のすべての人に、分け隔てなく福音を宣べ伝えようと働きをなしていました。私たちは時に、自分が心地良いと思う環境の中でだけ、伝道をしたいたくことがあります。しかし、パウロはどこでも、その働きを行おうとしていたのです。また、特定のグループの人を避けたり、または好んで伝道したりすることはありませんでした。これらのこともまた、一般的な適用として挙げられることです。そして、これも個人的な適用として、一人一人の状況の中に当てはめていかなければならないのです。苦手な人、または嫌っている人がいて、どうしてもその人には福音を伝えたくないと思っていることに気づかされるならば、いつ、どのようにその人に福音を伝えることができるかを具体的に考えるべきです。そして、それを実践していくことが個人的な適用なのです。

観察と解釈の過程の中で一般原則を見つけることは、みことばを適用していく上で、非常に大切なことです。そして、どのようにその原則が自分の生活に関係しているか、どのようにその原則に沿って生きていくことができるかを、具体的に考えていく時、私たちは正しい適用をしているのです。

③与えられている約束は何か？

聖書には非常に多くの約束が記されています。そして、それらを見つけることは、適用を考える上で大切なことです。聖書の約束は、命令と同じように、必ずしも、すべてが私たちに与えられているものとは限りません。ですから、解釈をすることによって、すべてのクリスチャンに与えられている約束かどうかをしっかりと知る必要があります³⁵。そして、私たちに適用しない約束を自分のものであると勘違いしないように注意しなければいけないのです。

また、聖書に出てくる約束には、無条件の約束と条件がついている約束とがあります。それ故に、どのような条件があるかをしっかりと知らなければなりません。例えば、「祈っても、私の願いはちっとも叶えられない…」と言って嘆く人たちがいます。その人たちは、『あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。』（ヨハネ 14:14）や、『私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになんかえられたと知るので。』（Iヨハネ 5:15）などを挙げて、「約束が守られていない！」と訴えます。しかし、これらの約束には、ある種の条件がついていることを見落としてはいけません。イエス様の言葉には、『わたしの名によって…』という条件³⁶が付けられていますし、ヨハネの手紙でも、『何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといふこと、これこそ神に対する私たちの確信です。』（Iヨハネ 5:14）という言葉が、その前の節に記されています。「神のみこころにかなった祈りをする…」という条件を見逃すと、間違った適用をもとに、私たちは間違った期待するようになってしまうのです。

³⁵ このことは前課で学びました。例えば、『人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。』（マタイ 10:19）という約束は、マタイ 10 章の文脈の中で、理解されなければなりません。これは、ガリラヤ伝道に遣わされる12人に対して語られた約束であり、現代の私たちに対して、直接的に与えられた約束ではありません。ですから、もし私たちが、この約束をそのまま適用して、「どんな時も神様が回答を与えてくださいます。」と言うなら、私たちは間違った適用をしていることとなります。このような適用をしてはいけません。

³⁶ 「イエスの名によって…」というのは、私たちの願いを叶えるための魔法の言葉ではありません。そのことを解釈の中でしっかりと理解することによって、正しい適用をすることができるでしょう。

けれども、私たちが正しく約束を適用する時、それは私たちの信仰生活に大きな希望を生み出します。例えば、『あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。』（ピリピ 1:6）というパウロの確信の言葉は、「神が救いを完成してくださる。」という素晴らしい約束を私たちに知らせます。これは、様々な理由の故に、落胆してしまっているクリスチャンにとって、大きな励ましと希望という適用を与えることができる約束です。神が救いの完成を約束してくださっているという事実は、私たちが様々な葛藤から解き放つ力となるはずで、また、『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』（ローマ 12:19）は、文脈にある命令と合わせて、私たちが敵に対しても最善をすることを促します。「神が、それにふさわしい報いを与えてくださるのだから、私は主が求めるように、愛をもって、その人に対して接していこう。」という態度を、その人のうちに生み出すことができるのです。このように約束を見つけて、正しく自分に適用することは、私たちを更なる従順へと導いていく素晴らしい助けとなるのです。

④ 神についてどのような真理が教えられているか？

聖書は、神に関する真理を、様々な形で私たちに教えてくれています。神がどのような方であるか、過去、現在、未来においてどのようなことをされているのかを、聖書は知らせてくれます。これらの真理は単なる神論として、神学的知識を私たちにもたらすだけでなく、私たちの人生を大きく変えるものです。神の属性やその存在を考える時に、まず、そこには畏怖の念が生まれるでしょう。そこには尊敬の思いから溢れ出る礼拝があるはずで、また、感謝の思いが当然のごとく生まれてきます。これらは、一般的適用です。そこから、具体的に個人的な適用をすることができます。様々な神に関する真理は、私たちの日常生活に関して多くの具体的な適用を生み出していきはざす。例えば、神の遍在性は、私たちが寂しさから解放します。それだけでなく、私たちが、「誰も見ていないから…」と考えて、行っていた様々な罪から、私たちが解放する助けとなります。

また、神の聖さは、私たちの罪深さを気づかせ、悔い改めへと誘います。神の主権は、私たちが不安と恐れから解放します。神の愛は、私たちが持つべき愛の模範となり、神の偉大なる力は、私たちがどれだけ弱く、あるいは、罪深くて、神を喜ばせる者へと私たちを変えることができることを確信させてくれるのです。

⑤ どのような変化が求められているか？

神が求めておられるのは表面的な変化ではなく、心の変化です。それ故に、みことばの真理を見る時、私たちは、それを通して、どのように心の態度を変えていくべきなのかを考えなければなりません。みことばを読む際に、神はどのような心の変化を、私たちに求めておられるのかと尋ね続ける必要があります。聖書に登場する人物や彼らの行動に関する記事などの多くは、このような主の前にある態度を私たちに教えてくれます。例えば、自分を売った兄弟たちに対して取ったヨセフの行動や、バテ・シェバとの関係を隠そうとしたダビデの態度は、具体的な形で、神が喜ぶ心の態度と、神が蔑む心の態度を教えています。それらを見た時に、私たちはどのように主が喜ぶ心をもって主に仕えていくことができるのかを具体的に考えていくのです。またみことばは、具体的にどのような変化をしなければならないかを教えています。例えば、エペソ 4:25-32 では、私たちが求めるべき変化が列挙されています。適用をするにあたって、私たちは常に変化を考えています。「この真理を、どのように自分の生活に当てはめることができるか？」という質問の回答は、「神が、どのような変化を私に求めているのか？」という質問に答えを出していくことによって、より具体的なものになっていくのです。

適用を見つけるために、私たちはこのような質問を解釈して、理解した真理に投げかけ続けなければなりません。真理は1つですが、その適用は無数にあるのです。1度学んだ箇所を再び学ぶ時、私たちは度々新しい発見をします。より深い知識の故に、真理の詳細をより良く理解し、より多くの適用に気づかされるのです。違う状況の中で、同じみことばを新しい角度から見つめることができます。真理

は変わりませんが、適用の方向性が大きく変わることがあります。そして、それらの適用は、私たちをより主に似た者とするために役立っていくのです。

2. 適用を見つけた後に考えるべきこと

多くのクリスチャンたちが抱えている共通の問題は、「私は変わらない…」ということです。「みことばを学ぶことによって、神が求めていることは何か、また何をしなければならぬかを理解しても、実際にそのように生きることができない…」と嘆く人々があまにも多くいらっしゃいます。このような状態は、クリスチャンにとって危険な状態です。変化の欠如は、落胆を生み出すからです。「神は私を変えることができない…」という結論に達する人すらいるのです。なぜ、このような状態に陥ってしまうのでしょうか？ どうして、私たちは具体的な成長を遂げることに困難を感じるのでしょうか？

もちろん、そこには様々な問題がありますが、1番の問題は適用がされない…、または、適用が実践されないところにあります。知識を持ってはいても、その知識を現実のものとするために、何をどのようにすれば良いのかを知らないのです。例えば、教会は青年たちに対して、「性的関係を持つことは、神が喜ばれないことである。」と教え、『神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。』（I テサロニケ 4:3）というみことばを彼らに告げます。しかし、それ以上の導きをすることがないので、青年たちはどのように聖い者として生きていったら良いのかを知らないままです。これは、まるで子どもたちに対して、「とにかく打て！」と言って、160 キロの速球を投げるピッチングマシンの前に、子どもを立たせるようなものです。打たないといけないということは分かっている、どのようにバットを持って良いのかさえ分かっていない子どもは、160キロの速球を打ち返すことなど到底できないでしょう。それと同様に、「聖くなりなさい！」ということは分かっている、その方法を知らないならば、欲望を駆り立てようと誘惑する世の中で、聖くあり続けることはあまにも困難なことなのです。

適用は、ただ単に、「真理が、どう自分に当てはまるか？」と言うことを考えることではありません。それをどのように実践することができるかを考え、それを行っていくことまで含まれるのです。そこで、次に適用を見出した後に行うべき事柄を、幾つかの例を通して考えていきましょう。

① 適用を実践するための計画を建てる

みことばを理解し、「ああ、その通りだ。私も変わらないといけない…」と感じることは誰にでもあるでしょう。しかし、それを具体的に、どのように行っていくかに関して、私たちはあまにも考えを持たないことが多すぎます。学んだ真理と、その適用を実際の生活に生かしていくために何をしなければならないかを具体的に計画していく必要があるのです。私たちは適用を理解していくことによって、自動的に変わっていくわけではありません。それ故に、どうすれば最も効果的に真理を適用することができるかということを考えていかなければならないのです。

では、聖くなるための計画とは、どのような計画でしょう？ 例えば、帰宅する道に誘惑を受けるような場所があるとしましょう。計画を建てる人は、自分が誘惑に弱いことを知っているが故に、その場所を通らない帰り道を考えます。買い物はできる限り、誘惑を受ける雑誌などを見ることがない店で買うことを計画します。そして、どうしても、そのような場所に行かなければならない時は、夜間のような、人が少ない時に行かないように心掛けます。計画を建てる人は、どうすれば自分が聖くあることができるかを考え、それをまとめるのです。どのような人たちと時間を過ごし、どのようなテレビ番組を好み、どのような雑誌に目を通し、どのようなことを考える生活を送るのかを吟味して、自分の心が誘惑から遠ざかるための計画を建てるのです。

また、どうやってそのような誘惑に打ち勝っていくかを学んでいく必要もあります。ただ単に、誘惑を避けているだけでは、充分ではありません。避けることができない状況が起こったとしても、その中で正しい選択をすることができるように鍛錬すべきです。そのために、どのようなことを学び、どのようなことを考え、どのような心の態度をもって生きるのかを知る必要があります。恋愛関係にある男女が、お互い時間を取って相手を知ることは必要なことです。その中であって、どのように聖さを保つかということは、「2人

きりにならない。」ということだけで解決する問題ではないのです。自分たちの関係に心を配り…、祈りによって支え、サポートしてくれる兄弟姉妹たちが必要になります。それらの人たちが、どのように自分たちの関係を良く知ることができるか、計画を建てなければなりません。また、正しい関係を学ぶ環境が必要になります。模範となる人を探さなければなりません。こういったことが適用の具体的な実践として、挙げられるべきなのです。

②適用を実践するために必要なことを行いつける

どれだけ真理を実践しなければならないことを理解しても…、また、計画を建てたとしても、実際に、それを行うことがなければ何の意味もありません。私たちは、行わなければならないと分かっていることでも、時に、感情的に「やりたくない！」と思うことがあります。しかし、聖書が行うことを私たちに求めるならば、それを実践することを学んでいかなければなりません。これには、勇気と根気が必要です。私たちは長い年月をかけて、罪を行うことを習慣にしてきました。いわば、神に喜ばれないことをするという癖を身に付けてきたのです。長年の癖を変えることは、容易なことではありません。くじけそうになっても、それを実行し続けるという勇気と、どんなことがあってもやり遂げるという根気が必要です。具体的な計画は、それを実行し続けることを通して、変化をもたらすのです。

せっかく計画を建てても、いつまで経ってもそれを実践しないのでは、何も変化は起こりません。また、始めたとしても、三日坊主で終わっては意味がありません。聖書が何かを命じるならば、それを私たちはできるようになるまで、努力し続けなければなりません。みことばのどこにも、「1ヶ月続けてもできなければ、あきらめても良い。」とは書かれていないのです。

③適用を実践するために助けてくれる人を見つける

「私は弱いですから…」という言葉を目にするのが多くあります。真理を実践することができない時の言い訳の1つです。しかし、もし本当に弱いことが分かっているのなら、どうして助けを求めようとしないのでしょうか？ 私たちが実践しなければならないことを、信頼できる兄弟姉妹に分かち合い、お互いに責任を持ち合うことは、私たちが弱ければ弱いほど必要なことであるはずですが、助け合い、教え合い、戒め合うことが命じられているクリスチャンは、互いに対して責任を持ち合うべきなのです³⁷。それは、具体的にみことばを実践していくに当たって大きな原動力となります。誰かが自分の成長のために具体的に祈ってくれていることを知るの大きな励みであり、困難を打ち破っていく勇気を与えてくれます。間違った道を進むことがないように、自分のことを見守り…、導いてくれる人がいることは、大きな助けとなります。

ところが、真理を知り、適用を理解し、計画を建て、実行しようと努力しても、他の人に知られないように秘密裏に、それを実践しようとする人があまりにも多いのです。そして、成長を遂げていかない大きな原因も、そこにあるのです。主は、お互いの成長のために、同じ志を持って生きる兄弟姉妹を与えてくれています。誰もが自分の弱さを知っているが故に、自分一人でそれができるとするのは、高慢であると言っても過言ではないでしょう。もちろん、神が働いてくださって変化が起こります。しかし、神は私たちが愛する兄弟姉妹を通して、その働きをなしてください。適用をするにあたって、私たちはこれらのことも考えていくべきなのです。

④適用し実践していることを教える

私たちに、人からの助けを受けるだけでなく、人の成長を助ける働きをするという責任も与えられています。「自分が成長すれば良い。」という考えは、利己的な考えです。聖書は、私たちが互いに教え合うことを求めています(コロサイ 3:16 など)。「弟子を作りなさい！」と、イエス様は私たちに命じられました。それは、私たちが、すべてのことを完全に行うことができるようになったからそうするのではなく…、失敗し、葛藤する中であっても、主に忠実に生きようとする姿を通して、教えていくべきことなのです。

³⁷ ここで言う「責任を持つ」とは、できているかを聞いて確認するような、「お目付役」になったり、祈りをもって助けたりすることなどを指しています。

パウロは、自分が完全ではないことを宣言しながら、『私を見ならう者になってください。』（ピリピ 3:17）と言います。そして、模範とするのはパウロだけでなく、『あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。』と続けます。つまり、パウロを手本としている人たちも、他の人々の手本なのです。私たちも、それと同様に、真理を適用していく中で、他の人たちの手本となることを考えていなければなりません。それが、真理を適用するということでもあるのです。

頭だけ大きなクリスチャンになってしまわないように、私たちは学んだことを実践するように努め励まなければなりません。適用は、私たちが成長するために不可欠です。これをしっかりと行っていく時に、聖書の学びは、主に似た者になるという大きな実を結んでいくのです。

神のみことばである聖書ほど素晴らしいものは、この地上にありません。聖書は、私たちに救いの道を示し、私たちに主に喜ばれる生き方を教え、私たちに喜びを与え、私たちが正しい歩みをしていくことができるように助けてくれます。それ故に、私たちはこの聖書を理解することを心から求め続けなければならないのです。クリスチャンにとって、聖書の学びは楽しいものです。恋人からの手紙をもらった時と同じように、聖書を読む時、私たちの心はウキウキします。新しい発見をするたびに喜びに溢れ、自分の生涯が変わっていくことによって、主への感謝と愛が増し加わっていくのです。

あまりにも長い間、私たちクリスチャンは聖書の学びを放棄していたのかも知れません。「専門家が勉強していればそれで良い…」と考えるが故に、自分たちで、みことばの真理を知る喜びを失っているのかも知れません。しかし、ベレヤの信徒たちのように、自分たちでみことばを調べ、教えられていることが本当に正しいかを吟味することが必要です。そのためには、私たちクリスチャンが自分で聖書を読み、十分に観察することによって、そこに書かれていることを知り、解釈することによって、正しい理解を持たなければなりません。そして、聖書を学ぶ1番の理由である、私たちが主の命じることを実践することができるようになるために、私たちは適用をしっかりと行っていく必要があるのです。『心のいろいろな考えやほかりごとを判別することができ(る)』（ヘブル 4:12）みことばは、罪深い私たちが、主の前に正しい行いをしていくために、なくてはならないものなのです。

生ける神のみことばは、私たちを導き、養い、育て、励まし、勇気づけ、神の栄光を現す者として生きていくことができるようにしてくれます。私たちクリスチャンには、このみことばを理解することができます。そして、そのみことばを理解し、実践する責任が与えられています。それ故に、私たちは聖書を正しく解釈し、正しい適用をしていくために、みことばを学び続けていかなければなりません。

<質問>

問：今回の学びを通して、多くのクリスチャンに共通する問題点や間違いはありましたか？

問：神が喜んでくださる、正しいメッセージとは、どのようなものだと思いますか？

問：今後、(私たちの)教会に必要なメッセージは、どのようなものだと思いますか？

また、あなた自身に必要な学びとは、どのようなものでしょうか？